

博士学位論文

日中両言語の副詞節の非従属化構文の
言語形式と談話機能
—認知類型論の観点から—

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

江 俊賢

2020 年 6 月

目次

第1章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 非従属化構文 (insubordinated construction) について.....	8
1.3 研究対象.....	9
1.4 研究方法とデータ.....	13
1.5 論文の構成.....	14
第2章 本研究の理論的背景.....	15
2.1 はじめに.....	15
2.2 認知類型論 (cognitive typology).....	17
2.3 主観性(subjectificativity)と間主観性 (intersubjectivity).....	18
2.4 談話分析 (discourse analysis).....	20
第3章 先行研究.....	27
3.1 はじめに.....	27
3.2 非従属化構文のメカニズムと談話機能についての先行研究.....	27
3.2.1 非従属化構文のメカニズムについて.....	27
3.2.2 非従属化構文の談話機能について.....	29
3.3 日本語の非従属化構文に関する先行研究.....	31
3.4 中国語の非従属化構文に関する先行研究.....	36
3.5 日中対照の観点からみた非従属化構文に関する先行研究.....	39
3.6 先行研究の問題点.....	41
3.7 本章のまとめ.....	45
第4章 日中両言語の条件節の非従属化構文の形式と談話機能.....	46
4.1 はじめに.....	46
4.2 中国語の条件節構文の談話の情報構造に関わる用法: 先行談話内容に対する条件提示.....	49
4.3 中国語の条件節構文の対人的動機付け.....	52

4.3.1 参照情報を提示するタイプ.....	52
4.3.1.1 聞き手の認識を改めさせる用法.....	53
4.3.1.2 聞き手にさらなる詳しい情報を求める用法.....	56
4.3.2 評価を表すモーダル機能を担うタイプ.....	60
4.4 中国語の条件節構文の談話機能と対人的動機付け.....	63
4.5 日本語のタラ・レバ節の非従属化構文との対比.....	64
4.5.1 日中両言語で共通している条件節の非従属化構文の用法 (1): 先行談話内容に対する条件提示.....	65
4.5.2 日中両言語で共通している条件節の非従属化構文の用法 (2): 聞き手への情報要求の用法.....	66
4.5.3 日中両言語で異なる条件節の非従属化構文の用法: 「評価モダリティ」から対人的機能へ.....	67
4.6 本章のまとめ.....	72
第5章 日中両言語の譲歩節の非従属化構文の形式と談話機能.....	74
5.1 はじめに.....	74
5.2 中国語の譲歩節構文の談話の情報構造に関わる用法: 先行談話への「自己修正／情報補足／話題導入」の機能.....	77
5.2.1 先行談話への「自己修正」の機能.....	79
5.2.2 先行談話への「情報補足」の機能.....	82
5.2.3 先行談話に関連した話題を導入する機能.....	84
5.3 「雖然」節構文の対人的動機付け: 不同意の発話行為を緩和する効果.....	89
5.4 中国語の「雖然」節構文の談話構造や談話ストラテジー.....	90
5.5 日本語のケド節の非従属化構文との対比.....	91
5.5.1 日中両言語で共通している譲歩節の非従属化構文の用法: 「部分的同意」を示す場合.....	92
5.5.2 日中両言語で異なる譲歩節の非従属化構文の用法 (1): 先行談話への自己修正／情報補足.....	93
5.5.3 日中両言語で異なる譲歩節の非従属化構文の用法 (2): 話題を導入する機能.....	97

5.6	本章のまとめ	101
第6章	日中両言語の理由節の非従属化構文の形式と談話機能	103
6.1	はじめに	103
6.2	中国語の「因為」節構文の談話の情報構造に関わる用法	105
6.2.1	先行談話への「理由の説明／相手の意見への同調／質疑応答」	105
6.2.2	先行談話における聞き手の認識を修正する機能	108
6.2.3	発話の途中に挿入された「因為」節構文: 「先行談話への理由づけ」から「話題を展開する」談話機能へ	109
6.2.4	新しい情報を導入する用法	114
6.3	「因為」節構文の対人的動機付け:「断言回避」の談話機能	117
6.4	中国語の理由節構文の談話機能や談話ストラテジー	119
6.5	日本語の「カラ節」の非従属化構文との対比	120
6.5.1	日中両言語で共通している理由節の非従属化構文の用法 (1): 先行談話に対する「カラ」節	120
6.5.2	日中両言語で共通している理由節の非従属化構文の用法 (2): 「話題展開機能」の「カラ」節	121
6.5.3	日中両言語で異なる理由節の非従属化構文の用法 (1): 「聞き手の認識に対する修正」タイプ	123
6.5.4	日中両言語で異なる理由節の非従属化構文の用法 (2): 新情報の導入機能	125
6.6	本章のまとめ	127
第7章	日中両言語の副詞節の従属的マーキングの 形式と談話機能	128
7.1	はじめに	128
7.2	日中両言語の副詞節の非従属化構文のタイプ	128
7.3	周辺部の談話機能から日中両言語の副詞節の非従属化構文の違い	132

7.3.1	談話の左と右の周辺部の談話機能.....	133
7.3.2	発話の周辺部と日中両言語の副詞節の非従属化構文の談話機能	134
7.4	英語との対比: 条件節の非従属化構文を中心に.....	142
7.5	本章のまとめ.....	145
第 8 章	結論.....	147
8.1	本研究のまとめ.....	147
8.2	非従属化構文に関する研究への示唆.....	149
8.3	今後の課題と展望.....	150
	謝辞.....	152
	参考文献.....	153

凡例

トランスクリプトに用いる記号一覧

I. 『NCCU Corpus of Spoken Chinese』におけるトランスクリプトの記号一覧

[]	speech overlap
..	short pause
...	medium pause
...(N)	long pause
(0)	no pause across turns
@	laugh
=	lengthening
X	undecipherable syllable
<X X>	uncertain speech
<L2 L2>	switching from Taiwan Mandarin to English
<L3 L3>	switching from Taiwan Mandarin to Taiwan Southern Min
<L4 L4>	switching from Taiwan Mandarin to Japanese
<L5 L5>	switching from Taiwan Mandarin to Taiwan Hakka

(出典: NCCU Corpus of Spoken Chinese 『政治大學國語口語語料庫』)

II. 『名大会話コーパス』と TalkBank におけるトランスクリプトの記号一覧

[オーバーラップの開始位置
]	オーバーラップの終了位置
:	音の引き延ばし。音の伸びの長さに応じてコロンの 数を増やしていく。
-	音の途切れ
.	語尾の音調が下がっている場合

?	語尾の音が上がっている場合
,	音が少し上がって弾みがついていて続きがあることを予測させる場合
↑↓	音の調子の急な上昇や降下があることを示す。
°文字°	声が小さい部分は前後を「。」で囲む。
h	呼気音。。呼気背が長くなるごとに h の数を増やしていく
.h	吸気音。吸気音の長さに応じて h の数を調整する
(h)	笑い
hh / .hh	話しながらでない笑いを示す。
文(h)字(h)	呼気音
<文字>	他の部分より目立って遅いスピードで発話されたことを示す
>文字<	他の部分より目立って早いスピードで発話されたことを示す
(文字)	発話の背景や要約、その他の転写する人のコメントを示す
(.....)	聞き取り困難な発話を示す

(出典: 高木智世, 細田由利, & 森田笑 2016『会話分析の基礎』)

Ⅲ. 『千葉大学 3 人会話コーパス』におけるトランスクリプトの記号一覧

(0.334)	0.1 秒以上の発話単位内休止（数字は秒）
(.)	0.1 秒未満の発話単位内休止
:	非語彙的な音の引き伸ばし【暫定的】
%	非語彙的な音の詰まり
-	語の中断
?	上昇調【暫定的】
(F あの)	フィラー
(I うん)	応答系・感情表出系感動詞
(T チョ- ちよつと)	言いさし（意図された語が同定可能）
(D スハ)	言いさし（意図された語が不明）

(W ジュオー 授業)	言い誤りや非標準的な発音
(K り% つ 律)	漢字表記できなくなった文字
(R 木村)	固有名を仮名（かめい）に置き換えたもの
(歌ハニー)	歌いながらの発話
<声>	聞き取れないか、言語音と見なせない音声
<笑>	発話を伴わない笑い
<息>	呼気・吸気【暫定的】

(出典: 伝康晴, & 榎本美香 2014 『千葉大学3 人会話コーパス』使用説明書)

グロス略語と記号一覧：

=	clitic boundary	PAST	past
1SG	first person singular	P.CD	connective particle for conditional
2SG	second person singular	PFV	perfective
3SG	third person singular	POL	politeness
ADV	adverb	PRS	present tense
ADVZR	adverbializer	Q	question
AUX	auxiliary	REFL	reflexive
CAL	causal	SFP	sentence-final particle
CL	classifier	TOP	topic
COBL	complementizing		
COND	conditional		
CONJ	conjunctive		
COP	copula		
DM	discourse marker		
DEP	dependent		
HON	honorific		
IE	Intimate ending		
IMM	immediate		
IMP	imperative		
INF	infinitive		
LOC	locative		
MOD	mood		
NEG	negation		
NMLZ	nominalizer		
NOM	nominative		
NPS	non-past		
OBJ	object		

第1章 序論

1.1 はじめに

我々の日常生活における談話表現は、常に規範文法に従って表現されているのではない。談話表現は現実における談話場面と談話文脈 (discourse context) の中で成立している。談話の中には常に話し手と聞き手などの参加者がおり、参加者たちがお互いの背景知識を照合しながら、主張、命令、質問、依頼、応答、感嘆などのやりとりが行われ、談話を進めていく。ホッパー (2011: 242) は談話表現について (1) のように指摘している。

- (1) 現実の生きた談話は通常の意味の文法とは無関係なあらゆる種類の繰り返しに満ちているのだ... (中略) ... これらの表現は一般的に認められる内部構造をもった文や節である必然性はなく、しばしばひとまとまりのものとして使われる。その境界は、通常の意味記述における構成要素の境界—主部と述部、名詞句、前置詞句など—と合致することもあるし、ないこともある。さらに、ある文脈で定型句的な表現でも他の文脈ではそうならないこともある。

(ホッパー 2011: 242)

談話分析の研究は、話し手の発話行為の分析を重視する「発話行為理 (speech act theory)」 (Austin 1962, Searle 1969) や、会話の含意 (conversational implicature) に対する聞き手の推論プロセスと発話解釈 (utterance interpretation) に関する「関連性理論 (Relevance Theory)」 (Grice 1975, Dascal 1979, Sperber & Wilson 1995) などの語用論的理論がある。また近年、話し手と聞き手の双方のやりとりや発話のターンの構築を課題とする「相互行為言語学 (Interactional Linguistics)」が見られる。「相互行為言語学」の定義は、「そこで発される言葉は全て、それを埋め込んでいる相互行為と関連付けられて他の参加者から聞かれ、解釈される (Schegloff 2007: 244~245; 横森 2013: 9 訳)」として捉えられる、談話を分析するアプローチである。「相互行為言語学」のほかに、「動的語用論 (dynamic pragmatics)」の視点からの会話分析も近年注目され

ている (串田ほか 2007, Arundale 2008, Lauer 2013)。「動的語用論」とは発話が時間軸上に線条的に展開する特性を重視するという動的なプロセスが見られる。

「動的語用論」における発話解釈は、文法の表現に表されるものではなく、現実世界の談話の文脈によって常に変わっていくものであると定義されている (串田ほか 2007)。時間の流れの中で産出されるという視点から検討されている談話分析に関する研究において、「自然発話は、言い淀みや言い直し・言い差しなどの非流暢性 (disfluency)、あるいは「破格」(構造的不整合)も満ち溢れており、... (後略)。」と串田ほか (2007: v) が述べている。例えば、(2) は直後訂正の破格文である。

(2) A: うちはどうせ、1 時からしご、食事なのね、だいたい、普通。

B: おべんと買ってきて。

(野田 2007: 21)

直後訂正の破格文とは話し手が発話の中に誤りがあることに気づき、その誤りを訂正する内容を進行中の談話に挿入した文である (野田 2007)。(2) について、野田 (2007: 4) は「「しごと(仕事)」と言いかけて、それが誤りであることに気づき、...、「食事」と言い直している」と指摘している。一方、(3) は不完全な文になってる「発話影響の破格文」(同上)である。

(3) A: なんか頭わりーよね、みんな。

A: 〈笑い〉わりーよな。

A: それなんか、むだな動きが異常におおいよね、これ。

B: すべ、すべてをいっしょになんかやろうとするからー。〈言いよどみ〉

A: んー

B: 結局ー。

A: 結局また、あとでさあ、あの一、もういちどおんなじこと繰り返してやらなくちゃなんなくなっちゃうのよ。

(野田 2007: 21)

(3)について、野田 (2007: 20) は「話し手が文を発話している途中で聞き手の割り込みなどがあり、それに影響された結果、文の内容が変わったり文がとぎれたりして、文の形が整わなくなったものである。」と指摘している。

他方、日常会話では話し言葉における省略表現がよく観察されている。尹 (2017: 88) は「「省略 (ellipsis) 」とは、あえて言わなくても文脈などから伝わる要素を省くことをいう。なるべく労力の消費を抑えた効率のよいやり方で意図したメッセージを伝えようとする行為は、おそらく言語普遍的に観察されるものであると考えられる。」と述べている。例えば、(4) の「へえ、君が?」は述部の「行くの」が省略されている。

(4) (会社の退社どき)

A : お、きょうは早いね。

B : うん。

A : どこかへ飲みに?

B : いや、勉強会。

A : へえ、君が?

(水谷 1989: 50; 下線は筆者による)

英語と中国語でも日本語と似たような省略表現が可能である (英語: *You?* (水谷 1989: 50)、中国語: 「你 (「あなた」)?」)。しかし、話し言葉における省略表現は決して言語間で一致しているわけではなく、言語の種類と場面によって省略されるものが異なる。例えば、(5) のような待遇表現は、日本語は言い尽くすことを避けるのに対して、中国語と英語は文を完結させるのが普通である (水谷 1989: 52~53)。

(5) 日本語: 「何か」 (「何かご用ですか」の省略)

英語: Can I help you?

中国語: 「請問有什麼事情嗎? (何かご用ですか) 」

(水谷 1989: 52; 中国語の訳文は筆者による)

また、会話の流暢性の保持と発話権の譲渡などのために、日本語では「けど」「が」「から」を含む「従属節¹のみの言語形式」が使われることが多い (例 6, 同上: 60)。

(6) (魚は骨があって食べにくいと言う妻に)

夫：そうかなあ。魚のほうが味に変化があってすきなんだけど。

(英語)

H: Hmm...fish give you so many varieties of flavors...I like them a lot...

(水谷 1989: 53)

(6) と (7) の日本語の「従属節のみの言語形式」に対して、SVO 言語²の英語と中国語では、「ゆれながら長く引くような調子」(水谷 1989: 60) のイントネーションの調整 ((英語, 例 6))、或いは「終助詞 (sentence final particle (SFP))」(Yap et al. 2014) で表現されていることが多いと考えられる ((中国語, 例 7))。

(7) お客様のスコップなら、そっちにありますけど……

「客官 您 用的 铁铲、 就 在 您 身边 呀」

お客 2SG-POL 使う スコップ 助詞 ある 2SG-POL そば SFP

(日中対訳コーパス・『砂の女』, 田 2015: 106; グロス は 筆者による)

また、(8) の日本語の「タラ」で終わる発話表現は「勧め (白川 2009: 73)」の談話機能があると従来の研究において指摘されている。

¹ 従属節は「複文で、主節に対し名詞・形容詞・副詞に相当する機能をもって従属する節」(大辞林 第三版) である。本研究は主節に対し、副詞に相当する機能を持って従属する「副詞節」を研究対象としている。

² 言語類型論において、SOV 言語とは、主語 (Subject)、目的語 (Object)、動詞 (Verb) の語順を取る言語である。SOV 言語は日本語、ラテン語、朝鮮語などがある。一方、SVO 言語とは、主語、動詞、目的語の語順を取る言語である。SVO 言語は中国語、英語やドイツ語などがある。ただし、中国語においても、SVO の語順が変わることがある。例えば、中国語は OSV の語順でも表現できる。(例: 我 (S) 不吃 (V) 飯 (O)。 (わたしがご飯を食べない。)/ 飯 (O)、我 (S) 不吃 (V)。 (ご飯は、私が食べない。))

(8) 一の瀬：「五代くん、今日病院に検査しに行くんだってさ。」

響子：「あら、そうですか。」

一の瀬：「付いてってやったら?」

響子：「そんな……子供じゃあるまいし。」

(白川 2009: 74)

次に、(9) の日本語の「カラ」で終わる発話表現は聞き手に前提情報を提示することによって、聞き手に何かをするように求めている用法である (Evans 2007, 白川 2009, Narrog 2016)。

(9) 響子 「大学祭に行ってもいいですか?」

五代 「えっ……!?あの……大学祭って僕の大学の……?」

響子 「はい。じゃまにならないように、適当にやりますから……」

五代 「邪魔なんてとんでもない!!ぼくご案内します」

(白川 2009: 55)

例えば、(9) では響子の「適当にやりますから」は五代に前提情報を提示することによって、「行かせてください」のように五代に許可を求めている用法である。さらに、(8) と (9) は中国語の条件を表す「如果 (「もし」)」と原因・理由を表す「因為 (「から」)」に直訳することが不可能であると思われる ((8', 9'))。

(8')? 一の瀬：「聽說五代今天去醫院做檢查。」

響子：「哎呀，這樣子啊。」

一の瀬：「如果 你 跟 他 去 的話 呢？」

もし 2SG 付く 3SG 行く 条件節マーカー 疑問-SFP

響子：「誇張……又不是小孩子。」

(9')? 響子 「我可以去學園祭嗎?」

五代 「啊……!?那個……學園祭，我學校的……?」

響子 「對。我 不會 打擾 你，因為 我 會 有分寸的……」

はい 1SG 否定 じゃま 2SG から 1SG する 適当にやります

五代 「說什麼打擾!!我去帶妳。」

ここで興味深いのは、英語と中国語のような SVO 言語に、SOV 言語である日本語の (6)~(9) のような「従属節のみの言語形式」が存在しているのかどうかである。もし「従属節のみの言語形式」が英語、中国語に存在しているのであれば、それはどのような機能を果たしているのだろうか。例えば、中国語には、次の (10) のような表現が存在するが、(10) で使われているような譲歩節の「雖然（「けど」）」節による発話表現は日本語の「けど節」に言い換えることができないと考えられる ((10'))。

(10) (大学4年生の体育の授業の話)

- 1 A: 下學期可以超修, 我大三就可以畢業了。加上,
- 2 B: 可是, 要那麼早畢業好嗎? 沒有那麼誇張喔!!
- 3 A: 沒有啦!! 大四是體育必修啊!!
- 4 B: 對啊! 體育必修。
- 5→ A: 雖然 現在, 現在 什麼 法律 又要 規定 變 選修
suīrán いま いま なんか 法律 また 規定する なる 選択科目
- 6 了 啊? 大四,
終助詞 SFP 四年生
- 7 B: 變選修了喔?
- 8 A: 快了呀!
- 9 B: 變選修了喔?
- 10 A: 對啊! 他說大四選修, 大...,
- 11 B: 那有沒有學分?
- 12 A: 有, 有學分。

(SINICA)

- (10') 1 A: 来学期は先に(大学4年生の)履修単位を取ることができるから、そうしたら、3年で卒業できるよ。それに...
- 2 B: でも、そんな早く卒業するって本当にいいの。それはもってのほかだよ。
- 3 A: 冗談だよ。4年生の体育の授業は必修科目だから。

- 4 B: そうだよ、体育の授業は必修科目だよ。
- 5→ ?A: いま法律でなんかそれを選択科目にする話が
- 6 あるじゃないけど? 4年生。
- 7 B: もう選択科目になってる?
- 8 A: もうすぐだよ。
- 9 B: もう選択科目になってる?
- 10 A: そうよ! 4年生で選択科目になるって、大 (学四年) ...
- 11 B: 単位がある?
- 12 A: ある、単位がある。

上の (10) 例では A と B は大学 4 年生の体育の授業について話しており、1~4 行目は、「体育の授業は必修科目である」ということに関する談話である。そして、5 行目で A は「雖然」節を通して、「体育の授業は必修科目である」に関連している内容の「体育の授業は選択科目になる」という話題を導入している。では、なぜ (10) のような「雖然」節は日本語のケド節で表現できないのか、日中両言語の「従属節のみの言語形式」にはどのような差異があるのか、という問題について、本研究では考察したいと思う。

これまでの「従属節のみの言語形式」についての研究は、日本語においてすでに多く研究されており、「タラ・レバ節 (条件節) / ケド節 (譲歩節) / カラ節 (理由節)」の語用論的効果や対人的機能に着目しているものが多い (Ohori 1995, 曹 2000, 大堀 2002, 白川 2009, Kato 2013, 加藤 2014)。それに対して、管見の限り、中国語の「条件節、譲歩節、理由節」などの複文の「従属節で終わる発話表現」についての研究は依然として数が少ない。また、従来の研究で、ヘッジ表現やポライトネス用法に機能拡張したことが多いと判明した日本語に対して、中国語の「従属節のみの言語形式」は談話において、どんな談話機能を担っているのだろうか。

本研究は主に日本語の「従属節のみの言語形式」の研究成果を援用し、中国語の「従属節のみの言語形式」の用法を分析する。また、中国語との対比により日本語の特徴についてもより明らかにし、さらに、英語や韓国語などの他の言語との対比により、日中両言語の「従属節のみの言語形式」の差異を類型論的に分析したいと思う。

1.2 非従属化構文(*insubordinated construction*)について

前節の (6) から (9) のような「従属節のみの言語形式」を、非従属化 (*insubordination*) と呼び、その構文は非従属化構文 (*insubordinated construction*) と称される (Evans 2007, 2009, Evans & Watanabe 2016)。本研究は以後「従属節で終わる発話表現」を「非従属化構文」と称する。

これまでに、従属節の非従属化の現象を通言語的に解明しようとする研究は豊富に蓄積されている (Ohori 1995, Rhee 2002, 2012, Higashiizumi 2006, Evans 2007, Mithun 2008, Evans & Watanabe 2016)。Evans (2007: 367) によると、非従属化構文は“the conventionalized main-clause use of what, on *prima facie* grounds, appear to be formally subordinate clauses” (「形式的には一見明白な基準で従属節のように見えるものの慣習化された主節用法」(堀江・パルデシ 2009: 126 訳)) と定義される。Evans (2007: 371) は、非従属化構文のメカニズムは「主節の省略 (*ellipsis of main clause*) 」であると指摘している。

他方、非従属化構文の構造上の有利な前提条件 (*favourable structural preconditions*) について、Evans & Watanabe (2016: 30) は「従属節が主節の前に現れる『左枝わかれ構文 (“left-branching structures where the subordinate clause precedes the main clause”) 』と「明白な従属的マーキングがある言語 (“languages with clear dependent-marking”) 」という特徴を有する言語は、非従属化の現象が起こりやすいと指摘している。例えば、(11) の日本語の複文は従属節が主節の前に現れ、従属節の接続助詞「が／けど」を持っている。

(11) 太郎は優秀な言語学者だ {が／けど}、英語が苦手だ。

(Kato 2013: 21; 原文は英語である。日本語の表記は筆者による)

一方、中国語の複文においては、「左枝わかれ構文」と「明白な従属的マーキング (接続詞, *conjunction*) 」の二つの特徴を備えているものの、従属節の非従属化は日本語に比べて顕著ではないと思われる (Yap et al. 2014)。例えば、(12) の中国語の「譲歩転折複文」(黄 1990) は日本語の (11) と同じく従属節が主節の前に現れ、従属節の従属的マーキング「虽然 (*suīrán*) 」³を持っている

³ 「虽然他年紀大 (彼は年をとっているが) 」。本論では「繁体字」を使用する。ただし、用例の原文は「簡体字」の場合、簡体字のままで当該の例を示す。

る。

(12) 虽然 他 年紀大，但是 身体 很 健康。

suīrán –CONJ 3SG 年を取る でも 体 とても 健康

「彼は年をとっているが、身体はとても健康だ。」

(田 2015: 98; グロスは筆者による)

しかし、(12') のように、主節が省略された「雖然」節を単独で用いた場合、非文となる。このように、Evans & Watanabe (2016) で述べられている「非従属化構文の構造上の有利な前提条件」は中国語においては満たされているにも関わらず、非従属化構文が実現しにくいと思われる。

(12')? 虽然他年紀大。

「彼は年をとっているが。」

上述の譲歩節や条件節、理由節を含む複文の主節の省略現象から、日中両言語の非従属化構文の談話機能が異なっていることがわかった。次の 1.3 では本研究の研究対象について述べる。1.4 では研究方法と使用するコーパスを紹介する。最後に 1.5 は本論文の構成である。

1.3 研究対象

日本語の複文の接続助詞には、原因・理由を表す「～ので／から／ため」、条件・仮定を表す「～たら／ば／と／なら」、譲歩的意味を表す「～けど／ても／もし～」、時系列を表す「～あと／まえに／とき」、動詞のテ形節、並列節における「～し」などがある。

一方、中国語の複文について、鳥井 (2004) は中国語の複文を「連合複文(等立・聯合複句)」と「主従複文 (主従・偏正複句)」に分けており、「複文中の節を接続する虚詞は大部分が接続詞と副詞であり、さらに一部分には関連的役割を果たす句がある」 (p. 76) と述べている。

「連合複文」とは、「節と節とが対等の資格、つまり連合関係で結合した」ものであり、「主従複文」とは「いずれかの節が主要で、他の節が付属的な関

係、つまり主従関係で結合した」ものである（鳥井 2004: 79）。「連合複文」と「主従複文」は、(13) のように詳しく分類されている。

(13) 中国語の「連合複文」と「主従複文」

(13-1) 「連合複文」

a. 並列複文

(二つの節が対等に並列されているタイプ)

例: 他 去, 我 也 去。

3SG 行く 1SG も 行く

「彼が行き、私も行く。」

b. 時系列複文

(前後して時間差を置いて行くという違いがあるタイプ)

例: 他 去, 接着 我 去。

3SG 行く 続いて 1SG 行く

「彼が行き、続いて私が行く。」

c. 累進複文

(後ろの文を前の文より強調あるいは重要視しているタイプ)

例: 不僅 他 去, 而且 我 也 去。

だけではなく 3SG 行く かつ 1SG も 行く

「単に彼が行くだけでなく、かつ私も行く。」

d. 選択複文

(前後の文の内容がどちらか選択される意味があるタイプ)

例: 與其 他 去, 不如 我 去。

より 3SG 行く ほうがよい 1SG 行く

「彼が行くより、私が行くほうがよい。」

(13-2) 「主従複文」

a. 因果複文

(前文は原因となって、後ろの文は結果になったことを表しているタイプ)

例: 1. 因為 我 去, 所以 他 去。

ので 1SG 行く だから 3SG 行く

「私が行ったので、彼は行った。」

2. 既然 我 去，他 就 会 去。

からには 1SG 行く 3SG 助詞 する 行く

「私が行ったからには、彼も行ったはずだ。」

b. 逆接複文

(譲歩複文を含む。)⁴

例: 雖然 我 去，但是 他 没 去。

が 1SG 行く が 3SG 否定 行く

「私は行ったが、彼は行かなかった。」

c. 假定複文

(前文が仮定を、後ろの文がその結果を表しているタイプ)

例: 1. 如果 我 去，他 就 会 去。

もし 私 行く 彼 助詞 する 行く

「もし私が行ったら、彼は行くだろう。」

2. 即使 我 去，他 也 不 会 去。

たとえ...でも 1SG 行く 彼 も 否定 する 行く

「たとえ私が行っても、彼は行かないだろう。」

d. 条件複文

(前文が条件を、後ろの文がその結果を表しているタイプ)

例: 只要 我 去，他 就 会 去。

さえすれば 1SG 行く 3SG 助詞 する 行く

「私が行きさえすれば、彼は行くだろう。」

e. 連鎖複文

(前後の節にある同一の疑問代詞または数量詞が関数的・連鎖的に呼応し合うタイプ)

例: 我 去 哪里，他 就 去 哪里。

1SG 行く どこ 3SG 助詞 行く どこ

⁴鳥井 (2004: 87) は史錫堯 (1991) による「二つの節が表わす意味が順調に話し続けられていくのではなく、二番目〔後〕の節が表わす意味が最初〔前〕の節に対していうと、ある種の転換・逆接が生じる。このような二つの節が構成する複文は〈転折複句〉と称される」という中国語の逆接・譲歩複文の用法に対する定義を訳している。

「私がどこかへ行けば、彼はそのどこかの同じ所へ行く。
＝彼は私の行くところへ行く。」

(鳥井 2004: 79~80 ; グロスと日本語訳文の句点は筆者による)

本研究は非従属化構文を研究対象とするため、まず主従関係がない「連合複文」を分析対象から除く。また、本研究は従属節を示す接続詞が存在せず、節の前後関係から複文の意味を判断する「連鎖複文 ((13-2e))」、条件複文の (14a)、因果複文の (14b) を研究対象から除く。例えば、(14a) と (14b) は条件節または理由節を示す接続詞が存在せず、節の前後関係から従属節と主節との関係が判断される。また、(14a) は前節「明天下雨 (あした雨が降る)」が後節の「我们就不去公园了。(ぼくたちが公園へ行きません。)」の成立条件として使われている。(14b) は3行目の李平の「時間已經很晚了。(もう時間が遅いから。)」が友人の夏彭年の誘いを断る理由として使われている。

(14) a. 明天 下 雨，我们 就 不 去 公园 了。

あした 降る 雨 私たち 助詞 否定 行く 公園 SFP

「あした雨が降れば、ぼくたちは公園へ行きません。」

(鈴木 1990: 60)

b. 李 平：你 還 没有 走？

2SG まだ 否定 帰る

「まだ帰っていないの？」

夏彭年：我 等 你 呢。我們 去 喝杯 卦咖啡 好 嗎？

1SG 待つ 2SG SFP 私たち 行く 飲む コーヒー いい SFP

「あなたを待っていた。コーヒーを飲みに行かない？」

李 平：時間 已經 很晚 了。

時間 もう 遅い SFP

「もう時間が遅いから。」

(亦舒『嘆息橋』)

形式的に日本語の「逆接・譲歩節」、「条件・仮定節」、「理由節」と対応する中国語にはそれぞれ「雖然」「如果」「因為」などの従属節が見られる。従

って、本研究の主な研究対象は表 1 のようになる。

表 1. 本研究において取り上げる日中両言語の副詞節⁵

	日本語	中国語
条件・ 仮定節	P+ タラ・レバ、Q。	如果／要是／除非+ P 、Q。 只要 (一旦、只需) +P、就 (便) +Q。
逆接・ 譲歩節	P+ ケド、Q。	雖然+ P、Q。
理由節	P+ カラ、Q。	因為+ P、Q。

1.4 研究方法とデータ

本研究では認知類型論 (cognitive typology, 第 2 章で詳述する) のアプローチと共時的視点から日中両言語の非従属構文の形式と談話機能を考察し、日中両言語の自然会話 (naturally-occurring language) を考察のデータとする。また、本研究は主に日中両言語の非従属化の発話を取り上げて、対照研究を行うが、他の言語の非従属化の現象も取り入れることがある。なお、本研究は日中両言語の非従属構文の発話解釈のメカニズムの究明に重点を置くため、主に質的な分析を行う。各コーパスの詳細を表 2 に示す。

表 2. 本研究が使用するコーパス⁶

コーパス	使用言語	参与者(名)
The NCCU Corpus of Spoken Chinese (NCSC Corpus)	台湾華語	88
中央研究院漢語平衡語料庫 (Sinica Corpus)	台湾華語	記載なし
CallFriend TalkBank	台湾華語	60

⁵ P は従属節、Q は主節を示す。「右方主要部型言語 (right-headed languages, RHL) 」である日本語は、逆接節、条件節、理由節の接続助詞の位置が「従属節+接続助詞」となる。これに対して、「左方主要部型言語 (Left-headed languages, LHL) 」の中国語は、基本的に「接続詞+従属節」となっている。

⁶ 本研究で取り上げている例の表記と記号は当該コーパスの原文に従う。

CallFriend TalkBank	北京官話	35
CallHome TalkBank	北京官話	140
名大会話コーパス	日本語	198
CallFriend TalkBank	日本語	120
CallHome TalkBank	日本語	120
千葉大学 3 人会話コーパス	日本語	36

1.5 論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。本章に続く第 2 章では、本研究の理論的背景である「認知類型論 (cognitive typology)」、「(間)主観性 ((inter)subjectivity)」（Traugott 2003, 2010a, 2010b）、「談話分析 (discourse analysis)」を概観する。第 3 章では各言語の非従属化構文に関する先行研究を概観し、本研究の研究問題を明確にする。第 4 章から第 6 章では機能拡張の視点から、「副詞節」の「如果」節、「雖然」節、「因為」節の非従属化構文の発話解釈と対人的機能进行分析する。本研究は、上述の三つのケーススタディを通して、日中両言語の副詞節の非従属化構文の談話機能と構文形成のメカニズム进行分析することを目的とする。本研究の結果から、非従属化構文がモーダル機能や対人的機能を果たすために、日本語においては非従属化構文自体が「批判的な見解の語気を和らげる」や「丁寧な要求」などの効果を表せることに対して、中国語は上述の効果を表すために、先行する談話の文脈に依存しなければ、形式と意味が不完全な文になることが示唆される。これらの非従属化構文の発話解釈の違いにおいては、第 4~6 章で詳述し、第 7 章では、日中両言語の副詞節の従属的マーキングの形式と談話機能について考察する。第 8 章では、本研究の議論を総合的にまとめ、非従属化構文の研究への示唆、および今後の課題と展望について述べる。

第2章 本研究の理論的背景

2.1 はじめに

節と節の関係について、Hopper & Traugott (2003)⁷ は「parataxis (並列文) > hypotaxis (疑似並列文) > subordination (従属節)」⁸という連続的な文法化の段階を指摘した。これらは節と節が相互に依存しているかどうか (±dependent (±依存的))、その一つの節が埋め込み節の構造であるかどうか (±embedded (±埋めこみの)) によって分類されている。

(1) A cline of clause-combining constructions (節結合構文の階層)

parataxis	>	hypotaxis	>	subordination
(並列文)		(疑似並列文)		(従属節)
–dependent		+dependent		+dependent
–embedded		–embedded		+embedded

(Hopper & Traugott 2003: 178)

具体的には、「並列文」は二つ或いは二つ以上の文がお互いに依存せず、並列 (juxtaposition) している構文である。「疑似並列文」は「核 (nucleus)」となる節ともう一つの節が相互依存関係 (interdependency) となっている。日本語のテ形節、英語の同格の関係節 (appositional relatives)、複文の副詞節 (adverbial

⁷ Hopper & Traugott (2003) における用語と例文の日本語訳文はホッパー・トラウゴット 2003) による (以下同)。

⁸ (a) 「parataxis (並列文)」は次の例によって示される (Hopper & Traugott 2003: 173)。

• You keep smoking those cigarettes, you're gonna start coughing again.

「そんなにタバコを吸い続けると、また咳が出るよ。」

(b) 「hypotaxis (疑似並列文)」は次の例によって示される (同上: 174)。

• Kōto o nui-de hanga ni kaketa. (テ形節)

coat OBJ take-off-de hanger on hung

'I took my coat off and hung it on a hanger.'

「コートを脱いでハンガーにかける。」

• Bill Smith, who is our president, would like to meet with you. (同格の関係節)

「うちの社長であるビル・スミスがあなたに会いたいと言っています。」

• If you keep smoking those cigarettes, you're going to start coughing again. (副詞節)

「もしこのようにタバコを吸い続けるなら、あなたはまた咳をし始めるだろう。」

(c) 「subordination (従属節)」は以下の例によって示される (同上: 176)。

• I think the guy who just walked out of the store resembles the photo in the post-office window.

「その店から今出てきた男は、郵便局の窓に貼ってある写真に似ている。」

clauses) はこのタイプである。一方、「従属節」は、従属節 (subordinate clauses) が主節 (matrix clauses) に依存しているタイプである。

本研究で扱う副詞節は複文構造の中の従属節であり、「疑似並列文」の構文に当たる (Hopper & Traugott 2003: 183)。しかし、談話における非従属化の現象から見ると、逆接・譲歩節 (e.g. *although*-clauses)、条件・仮定節 (*if*-clauses)、理由節 (*because*-clauses) が「subordination (従属節)」に変化することではなく、非従属化構文に進み、上述の連続変化に違反し、節と節の依存関係から解放されている。これについて、Traugott (2017b) は構文の非従属化は「文法化 (grammaticalization)」或いは「脱文法化 (degrammaticalization)」に関わらず、対人的機能から検討する必要があると指摘している。

- (2) The model needs to be interactional because ‘insubordinates’ are strongly associated with dyadic, interactional language use (Kaltenböck 2016; Beijering et al. 2015).

(Traugott 2017b: 294)

「このモデルは相互行為的な視点からのものである必要がある。それは非従属化構文は二者間の相互行為的言語使用に強く結びついてるからである。」

上述の副詞節は構文の非従属化によって、対人的機能に特化したものが多いと指摘されている (Ohori 1995, Rhee 2002, 2012, Evans 2007, 白川 2009, Evans & Watanabe 2016)。「認知・機能的言語学」では、「文法を、日常的な相互行為および人間の認知能力と深く関わりを持ち、社会生活の根底にある幅広い範囲の資源の一部が慣習化されたもの」(堀江 2004: 252) として捉えている。本研究は話し手と聞き手の相互行為によって産出された日本語と中国語の自然談話のデータを収集して、その普遍性や談話機能を考察することから、「認知・機能的言語学」の立場で考察する。すなわち、本研究では、研究対象を分析する手法として、「認知・機能言語学」の立場をとり、自然会話における副詞節の非従属化構文の談話機能を解明する。

また、日本語や中国語の非従属化構文に現れる認知的意味や対人的動機づけを究明するために、複数の言語の調査との比較も不可欠だと考えられる。したがって、本研究は「認知類型論 (cognitive typology)」(堀江・パルデシ 2009,

中村・佐々木・野瀬 2015) のアプローチを理論的背景として日中両言語の非従属化構文の形式と談話機能の分析を行う。また、認知・機能言語学のアプローチは、作例ではなく、自然に生起するデータを研究対象とするため (堀江 2004, 中村・佐々木・野瀬 2015)、本研究で談話分析 (discourse analysis) の手法も援用して分析したいと思う。

2.2. 認知類型論 (cognitive typology)

「認知類型論」という理論的枠組みは、大まかに言えば、認知言語学と言語類型論の連携だと認識されている。堀江 (2004: 273) は「認知・機能言語学の発展に伴い、近年異なる言語の言語構造の背後にある「認知の型」を言語類型論的な観点から行う研究が活発化しつつある」と指摘している。また、中村・佐々木・野瀬 (2015) は「認知類型論」について次のように述べている。

- (3) 文法内に現れる機能の認知的側面や動機付けを探り、最終的には、人間の認識や心理、社会行動にその根拠を求める、認知的な枠組みに基づいて階層化や分類を行い、それらが複数の言語で調査・研究されるとき、言語類型論と認知言語学の合体、すなわち認知類型論の出番となる。

(中村・佐々木・野瀬 2015: 305)

「認知類型論」の具体的な分析対象は、堀江・パルデシ (2009) は次のように述べている。

- (i) 構文の使用頻度と機能拡張の程度、(ii) 言語構造に見られる形式と意味の対応関係の直接性 (意味的透明性) の度合い、(iii) 当該言語の言語形式に直接反映した (認知) 意味的区別や談話の中で言語形式に付与される談話機能などに関する通言語的変異と共通性を研究対象とする。そして、主観性と間主観性を含む広義の社会・文化的認知、伝達慣習 (コミュニケーション・プラクティス)、言語処理など (i)~(iii) の要因となる各言語の文法・語彙構造の認知・談話・处理的基盤の解明を目指す。

(堀江・パルデシ 2009: viii)

本研究は日本語と中国語（北京官話や台湾華語）の「副詞節の非従属化構文」という言語形式を研究対象としている。また、本研究で取り上げる副詞節の非従属化構文は自然に生起した談話の中から収集するものである。なお、本研究は主に日中両言語における「副詞節の非従属化構文」の言語形式や談話機能の対照分析を行い、同時に、他の言語とも比較する。

ホッパー（2011: 241）は「言語形式を自然に生起する文脈内において検討するなら、構造は創発的なものとしてのみ見られる」と指摘している。この観点から見ると、本研究で取り上げている日中両言語の「副詞節の非従属化構文」は副詞節であるのみならず、さらにある談話機能を表す創発的な表現とみてもよいと考えられている。しかし、ここで問題になるのはどのような表現が自然談話の表現に定着化してる表現とするのかということである。堀江（2004: 261）は「生起頻度は、談話と認知の密接な相関関係を探る上で重要な指標である」と指摘している。従って、本研究では質的な分析だけではなく、個々の使用例を考察し、量的な観点からも各言語の談話機能と認知的枠組みを考察する。

具体的に、本研究では、中国語の「雖然」と「因為」と「如果」副詞節の非従属化構文はどのような談話文脈で用いられているのか、日本語と他の言語との違いは何だろうか、という主要な問題が見られる。本研究はこれらの問題について、談話コーパスから日中両言語の用例を収集し分析することを通して、談話中に繰り返し生じる副詞節の非従属化構文の使用パターンを考察する。なお、談話における副詞節の創発的な表現を分析するために、「主観性 (subjectificativity) と間主観性 (intersubjectivity) 」や「談話分析」の手法を取り入れたいと思う。

2.3. 主観性 (subjectivity) と間主観性 (intersubjectivity)

主観性と間主観性の理論については、従来盛んに議論されてきた (Traugott 2003, 2010, Narrog 2017, Ghesquière et al. 2012)。Traugott (2003, 2010) は、ある命題 (proposition) または談話は、非主観的な意味から、主観化を経て、間主観化が起こるという「non-/less subjectivized (非主観) > subjectivized (主観化) > intersubjectivized (間主観化)」の言語変化の一方向性 (unidirectionality) を指摘している。(間)主観化の定義は以下である。

(4) 主観化と間主観化

- ・主観化 (subjectification) :

meanings are recruited by the speaker to encode and regulate attitudes and beliefs

「意味は話し手自身の態度や信条をコード化・規定するために話し手によって採用される。」

- ・間主観化 (intersubjectification) :

once subjectified, may be recruited to encode meanings centered on the Addressee.

「一度主観化されると、聞き手を中心においた意味をコード化されるために採用されうる。」

(Traugott 2010a: 4)

共時的な観点からみると、談話には主観性と間主観性という特徴がある (Traugott 2010a: 32)。主観性は主に話し手の態度や発話行為に関わるものであり、間主観性は「話し手と聞き手」という両者の視点で、談話において、話し手が聞き手に配慮をし、さまざまな相互行為が産出される特徴である。主観性と間主観性の定義は (5) のようになる。

(5) 主観性と間主観性

These expressions of subjectivity and intersubjectivity are expressions the prime semantic or pragmatic meaning of which is to index speaker attitude or viewpoint (subjectivity) and speaker's attention to addressee self-image (intersubjectivity).

(Traugott 2010a: 32)

「これらの主観性と間主観性の表現は、その主要な意味論的或いは語用論的意味が、話し手の態度や視点 (主観性) 又は聞き手の自己イメージへの話し手の注意 (間主観性) を示す表現である。」

一方、Traugott に対する反論としては、Narrog (2012, 2017) は Traugott (2003, 2010a, 2010b) の一方向性の仮説に反論し、談話機能を「speaker-orientation (subjectification, 話し手指向 (主観性)); hearer-orientation (intersubjectification, 聞き手指向 (間主観性)); discourse/text-orientation (談話・テキスト指向)」に分け

て、それぞれの意味を平等に扱い、Traugott の一方向性と逆方向の機能拡張も可能であることを指摘している (e.g. Subjective > Intersubjective > Textual / Connective, Narrog 2012: 40)。Ghesquière et al. (2012) は Narrog (2012) と同じく、テキスト的機能、主観性、間主観性の機能拡張の経路に明確な境界がなく、テキスト的機能に主観性と間主観性を含有することも可能であると指摘している。

このように、本研究は上述のアプローチから、主観性と間主観性の理論的枠組みに基づき、日中両言語の副詞節の非従属化構文の談話機能と対人的機能进行分析したいと思う。また、本研究は認知類型論のアプローチから日中両言語の副詞節の非従属化構文を考察し、非従属化構文の「認知・談話・处理的基盤の解明」(堀江・パルデシ 2009: viii) を目指していることから、自然談話をより詳しく分析するために、談話分析の手法からの分析が重要だと考えられる。

2.4 談話分析 (discourse analysis)

「談話分析と最も関係の深い文法形式の研究に、いわゆる「機能主義言語学 (functional linguistics) がある。」と林 (2008: 20) は指摘している。従来、機能主義言語学では情報構造の観点からの分析が注目されており、例えば、新旧情報の流れ (new-given information flow)、結束性 (cohesion)、一貫性 (coherence) などについて論じられている (同上: 22)。

Halliday (1970) の「体系的機能文法 (systemic functional grammar) 」は、文の機能を (i) 観念的 (ideational)、(ii) 対人的 (interpersonal)、(iii) テキスト的 (textual) の三つに分けている。

観念的意味内容は動作主 (actor)、対象 (patient)、受益者 (beneficiary) などの文法関係を表す命題的内容 (propositional content) に関わっている。対人的意味内容はムードあるいはモダリティの意味 (mood or modality) を表している。また、テキスト的意味内容については「文の文法構造およびイントネーション構造は、連続したテキストの中でそれらを相互に関連付け、またそれらが使われた状況にも関連付ける (“the grammatical and intonational structure of sentences relates them to one another in continuous texts and to the situations in which they are used”)」と Halliday (1970:140) は指摘している。すなわち、テキスト的談話機能は主題と題述 (theme-rheme)、話題とコメント (topic-comment)、新・旧情報

(new-given information) の情報構造などに関わっている (Halliday 1970)。とくに、新・旧情報の構造について、新情報は常に強勢のある音または明瞭な文法マーキングで表記されているとも指摘している。例えば、(6) の太字の *this* と *can't* が強勢のある音で発話されたことを示し、テキスト的意味内容において、新情報を表している。なお、*this gazebo can't* という新情報に対して、*have been built by Wren* は旧情報を表している。また *this gazebo* と *can't have been built by Wren* は「主題と題述」という主題構造 (thematic structure) となっている。

(6) // 4 **this** gazebo // 1 **can't** have been built by Wren //

(clause : theme... rheme.....)

(i.u.(1): new..... ; (2): new. given.....)

(Halliday 1970: 163; i.u.: information unit; 4=falling-rising tone; 1=falling tone)

また、(7) はテキストにおける「結束性」を示している例である。Halliday & Hasan (1976: 4) は「ある要素がその解釈を他の部分に依存し、そのことによって文連続をテキストたらしめること」(庵 1999: 10 訳) と定義している。例えば、(7b) の *them* は (7a) の内容に依存しない場合、*them* の指示対象が不明になる。すなわち、(7) の場合、(7b) の *them* は (7a) の内容に依存して、全体で一つのテキストを構成しているのである。

(7) (a) Wash and core six cooking apples. (b) Put them into a fireproof dish.

(Halliday & Hasan 1976: 4)

しかし、実際の談話表現では、上述の文法的または語彙的結束性の要素が見られず、談話の連鎖になっている談話が存在している。例えば、(8) は何らかの結束性を伴う要素を持っていないにも関わらず、(8) の三つの談話のターン自体が談話コンテキストになり、支離滅裂な談話になっていない。

(8) A : 電話だよ。

B : 俺、今風呂に入ってた。

A : 分かった。

(内田ほか 1989)

意味的に、(8) の A の「電話だよ」の発話は B に電話に出ることを依頼していると考えられる。B は「俺、今風呂に入ってた。」と A に返事して、A の要求を拒否する意味を表している。1 行目の A と 2 行目の B の談話内容においては指示や省略などの結束性の要素が見られず、自ら A の「依頼」と B の「拒否」という談話のやりとりとなっている。3 行目の A の「分かった」は「依頼-拒否 (1~2 行目)」の談話の意味を理解したことを表している。

これは従来、「首尾一貫性 (coherence)」として定義されている。談話の結束性と一貫性の違いに対して、内田ほか (1989) は「テキストにはそれを構成するセグメントの間の統語的關係 (結束性, cohesive) と共に、内容的な連関性 (首尾一貫性, coherence) が存在する。」と指摘している。

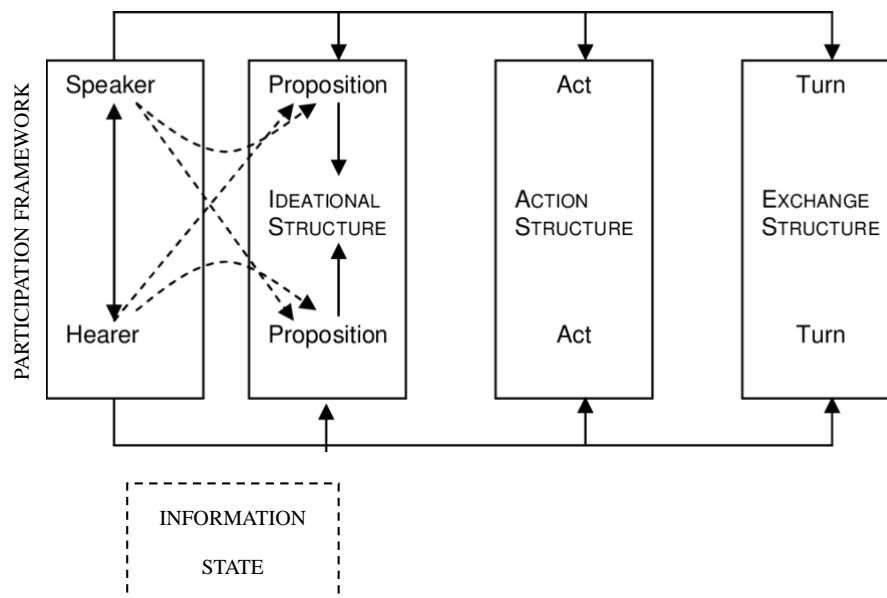
(8) のような自然会話の例に対して、Heine et al. (2016) は「談話の文法 (discourse grammar)」を「文の文法 (sentence grammar)」と「挿入句的な文法 (thetical grammar⁹)」に分けている。前者は文法の原則に基づいているものであり、後者は「文法的に独立している (syntactically independent)」(同上: 42)、「意味が非限定的である (“their meaning is non-restrictive”)」(同上: 42) などの特徴がある。例えば、Thetical Grammar における呼びかけ (vocative) の用法の例としては、*Today's topic, ladies and gentlemen, is astrophysics.* が挙げられている (同上: 42)。ladies and gentlemen は一つのまとまりのものとして、あるイベント或いは講演会の現場にいる人々に対する呼びかけのために使われている。言い換えれば、ladies and gentlemen は等位接続表現から「呼びかけ」という対人的機能に特化している。

Schiffrin (1987) は談話を分析する際、図 1 の談話モデルを提示している。自然会話に創発された非従属化構文はこのような談話モデルに大きく関わっていると考えられる。Schiffrin (1987) の談話モデルには 5 つの機能レベルがあ

⁹ Heine et al. (2016: 41) は「‘Thetical’というのは「挿入句」の逆成語である (“The term ‘Thetical’ is a back-formation of ‘parenthetical.’”)」と述べている。

る。

図 1. Schiffrin の談話モデル



Schiffrin's Discourse Coherence Model (adapted from Schiffrin 1987: 25)

まずは「**IDEATIONAL STRUCTURE** (概念的構造)」(澤田ほか 2017 訳, 図 1 に関わる訳は以下同) は命題の意味を表している (Schiffrin 1987: 26)。また、「**PARTICIPATION FRAMEWORK** (参与者構造)」は話し手、聞き手、談話参与者の関係に関わっている (同上: 27)。また、「**ACTION STRUCTURE** (行為構造)」は談話中、話し手がどのような発話行為を取るかに関わり、話題転換や会話切り出し (澤田ほか 2017: 27) などの会話管理のための発話行為が見られる。また、「**EXCHANGE STRUCTURE** (やりとり構造)」は話順交代システム (e.g. turn-taking system, Sacks et al. 1974) に関わり、話順取り、話順交代や返答を促すなどの発話行為が見られる。最後に、「**INFORMATION STATE** (情報状態)」は話し手と聞き手の「認知の能力 (cognitive capacities)」に関わり、主に話し手と聞き手の「知識の組織と管理 (organization and management of knowledge)」と「メタ知識 (meta-knowledge)」に関するものである (同上: 28)。メタ知識とは高次の知識であり、例えば、ある話題の背景知識はメタ知識の類に当たる。例えば、談話中においては、「聞き手が理解を達成するために (“for a hearer’s successful decoding of a speaker’s message”)」、話し手が聞き手に対し

て、付随、あるいは派生する知識を提供する。なお、上述の機能レベルは1つの機能レベルで談話の意味の一貫性を果たすことが可能だが、複数の機能レベルで談話の意味の一貫性を果たすことも可能である。例えば、(9) と (10) は1つの機能レベルで談話の意味の一貫性を果たす例である。

(9) Yeh, let's get back, because she'll never get home.

「ええ、戻りましょう、彼女は決して家に帰らないから。」

(10) And they holler Henry!!! Cause they really don't know!

「そして、彼らは Henry に大声で呼ぶ!!!彼らは本当に知らないから。」

(9) の *because* 構文は「行為構造」に関わり、*let's get back* という聞き手への要求に関連しており、(10) の *cause* は「概念的構造」に関わり、*And they holler Henry* との因果関係を示している。次の (11) は複数の機能レベルに関わっている用法である。

(11) Jack: [The rabbis preach, ["Don't intermarry"]

Freda: [But I did- [But I *did* say those intermarriages
that we have in this country are healthy.

Jack: [ラビは, [「異種族間の結婚をしない」と述べている。

Freda: [でも、私が- [でも、私が言った この国にあるこ
れらの異種族間の結婚は健全だって。

(Schiffrin 2001: 57; 日本語訳は筆者による)

(11) の *But* 構文の発話は「概念的構造」、「参与者構造」、「行為構造」、「やりとり構造」が同時に関わっている用法である (Schiffrin 2001: 57)。まず、(11) の *But* 構文は「異種族間の結婚は健全だ」の話の前置きとして発話されおり(概念的構造)、そして、同時に Jack に同意しないの態度 (*nonaligned with Jack*, 同上)を示しており (参与者構造)、また、先行する談話に反駁する行為を表し (行為構造)、同時に談話の発話権を取り、話し手自分のターンを開始するともなっている (やりとり構造)。

次の (12) の *you know* と (13) の *I mean* は情報状態に関わり、話し手と聞き手の間のある相互行為を達成している談話の標識となっている。

(12) Jack: a. Yeh but uh: ... that's about it, I guess.

b. Come t' think of it we hardly bother with anybody anymore.

c. Since I stopped bein' the committeeman, I g- that sort of gave me a break
t' get away from everybody.

Freda: d. No f- let's face it.

e. You do come home tired,

f. and I don't feel- I'm not in the mood anyway.

Jack: g. See we're old people already.=

Debby: h. I know how y'feel.

Jack: i. = I guess that-s-that-s what it is.

j. **Y'know** when you get older, you just don't keep socializing anymore.

k. There's nobody t'social [ize with!] Freda:

Freda: l. [Well we-] we went through
it away.

(13) [Were your parents pretty strict or...]

Irene: a. Not at all.

b. And not t'my disadvantage. **I mean** not t'my advantage as I- I
see it now,

c. because I got everything I wanted then.

(Schiffrin 1987: 277, 301)

(12) では Jack が *Y'know* (*you know*) の談話の標識で一般的世論を提供している (Schiffrin 1987: 277)。これは「情報状態」に関わる用法である。同時に、*Y'know* で示された内容は Jack 自身の論点 (a~c) を支持しているだけでなく、また聞き手の Freda の理解を得るために用いられているという「行為構造」の発話行為でもある (同上)。(13) の *I mean* は情報を補足する「情報状態」を果たす談話の標識だけではなく、また先行談話の内容を修正する働きもある「行為構造」の発話行為でもある (Schiffrin 1987: 301)。本研究は談話を分析する際、

認知類型論のアプローチから、自然会話を分析対象とし、個々の非従属化構文の表現を観察する。具体的に言えば、本研究は機能主義言語学の立場に立ち、上述の談話の意味の一貫性モデルにおける「概念的構造」、「参与者構造」、「行為構造」、「やりとり構造」、「情報状態」という5つの機能レベルから、非従属化構文の談話機能の分析に注目し、日中両言語の非従属化構文の談話機能の違いを考察する。

第3章 先行研究

3.1 はじめに

本章では日本語や中国語の非従属化構文の先行研究を概観する。これらの先行研究を踏まえ、本研究の問題点を明確化する。まず、3.2 は非従属化構文のメカニズムと機能に関する先行研究である。次に、3.3 は日本語の非従属化構文に関する先行研究であり、3.4 は中国語の非従属化構文に関する部分を概観する。次に、3.5 は日中両言語の対照研究に関する非従属化構文の先行研究であり、3.6 は先行研究の問題点を挙げる。3.7 は本章のまとめである。

3.2 非従属化構文のメカニズムと談話機能についての先行研究

3.2.1 非従属化構文のメカニズムについて

Evans (2007: 370) は非従属化構文の通時的な変化は「従属節→主節の省略→慣習的省略→主節としての再分析 (構文化)」という四つのプロセスがあると指摘している ((1))。

(1) The historical trajectory of insubordinated clauses (非従属化構文の歴史的軌道)

Subordination	Ellipsis	Conventionalized ellipsis	Reanalysis as main clause structure
「従属節」	「主節の省略」	「慣習化された省略」	「主節としての再分析」
(i)	(ii)	(iii)	(iv)
Subordinate construction	Ellipsis of main clause	Restriction of interpretation of ellipsed material	Conventionalized main clause use of formally subordinate clause (Constructionalization)
「従属構文」	「主節の省略」	「省略された主節 の解釈の制限」	「形式的に従属節のよう に見えるものを慣習的に 主節として使用すること (構文化)」

Evans (2007: 371-372) は、主節が省略された場合、(1) の (ii) は「どの主節が復元されるかということは談話の推論のプロセスによって決定され (“Which main clause is restored is determined by processes of conversational inference”）」、(iii) は「統語上、許されている復元 (可能な主節) の中には慣習によって排除されるものがある (“Certain syntactically permitted reconstructions become excluded by convention.”)」と述べている。(iii) に関して、Evans (2007: 373) はさらに「このグループに属する単独の従属節は単一の意味解釈のために、言語的・状況的な文脈を必要としない (“The isolated subordinated clauses of this group [of sentences] need no linguistic or situational context for a monosemous interpretation.”)」と述べている。例えば、Evans (2007: 373) は (2) のドイツ語の条件節 (*Wenn* (‘if’) 節) の非従属化構文は *what happens* (「何が起こるだろう」) に相当する主節が慣習的に省略されていると主張している。

(2) Und wenn ich nicht von ihr loskomm-e?

and if I not from her get.away-1SG

‘And if I don’t get away from her?’

[<Was geschieh-t, wenn ich nicht von ihr loskomm-e?]

what happen-3sa if I not from her get.away-1sa

(Evans 2007: 373)

「そして、私がもし彼女から離れなかったら [何が起こるだろう] ?」

(iv) の場合は (iii) のように、復元可能な主節が存在せず、従属節自体は固有の特定の意味を持っている用法である (“The construction now has a specific meaning of its own, and it may not be possible to restore any ellipsed material.” Evans 2007: 374)。例えば、(3) のスペイン語の条件節には主節が存在せず、条件的な意味が希薄化している。(3) の条件節自体は前の話し手の言説に対する反論を表す用法となっている (同上: 374)。

(3) [Sisters Q and R are looking at clothes in a shop window:]

Q: Ah, ¡mira qué chaqueta más chula!

ah look.IMP what jacket INT great

R: Si es horrible.

if it.is horrible

Q: ‘Hey, look what a great jacket!’

R: ‘But it’s horrible!’

(Evans 2007: 381)

なお、(ii) の場合は複数の解釈が可能で、主節の復元が可能である。(iii) の場合は単一の意味解釈しかできず、主節の復元も可能である。(iv) の場合も (iii) と同様に単一の意味解釈しかできないが、主節の復元が不可能である。非従属化構文の定義について、Evans (2007: 385-386) は (4) のように述べている。本研究は Evans (2007) の非従属化構文の定義に従う。

(4) My definition also requires that the resultant construction draw its material from only the old subordinate clause...In cases of insubordination, on the other hand, only material from the subordinate clause is overtly expressed. The missing material is merely alluded to — signalled by the presence of subordinate morphosyntax — and must be restored inferentially.

「私の定義は、結果として生じる構文が、本来の従属節構文からのみその要素を導き出すことも必要とする。.....他方、非従属化構文の場合には従属節内の要素のみが明示的に表出される。欠落した要素 (筆者注: 本研究では「主節」に相当する) は単に示唆されるだけであり—従属的な形態・統語的特徴の存在によって示されており—推論によって復元されなければならない。」

(Evans 2007: 385-386; 日本語の訳文は筆者による)

3.2.2 非従属化構文の談話機能について

非従属化構文の表現はよく対人的機能を表している (大堀 2002, Evans 2007, 白川 2009)。例えば、非従属化構文の対人的機能について、Evans (2007: 387) は

以下のように述べている。

- (5) By far the commonest type of insubordination is found in various types of clause concerned with interpersonal control - primarily imperatives and their milder forms such as hints and requests, but also permissives, warnings and threats.

「これまで最も一般的な非従属化構文は、対人的なコントロールに関わる、さまざまな節において観察される－その節とは、主に命令形および助言や要求のようなより強制力の弱い形式だが、他にも許可や警告、脅迫などの場合もある。」

(Evans 2007: 387¹⁰, 日本語の訳文は筆者による)

さらに、非従属化構文が用いられる場面について、Evans & Watanabe (2016: 31) は以下のように指摘している。

- (6) Insubordination appears particularly common when epistemic assessment is at issue, as well as in directives and cases where the speaker would rather avoid stating a fact judged unpalatable to the addressee.

「非従属化は、指示表現や話し手が聞き手にとって不快であると判断される事実の陳述を避けたい場合のみならず、認識的な評価が問題となっている場合にも出現することが特に一般的であるように思われる」

(Evans & Watanabe 2016: 317, 日本語の訳文は筆者による)

例えば、提案行為や要求行為の丁寧な形式は日本語の (7) と英語の (8) のように、主節が省略された条件節で体现されている。

(7) 日本語

(外出前に鏡の前であれこれと衣装合わせをしている娘に母親が助言して)
スカーフでもしてみれば。

(米倉 2013: 130)

¹⁰ 警告または脅威の例としては次の例が見られる
(e.g.) *If you (dare) touch my car!* (Heine et al. 2016: 50)

(8) 英語

If you could give me a couple of 39c stamps please.

a. (I wonder) If you could give me a couple of 39c stamps please.

b. If you could give me a couple of 39c stamps please, (I'd be most grateful).

(Evans 2007: 380)

(7) と (8) は、聞き手に何らかの要求行為が行われる場合であり、条件節の主節が省略された形式で「押しつけがましさを軽減する提案用法」(米倉 2013, (7)) または「丁寧な要求 (polite request)」(Evans 2007, (8)) を伝えている。これに対して、中国語では相手に何らかの行為を提案または要求する場合、主節が省略された条件節は好まれず (7', 8')、特に (8'') のように、主節を補完したほうが丁寧であると考えられる。次節では日本語と中国語の非従属化構文に関する先行研究を概観する。

(7')? 如果 也 試試看 圍巾 的話。

もし でも してみる スカーフ 条件節マーカー

(8')? 如果 您 能 給 我 兩張 39 分 的 郵票 的話。

もし 2SG 可能 くれる 1SG 二枚 単位 格助詞 切手 条件節マーカー

「2 枚の 39 セントの切手を頂けましたら。」

(8'') ..., 我 會 很 感激 您 的。

1SG 助動詞 程度副詞 感謝 2SG-POL NOMZ

「感謝するよ。」

(作例)

3.3 日本語の非従属化構文に関する先行研究

日本語の非従属化構文に関する研究は盛んに行われており (水谷 1989, Ohori 1995, 大堀 2002, メイナード 2005, 2008, 白川 2008, 2009, 堀江・パルデシ 2009)、非従属化構文はいわゆる、談話中、文の主節が省略され、従属節が独立で用いられる創発的な表現だと考えられている (Evans 2007, ホッパー 2011, Evans & Watanabe 2016, Heine et al. 2016)。久野 (1978) は機能主義言語学の立場から談話の省略現象を論じており、「省略」は、根本的に、談話法上の

問題である」と指摘している。具体的に、久野 (1978) は省略と談話法規則とに言及し、「省略の根本原則」や「省略順序の制約」を考察している。「省略の根本原則」は「省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能 (recoverable) でなければならない」と久野(同上: 8)は指摘している。また、「省略順序の制約」とは、より新しい (重要な) 情報が残され、より古い (重要度がより低い) 情報が省略されると久野 (同上: 15) は指摘している。例えば、(9) で省略されている内容は A の内容から復元できると思われる。一方、(10) の B の返答は一見して、問題がない内容であるが、「省略の根本原則」の観点から不適格だと久野は指摘している。

(9) A 君は、アメリカに行ったことがあるか

B うん、[φ]ある。

(10) A: Were you born in 1960?

「貴方は一九六〇年に生まれたのですか。」

B: *Yes, I was born φ.

「はい、そうです。」

(久野 1978: 9, 16 ; [φ]は省略が行われている場所)

(10) の *in 1960* はより新しく、より重要な情報であり、*born* はより古く、より重要度が低い情報を表している。このことから、「省略順序の制約」に従って、(10B) の答えはより新しい、より重要な情報が省略されたため、不適格な答えとなっている。

水谷 (1989: 60) は、文末の位置で会話の流暢性の保持と発話権の譲渡などの目的のため、日本語では「けど」、「が」、「から」などの接続助詞で終わる「未完結の発話」の表現が頻繁に用いられていることを指摘している。例えば、(11) は主節が省略されたケド節であり、(11') の「先に入りますか?」のような「相手にさそいかける」(水谷 1989: 59) 意味を含む主節が省略されている。

(11) 夫：ただいま。

妻：お帰りなさい。

夫：ああ、つかれた。

妻：おふろがわいているけど。

夫：あとではいろう。

(11') おふろがわいてるけど、先に入りますか?

上の (11) は「自分の意見を述べて、相手にももの言う機会を与える」という対人的機能があると指摘している (同上: 60)。他方、主節が省略された (12) のカラ節は、水谷 (1989: 61) は「依頼・勧誘など、相手に対する働きかけの強い発話」だと述べている。

(12) (訪問先で)

客：窓が少しあいていますよ。閉めましょうか。

主人：あ、閉めないでください。いまストープをつけたところですから。

(水谷 1989: 59, 61)

大堀 (2002: 128) は主節が省略されている文は「中断節 (suspended clause) 構文」とであると指摘し、しばしば対人的機能を果たしていると主張している。例えば、(13) の「から」の中断節構文(以下、「から」節と称する)の内容は話し手にとっての重要な関心事を示すほかに、「私の立場も分かってほしい」(同上) のように、聞き手の共感を促す談話機能があると大堀 (同上: 129) は指摘している。なお、中断節構文の意味は聞き手の推論を求めており、一定の解釈が限られる「推論集約的 (inference-intensive)」であると大堀 (同上) は指摘している。

(13) (A と B は大学院生、授業補助のアルバイトの話をしている. Ling-5 は受講者が多く仕事もきつい)

A：何これ？

B：Ling-5 やれって。

A：んんそう、最初はそう言われるのよ。

B：5 だけはいやだつつったんだげどな。

A：私だってこないだそう言ったら、

オリジナリーに5になったんだから。

(大堀 2002: 128)

白川 (2009) は主節を伴わない文を、主節が存在しているかどうか、当該の発話の内容が完結しているかどうか、関係づけられるべき事態が文脈に存在しているかどうか、という三つの指標で、「関係づけ」、「言い尽くし」、「言い残し」の三つのタイプに分類している。各タイプの特徴を整理してみると、表 3 のように示している。

表 3. 言いさしの類型

	関係付け	言い尽くし	言い残し
	言い終わり		
主節の非存在	＋	＋	＋
発話内容の完結性	＋	＋	－
関係づけられるべき 事態の文脈上の存否	＋	－	－

(白川 2009: 11)

(14) のカラ節は「関係づけ」の例であり、発話内容が完結しており、最初の「美味しい」と因果関係で関係づけられている。(15) のタラ節は「言い尽くし」の例であり、発話内容が完結しており、「関係づけられるべき事態が文脈上に存在しない」(同上: 11) というタイプである。「言い尽くし」と「関係づけ」について、白川 (2009) は「言い終わり」¹¹であるとしている。

(14) 耕作「美味いッ。」

ともみ「おいしいネ」

耕作「今日よく働いたから。」

(後略)

(15) シャワー使ったら?

(白川 2009: 9, 73)

¹¹ 「言い終わり」とは「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」である(白川 2009)。

他方、(16) のケド節は「言い残し」であり、話し手が途中で談話が途切れたもので、内容的に未完結である。白川 (2009) は「言い残し」を「言いさし」の一つの種類として位置付けているが、「言い残し」の発話が未完結であるため、研究の対象から除外している。

(16) 正樹「今日泊まって行けよ。」

慎平「そうしたいんだけどね (ため息をつく)」

(白川 2009: 8)

また、「言い尽くし」の言いさしは対人的態度を表し、「関係づけ」の言いさしは対事的な態度を表すと白川 (2009: 168~180) は指摘している。「言い尽くし」の対人的態度はケド節やカラ節が「話し手と聞き手の間の認識のギャップをうめる」(同上: 170)、またはタラ・バ節が「勧め」(同上: 171) という意味を表している。「関係づけ」の対事的な態度はカラ節の例で見られ、話し手は聞き手の発話内容を受けて、自分の知識を照合することを示すほか、聞き手の納得を促すことを示している。談話レベルにおいて、「言い尽くし」と「関係づけ」は独立文と同等に位置につけることを白川 (2009: 186) は主張している。

Kato (2013) は非従属化構文を省略的非従属化構文 (elliptic insubordination) や 付加的な非従属化構文 (additional insubordination) に分けている。前者はケド節、カラ節、タラ節などの副詞節を含み、後者は「ッテ。」と形式名詞の「モノ／コト。」を含んでいる。また、加藤 (2014: 516) は日本語の文の構造について、(17) のように述べている。

(17) A. 日本語の右方主要部型は、話者が右方付加を繰り返すなど言語構造の確定を先延ばしにすることを可能にする。

B. 前項の特性を前適応 (preadaption)¹² として、右方付加や非従属化 (未完結性の文) の頻度が増す。

¹² 加藤 (2014: 516) は、日本語の前適応とは「文を閉じないことが日本語の統語特性を前適応として頻用され、それが話者交替についての柔軟性を確保できる (交替可能でありながら、交替を強制しない) ことから、さらに頻度が高まる。結果的に、文を完結させない発話が頻用され、それを容易にするために、言いさし文や右方付加を多様に実現する方向への変化が想定されることになる。」と述べている。

C. 日本語で未完結性の文が頻用されると、その伝達上の効果を活用する (弱い TRP¹³による柔軟な発話形成など) 傾向が強まる。

(加藤 2014: 516)

日本語の右方付加について、「日本語の構造開放性は、日本語が右方主要部の言語であって、柔軟にアドホックに構造的な主要部を追加して文構造を長くしていけることによって成立している。」と加藤 (2014: 513) は指摘している。例えば、(18) は最初は「(A) ヤクルトが優勝する」、その後、(B) の「可能性がある」、(C) の「という」、(D) の「って」の要素が付加されることが可能である。(19) は中核部の (A) の後で、(B)~(K) の要素の付加が可能である。また、(19) の (I) の位置には、接続助詞「けど」の付加も可能で、完結していない非従属化構文となっている。

(18) [[(A) ヤクルトが優勝する (B) 可能性がある] (C) という話だ]
(D) ってよ。

(19) (A) 太郎が次の町内会長になる (B) かもしれない (C) らしい
(D) って (E) 話がある (F) みたいだ (G) って聞いた (H) んだ (I) けど (K) ね。

(加藤 2014: 515-516; (A)~(K) の表記は筆者による)

3.4 中国語の非従属化構文に関する先行研究

中国語では管見の限り、従属節の非従属化に関する研究があまりされておらず、従来の研究のほとんどが文中の語彙的や統語的要素が「文末の不変性詞 (sentence-final particle)」に文法化する現象 (以後「終助詞化」と称する) を検証している (Simpson & Wu 2002, Wang et al. 2003, Wang & Yap 2009, Yap et al. 2010a, 2010b, 2014)。また、中国語の終助詞化の研究は、名詞化辞 (nominalizer) の「的 (de, 「の」)」 (Yap et al. 2010a)、否定辞 (negater) の「不 (bu, 否定)」 (Wang & Yap 2009)、発話動詞の「説 (shuo, 「言う」)」 (Wang et al. 2003) などの終助詞化の現象を対象としている。例えば、文中の否定辞の「不 (bù)」

¹³ TRP は「次の話し手のターンに移行する適切な場所 (transition relevance place)」 (高木・細田・森田 2016: 53 訳) の略称である。

は (20) のように、疑問文で用いられ、否定の意味を表している。(21) の文末の「不」は疑問詞として用いられている。

- (20) a. Ta xihuan ni **bu** xihuan? 'Does s/he like you or not?'
 3SG like you NEG like
 b. Ta xihuan **bu** xihuan ni? 'Does s/he like you or not?'
 3SG like NEG like you
 c. Ta xi **bu** xihuan ni? 'Does s/he like you or not?'
 3SG like NEG like you
 (21) a. Ta xihuan ni **bu**? 'Does s/he like you or not?'
 3SG like you NEG.Q
 b. Ta xihuan **bu**? 'Does s/he like (you) or not?'
 3SG like NEG.Q

(Wang & Yap 2009: 36)

中国語の終助詞化の研究において、非従属化構文について言及しているのは次の Yap et al. (2014: 210) である。Yap et al. (2014: 210) は三種類の非従属化構文を挙げている。(22) は主節の省略による非従属化、(23b) はコピュラの「是」の省略による非従属化、(24b) は動詞の「恐怕 (「恐れる」)」の副詞化による非従属化の例である。(22) と(24b) の非従属化構文は問題を指摘するときの発話の緩和或いは断言回避などのポライトネスの用法を表しており、(23b) は「話の内容は真である」ということを聞き手に保証しているニュアンスをもたらしている用法である (Yap et al. 2014)。

(22) A: 明天問問他。

mingtian wen-wen ta.
 tomorrow ask-ask 3SG
 '(We'll) just ask him tomorrow.'

B: 他不會來不過。

ta bu hui lai buguo.
 3SG NEG FUT come however

‘He won’t be coming here *though*.’

(Yap et al. 2014: 203; 下線部の表記は筆者による)

(23) a. 他是喜歡你的。

ta shi xihuan ni de
3SG FOC like 2SG NMLZ

‘It’s (true) that he likes you’

b. 他喜歡你的。

ta xihuan ni de
3SG like 2SG NMLZ

‘He likes you (I assure you).’

(Yap et al. 2014: 181; グロス、中国語の表記は筆者による)

(24) a. 我恐怕他不喜歡我了

wo kongpa ta bu xihuan wo le
1SG fear 3SG NEG like 1SG SFP

‘I’m afraid/Probably he doesn’t like me anymore.’

b. 恐怕他不喜歡我了

kongpa ta bu xihuan wo le
fear 3SG NEG like 1SG SFP

‘**Probably** he doesn’t like me anymore.’

(Yap et al. 2014: 195)

例えば、主節が省略された (22) は (22’) のように復元でき、全体的に「彼は確かにこの問題が分かっているが、あいにく明日来られない」というニュアンスがある。談話の機能としては、(22) の主節の省略は先行する話し手の意見を黙認する (*tacitly acknowledging*, 同上: 181) 効果があるほかに、問題を指摘している口調を緩和する効果もある (同上: 204)。

(22’) B: 他 不會 來，不過 你 說 的 是 個 好 主意。

3SG NEG 来る *buguo* 2SG 言う NMLZ COP 数詞 いいアイデア

(彼は来ないが、あなたが言ったのはいいアイデアだ)

また、(24b) は、(24a) の主語の「我（「わたし」）」が省略され、心理動詞「恐怕」が副詞化しており、本来の補文節の「他不喜歡我了（「彼はもう私のことが好きではない」）」が独立文として用いられている。

Yap et al. (2014: 195) は、(24b) の動詞「恐怕」の副詞化の発展について、「この発展は補文節の『他不喜歡我了（「彼はもう私のことが好きではない」）』が、(24b) のように独立の「主節」構文として用いられる非従属化に寄与している。（“This development contributes to the insubordination of the complement clause *ta bu xihuan wo le* ‘he doesn’t like me’ as an independent ‘main clause’ construction as in (24b)¹⁴, (後略).”）と述べている。

このように、先行研究からみると、中国語の非従属化の現象は、主節の省略、コピュラの省略、動詞の副詞化によって生じることが存在していることがわかった。次は日中対照の観点から分析した先行研究を概観する。

3.5 日中対照の観点からみた非従属化構文に関する先行研究

日中対照研究の観点から非従属化構文を論じた研究としては李 (2008) と田 (2015) が見られる。李 (2008) は映画・ドラマのセリフを研究対象とし、「言いさし」の用語を使い、中国語の「言いさし」を次のように二分類している。

(25) 中国語の「言いさし」の二分類

I. 標識ありの言いさし：接続詞で終わるもの

「雖然 (*suīrán*、*「けど」*) ～。 / 因為 (*yīnwèi*、*「から」*) ～。」

II. 標識なしの言いさし：述部・目的語が省略されるもの

「別～ (*bié*、*「ちょっと～」*) / 你是～? (*nǐshì*、*「君は～?」*)」

(李 2008)

李 (2008) では、「標識ありの言いさし」について、日本語においては丁寧体レベルと普通体レベルに関わらず、「情報提供 ((26))」や話し手の自分の意見を表明する「意志表示 ((27))」の機能を果たしているものが多いことが明ら

¹⁴ 原文の例文番号は (14b) である。

かにされている。

(26) 兵士: 隊長、燃料が切れてから、1 時間が過ぎたんです。山下も……。

(隊長，1 小时以前汽油就烧完了。山下他也……。)

隊長: [無言]

(映画『あ、海軍』；李 2008: 9-10)

(27) 石田: 何名返してくると思う? (你觉得他们能释放几个人呢?)

遠野: 38 名なら、2 名か 5 名、望ましいのは 8 名ですけど……。

(如果是 38 名的話，3 名或 5 名，雖然期望的是 8 名……。)

(映画『交渉人』；李 2008: 7)

それに対して、中国語においては丁寧体レベルで言いさし表現が用いられず、普通体レベルで「情報要求」の機能を果たしているのがほとんどであると李 (2008) は指摘している。例えば、述部が省略され「你是...? (A: 君は...?) 」という表現は、普通体レベルの発話であり、「情報要求」を表した言いさし用法として見られている。なお、普通体レベルしか使われない中国語の言いさしは「丁寧度が低いもの」として捉えている。

田 (2015) は対訳コーパスで、白川 (2009) の「言い残し」と「言い終わり」¹⁵における、中国語の「雖然」と日本語の「けど」との対照研究を行っている。(28) の日本語の「言い残し」の表現は中国語で接続詞「雖然」で表すことが可能であるのに対して、(29) や (30) の「言い尽くし」の「けど」は「雖然」で表現できず、その代わりに、接続詞なしの (29) または、(30) の終助詞の「呀」で表現されると観察されている。田 (2015: 101) は「中国語は、孤立語であるため、接続表現は形態的に拘束されずに使われるということであろう」と指摘している。

(28) A: 三人一緒じゃなきゃ!

B: それはそうなんだけど……。

「虽然是那样，不过……」

¹⁵ 「言い残し」や「言い終わり」の説明は 3.3 を参照されたい。

(29) 三神：ところで美咲さん、ご自分の服どう思われます？

美咲：いいと思いますけど。

「我覺得很好。」

(30) お客様のスコップなら、そっちにありますけど。

「客官您用的铁铲，就在您身边呀。」

(田 2015: 103~104, 106; 下線部は筆者による)

3.6 先行研究の問題点

第一章で述べているように、Evans & Watanabe (2016: 30) は日本語、韓国語、チャバラ語 (Chapala)、ウラル語 (Uralic) 等の言語のように、形式的に「従属節+主節」の複文構造と「明確な従属的マーキング」 (Evans & Watanabe 2016: 30) を持っている言語は非従属構文を産出しやすいと指摘している。しかし、中国語(北京官話や台湾華語)も上記の「従属節+主節」と従属節と主節との論理的関係を示す接続詞の「雖然／因為／如果」を持っているものの、日本語、韓国語のような非従属化構文の現象が発達していない。

なお、日本語、韓国語のような「右方主要部型言語 (right-headed languages, RHL)」は接続助詞の位置が「従属節+接続助詞」となっている。これに対して、英語、フランス語、オランダ語、中国語のような「左方主要部型言語 (left-headed languages, LHL)」は「接続詞+従属節」となっている。また、中国語は同様に「接続詞+従属節」という構造である英語、フランス語、オランダ語に比べ主節の省略の現象が発達していないことを観察した。例えば、条件節の非従属化の現象は、英語の (6、再掲)、フランス語の (31) と (33)、オランダ語の (32) が観察されているが、中国語は (6)、(31)、(32)、(33) のような表現ができないと考えられる。

(6) 英語 (if 節の非従属化構文)

If you could give me a couple of 39c stamps please.

a. (I wonder) If you could give me a couple of 39c stamps please.

b. If you could give me a couple of 39c stamps please, (I'd be most grateful.)

(31) フランス語 (「Si (‘if’) 節」の非従属化構文)

Si on allait se promen-er?

if one went REFL walk-INF

‘What if we went for a walk?’

(Evans 2007: 380)

(32) オランダ語 (「Als (‘if’) 節」の非従属化構文)

Als je hier even je handtekening wilt zetten.

conj you here part your signature want.prs put

‘If you could sign here.’

(Verstraete & D’hertefelt 2012: 124)

(33) フランス語 (「Puisque (‘because’) 節」の非従属化構文)

Puisque je vous dis que je sais tout de vous !

「私はあなたのことは全部知っていますから！」

(秋廣 2016: 73; 下線は筆者による)

すなわち、中国語の副詞節の非従属化構文は RHL 型言語の日本語、LHL 型の英語やほかの LHL 型言語 (フランス語、オランダ語) とは別のメカニズムから産出されるのではないと思われる。

また、日中対照研究の先行研究について、日本映画 (中国語吹替付) を分析対象とした李 (2008) や『中日対訳コーパス』を対象とした田 (2015) はどちらも自然会話のデータではないと考えられる。しかし、従属節形式のみの発話は談話における創発的表現であると考えられることから (Heine et al. 2016)、創発的表現を分析するために、「自然データ」 (ホッパー 2011: 241) が不可欠であると思われる。そのため、本研究は対訳コーパスまたは映画の吹替のデータの利用ではなく、自然談話のコーパスにおける従属節形式の発話を分析対象とする。

また、李 (2008) にはいくつかの問題点がある。まず、(26) の「山下も…。」の表現は「山下も帰りません」の述部「帰りません」の省略により、「情報提供」の機能を果たしていると李 (2008) は主張している。しかし、(26) の「山下も……」は、白川 (2009) の分類によると、未完結の発話の「言い残し」に当たり、「言いさし」または「非従属化構文」として考えられない。また、(27)

の「雖然（「けど」）」節の単独発話は話し手の自分の意見を表明する「意志表示」だけではなく、前の発話を修正する機能も見られることから、これらの観点についてさらに考察すべきである。

次に、田 (2015) の「雖然」節の単独発話の考察についても、李 (2008) と同様に (28) の「雖然」節は「言い残し」だと考えられ、「言いさし」として考えられない。また、田 (2015) は (34) のような「雖然」節の単独使用を挙げているが、その談話機能について論述していない。

(34) 沙織：ねえ、本当にエビのために頑張ってたの？

弥生：そう思いたくなかったけど。

「雖然不想这么想。」

(『アテンションプリーズ』, 田 2015: 103, 下線は筆者による)

(34) の「雖然」節について、その談話機能を分析するために、どの談話文脈で使用されているのかという問題に目を向けなければならないと考えられる。

非従属化構文が用いられる談話文脈や場面の問題について、例えば、日本語の条件複文では要求を伝える場合、省略された形で必ず丁寧な用法を表しているわけではない。具体的に、「頂けたら」と「頂ければ」は使用場面においては、単独で使用された条件節のほうが丁寧度が下がることがある。例えば、(35a) と (36a) は部下が上司に要求している場面であり、(35b) と (36b) の「嬉しいです」のような主節が省略された部下の発言である。(35a) と (36a) は主節が省略された形で、聞き手 (上司) にその省略部分を推察させる用法である。

(35) (部下が上司に要求している場面)

a. 部下：この部分についてもっと教えて頂けましたら。

b. 部下：この部分についてもっと教えて頂けましたら、嬉しいです。

(36) (場面は同上。)

a. 部下：この部分についてもっと教えて頂ければ。

b. この部分についてもっと教えて頂ければ、嬉しいです。

(作例)

(35a) と (36a) は一見すると、最後まで言い切らない婉曲的な用法のようだが、(35a)は言葉が足りない感じがあり、(36a) は (36') のように、「「P すればいいのに」というニュアンス」 (白川 2007: 85) がある。すなわち、(35a) と (36a) はどちらも話し言葉でやや失礼な表現であると考えられる。

(36') この部分についてもっと教えて頂ければいいのに。

(作例)

Leech (1983) の「ポライトネスの公理 (politeness principle)」 (以後、PP と称する) において、その一つの「maxim of tact (気配りの公理)」では、相手の負担を最小限にし、相手の利益を最大限にすることが重要視されている。例えば、(37a) と (37b) は同じ命令形であっても、相手に利益をもたらす内容になればなるほど、ポライトネス度が高くなる。(37) は通常の状態では、(37b) のほうがより相手に利益をもたらす内容だと思われ、(37b) の丁寧さが (37a) より高いと考えられる。

(37) a. Peel these potatoes.

b. Have another sandwich.

「a. これらのジャガイモの皮をむいて。

b. サンドイッチもう一枚どうぞ。」

(Leech 1983 : 107; 日本語の訳文は筆者による)

上述の聞き手にとっての負担はあるが、明確な利益をもたらさない (35a) と (36a) は話し手の意図がはっきり示されておらず、聞き手 (上司) に推察を委ねている。これは聞き手に負担をかける表現となり、Leech の PP に違反している。従って、(35) と (36) のように聞き手に利益がない要求が行われる場面では、主節を省略しない完全文のほうが丁寧度がより高いと考えられる。(35)~(37) の現象から、従属節の非従属化構文を考察する場合、統語や意味レベルからだけではなく、談話文脈や場面を分析の射程に入れる必要がある。

3.7 本章のまとめ

以上のことから、非従属化構文を形成するメカニズムにおいて、日本語では主に複文の主節の省略であるのに対して、中国語では複文の主節の省略 ((20)) やコピュラの省略 ((21b)) や動詞の副詞化 ((22b)) などのメカニズムが観察されている。本章では日本語と中国語の非従属化構文の先行研究を概観し、その問題点を指摘した。次章は日中両言語における条件節、譲歩節と理由節の非従属化構文を研究対象とし、日中両言語の副詞節の非従属化の言語形式、談話機能、メカニズムの違いを分析する。

第4章 日中両言語の条件節の非従属化構文の形式と談話機能

4.1 はじめに

日本語の条件節の「タラ・レバ」節の非従属化構文は (1) の「勧め」(白川 2009: 73) や (2) の「提案あるいは勧告 (suggestion or recommendation)」(Kato 2013: 17) などの談話機能があると従来の研究において指摘されている。

(1) 一の瀬：「五代くん、今日病院に検査しに行くんだってさ。」

響子：「あら、そうですか。」

一の瀬：「付いてってやったら?」

響子：「そんな……子供じゃあるまいし。」

(白川 2009: 74)

(2) (脱臭効果がある便器を買う提案)

1 M010：トイレを、に新聞を持って入るっていうのは、(うん) それだけ時間のかかることをするってことなんだよ。(そうだよ) 空気悪くなるって。(ああ、そういうことなんだ) うん、そういう * * * あるな。

2→ F094：えー、脱臭効果がある便器とか買えば。

(「名大」；‘()’は聞き手の相づちを示している。)

しかし、「勧め」の談話機能がある (1) は (1') のように、中国語の条件節の「如果 (*rúguǒ*, 「もし」)」節に訳すと、不自然な表現になる。(1) の場合、中国語は条件節マーカーがない「你跟他去呢? (あなたは彼と行きませんか。)」のほうが自然であると思われる。

(1')? 一の瀬：「聽說五代今天去醫院做檢查。」

響子：「哎呀，這樣子啊。」

一の瀬：「如果 你 跟他 去 的話 呢？」

もし 2SG 付く 3SG 行く 条件節マーカー 疑問-SFP

響子：「誇張……又不是小孩子。」

また、上述のある行為を提案する (2) は中国語に訳す場合、談話を補完しなければ、意味・形式的に不完全な文となる ((2'))。

(2')? F094 : 啊—, 如果 買 有 除臭效果 的 馬桶 的話?

えー もし 買う ある 脱臭効果 の 便器 条件節マーカー

(2'') のように、(2) の「えー、脱臭効果がある便器とか買えば」を中国語に訳すと、「不就好了 (すればいいだろう)」を補完したほうが自然だと考えられる。

(2'') F094 : 啊—, 如果 買 有 除臭效果 的 馬桶 的話

えー もし 買う ある 脱臭効果 の 便器 条件節マーカー

不就好了。

すればいいだろう

中国語の条件節の非従属化構文に関する分析は管見の限りまだ行われていない。中国語の条件複文には、(3) 「只要 (*zhīyào*) P, 就 (*jiù*) Q」, (4) 「除非 (*chúfēi*) P, 不然 (*bùrán*) Q」, (5) 「如果 (*rúguǒ*) P, Q」, (6) や (7) の「条件節マーカー「的話 (*dehuà*, conditional marker)」」 (Wang 2017) を含む構文¹⁶がある。また、(8) のように、条件節の接続詞が存在せず、従属節と主節との文脈から、条件を示す複文がある (呂 2004, 邢 2001)。本研究では接続詞がある複文を対象とし、(8) のような接続詞がない無標な複文を研究対象から排除する。

(3) 只要 你 肯 努力, 就 一定 能 学 好。

さえすれば-CONJ 2SG 意向 努力する 強調(語気) きっと 可能 習う よい

「懸命に努力しさえすれば、必ずマスターできるだろう。」

¹⁶ 条件節マーカー「的話」を含む条件複文には、構造的に (a) と (b) に示す二種類が見られる。一つは (a) のように条件節の接続詞「如果」と共起するものであり、もう一つは (b) のように、「如果」がないものである。

a. [如果/要是 +P+ 的話, Q.] (本文の例 (5))

b. [P+ 的話, Q.] (本文の例 (6))

(4) 除非 你 也 去, 不然 我 才 不 去 呢!

V-限り-CONJ 2SG も 行く さもないと 1SG 助詞 否定 行く SFP

「君も行かないのであれば、私も行かない。」

(5) 如果 早 一点儿, 可能 得救 了。

rúguǒ -CONJ 早い ちょっと 可能 助かる 完了

「もし、もう少し早かったら、助かっていただろうに。」

(鈴木 1990: 57, 57, 61, 60; グロス は 筆者による)

(6) M: (略) 如果 老師 不 去 的話 (..) 那就 (0.8)

rúguǒ -CONJ 先生 否定 行く 条件節マーカー フィラー

我們 也 可以 (..) 不用 (..) 就 不用 去 啊

私たち も 可能 否定 強調(語気) 否定 行く SFP

(NCSC: M004)

「先生が行けなかったら、あの、僕らも行かなくてもいいと思うよ。」

(7) F1: 明天 好天氣 的話, 她 就 會 去 中壢(...).

明日 いい天気 条件節マーカー 3SG 強調(語気) 未来 行く 地名

「明日いい天気なら、彼女は中壢に行くだろう。」

(NCSC: M006)

(8) 明天 下 雨, 我們 就 不 去 公園 了。

明日 降る 雨 私たち 強調(語気) 否定 行く 公園 SFP

「あした雨が降れば、ぼくたちは公園へ行きません。」

(鈴木 1990: 60; グロス は 筆者による)

第2章で述べたように、副詞節の独立使用は文法化又は脱文法化の立場のほか、談話の参与者間の視点、いわゆる「二者間の視点」からの分析も必要だと考えられる。先に本章の結論を述べると、談話の情報構造や談話の意味の一貫性に関わる用法において、中国語の「如果」節構文と日本語の「タラ・レバ」節構文はどちらも「先行談話内容に対する条件提示」という用法があることがわかった。また、条件節における「評価を表すモーダル機能」から対人的機能への創発において、日本語の「タラ・レバ」節構文は先行文脈に依存せず、評価の意味を表すことが可能であり、同時に聞き手に語用論的推論を行わせ、押しつけがましさを軽減させる「勧め」の対人的機能を果たしている。それに対

して、中国語の「如果」節構文は「弱い断言」で先行談話における相手の評価を(不)同意するという対人的機能を果たすために、先行する談話の文脈に依存しなければならないということがわかった。

本章では日本語の「名大会話コーパス」(以後、「名大」)と中国語(台湾華語)の談話コーパスである「The NCCU Corpus of Spoken Chinese」(以後、「NCSC」)から談話の実例を抽出し、日中両言語の「条件節のみの言語形式」(以下、「条件節構文」)の談話機能を考察する。その後、4.2 節から 4.4 節では中国語の条件節構文の談話機能と対人的動機付けを検討する。4.5 節では日本語との対照研究を行う。そして最後に 4.6 で本節のまとめをする。

4.2 中国語の条件節構文の談話の情報構造に関わる用法:

先行談話に対する条件提示

(9) は M の友人を食事に誘う話である。1 行目では、F が M に M の友人との食事を提案している。

(9) (M の友人を食事に誘う話)

- 1 F: (0.0) 對啊(..) 我們改天找他吃 [飯 哪]
- 2 M: [有 (..) 我 有 跟 他 講] (..) 對啊
- 3 F: (..) 那(..) 那個真的就你來排了
- 4 M: (..) um (..) 好
- 5 F: (..) 反正我就是晚上
- 6 M: (0.0) um
- 7→ F: (0.0) 如果 不是 weekend@s:eng 的話
rúgu ǒ 否定 週末 条件節マーカー
- 8 M: (0.0) okay@s:eng (...)

(NCSC: M014; '@s:eng'は英語で発話されたときの記号である。)

- 1 F: (0.0) そうだね(..) 別の日に彼を [食事に誘ってもいいよね]
- 2 M: [うん (..) もう誘ったよ] (..) うん
- 3 F: (..) じゃ (..) 連絡は任せるね
- 4 M: (..) うん (..) 分かった
- 5 F: (..) どっちにしても、夜で

6 M: (0.0) うん

7→ F: (0.0) 週末じゃなければ。

8 M: (0.0) オーケー

2行目はMがFの提案を受け入れたところである。3行目と4行目は「Fの依頼—Mの受諾」の「隣接ペア (adjacency pair)¹⁷」(Schegloff & Sacks 1973)となっている。5行目はF2が「どっちにしても、夜なら (大丈夫)」という夜の時間帯の条件を提出し、6行目はMが「うん」と同意を示している。7行目ではFが条件節構文で、5行目で提出した条件にさらに条件を一つ追加し、8行目ではMが再度同意を示した。

なお、7行目の条件節構文は談話上の先行談話内容の1と3行目の内容に関連しているため、談話の意味の一貫性を表し、先行する談話内容に対する新情報の補足という談話のテキスト的意味内容¹⁸に関わるものだと考えられる。これは談話の「情報状態 (information state)」(Schiffrin 1987)に関わっている。

従来の研究では、非従属化構文と談話の意味の一貫性に関する説は「発話補完」(曹 2000)、「補足説明」(許 2004)、「結束的目的 (cohesive purposes)」(Evans 2007)、「関係づけ」(白川 2009)、「追加表現 (afterthought)」(Cristofaro 2016)などが指摘されているが、本研究では上述の説を一括して「談話の情報構造に関わる用法」というカテゴリーに入れることとする。

また、Cristofaro (2016: 406) は (9) のような副詞節の独立使用について、「また、節は発話された後の追加表現 (afterthought) として使われ、比較的長いポーズによって主節と分断されるので、独立節として再解釈されうる (“Also, as the clause is uttered as an afterthought, and is separated from the main clause by a relatively long pause, it can be reinterpreted as an independent clause.”)」と指摘しており、本研究はこの説を援用する。すなわち、本節で分析対象となる条件節構文はいずれも別の話し手の話が終わった後で用いられる非従属化構文であ

¹⁷ 隣接ペアとは、「対になった2つのターンから構成されるもので、発話のやりとりの分析の最小単位」(林 2008: 111)である。隣接ペアには第1部分 (first pair part: FPP) と第2部分 (second pair part: SPP) という順序があり、例えば、質問 (FPP)→ 返答 (SPP)、誘い・依頼→ 受諾・拒否、要請→許可、情報の要請→情報の提供などの典型的なペアが観察されている (林 2008, 高木・細田・森田 2016)。

¹⁸ 「テキスト的意味内容」の定義は第2章の2.4節を参照されたい。

る。

次の (10) も「条件提示」の機能を果たしている談話の情報構造に関わる用法である。(10) は論文の字数の規定についての話である。

(10) (論文の字数の規定があるかどうかの話)

1 F1: ei 可是我們是不是好寶寶手冊上面有寫嗎還是沒有

2 F3: 沒有吧

3 F2: (0.0)沒有沒有[規定論文]字數吧

4 F1: [沒有嗎]

5→ F2: (..) 你 只要 口考 都 讓 你

2SG さえすれば 口述審査 さえ させる あなた

6 過 的話

通る 条件節マーカ

(NCSC: M034)

1 F1: えっと、でも私たちの指導要領に (論文の字数の規定を) 書いてあるかな? ないの?

2 F3: ないでしょう

3 F2: ない。論文の字数を規定していないでしょう。

4 F1: ないの?

5→ F2: (...) あなたの論文が口述審査にさえ通れば。

1 行目では F1 が F3 と F2 に論文の字数の規定があるかどうかを質問している。それに対して、F3 と F2 が「字数の規定がない」と答えている (2~3 行目)。4 行目では F1 が「沒有嗎 (「ないの?」)」で、再度 F2 に質問している。5 行目では F2 は条件節構文で応答をし、「你只要口考都讓你過的話。(「あなたの論文が口述審査にさえ通れば」)」という特定の条件の提示で、「あなたの論文が口述審査にさえ通れば、論文の文字数を問われないよ」ということを F2 に答えている。(9) の条件節構文は「先行する命題に関係している条件を与える (“gives the condition which relates to a preceding proposition”)」(Evans 2007: 418) という発話であり、談話の情報構造に関わる用法でもある。

英語の (11) は (9) と (10) に類似している。Evans (2007: 418) は、従属節のみの (11) の *if* 節の言語形式は、談話の「結束的目的 (cohesive purposes)」で、先行する命題に関連している条件として挙げられていると述べている。

(11) S: Is it practically impossible to have that [a certain demand curve]?

I: If you have this base.

S: 一定の需要曲線を持つことは事実上不可能ですか。

I: この給与ベースがあれば。

(11') I admit that it's possible, if ...

「(この給与ベースがあれば)、それは可能だと認めます。」

(Evans 2007: 418)

(11) は話し手の S が「一定の需要曲線を持つことは事実上不可能ですか」と I に質問している。I は *if* 節が示している条件に基づいて、S が言っていることが可能だと認めている。これは「特定の条件を定めることによって前の話者との合意を制限すること (“to limit agreement with a previous speaker by laying down a particular condition”) 」という表現だと Evans (2007) は主張している。なお、(11) は (11') のように、復元可能な主節が明白に存在していると Evans (2007) は指摘している。

ここまで、中国語の条件節構文における「先行談話に対する条件の提示」という談話の情報構造に関わる用法があることが判明した。次節では中国語の条件節構文の対人的動機付けについて考察をする。

4.3 中国語の条件節構文の対人的動機付け

4.3.1 参照情報を提示するタイプ

本節の条件節構文は話し手が「参照情報を提示する (白川 2009) 」ことを通して、「聞き手の認識を改めさせる」と「聞き手にさらなる詳しい情報を求める」という二種類の用法が明らかになった。なお、ここで注目すべき点は 4.3 における中国語の条件節構文の対人的機能は、いずれも先行する談話の文脈が存在しないと機能しないという点である。すなわち、中国語の条件節構文には、4.2 で見た「先行談話に対する何らかの条件を提示すること」によって、対人

的機能を果たしているという用法が見られる。

4.3.1.1 聞き手の認識を改めさせる用法

まずは「聞き手の認識を改めさせる用法」である。(12) は M1 と M2 の友人の妻がうつ病にかかっていることから、その妻を強制的に入院させることが可能であるかどうかの話題である。M1 は条件節構文で参照情報を提示し、M2 を説得しようとしていると思われる。

(12) (共通の友人である妻がうつ病にかかっていることから、その妻を強制入院させることが可能であるかどうかの話。M2 は夫でも妻を強制入院させることが可能であることを主張している。)

- 1 M2: (前略) 他其實可以強制就醫吧
- 2 M1: (..) 靠 xxxx
- 3 M2: (...) 如果就是 [他 xxxx]
- 4 M1: [- eng] [okay look bro] theres a fine line between 強制
5 就醫 and 家暴 okay &=laughs
- 6 M2: (...) 所以要是我
- 7 M1: (..) 她強制就醫的話她 parents@s:eng 可以幫她強制就醫 (..)
8 我們不行
- 9 M2: (0.0) 為 [什麼]
- 10 M1: [我們 做] 老公 的 不 行
- 11 M2: (..) 可以吧
- 12→ M1: (..) uh 除非 對 我們 造成 (..) 生活上 的
えっと V-ない限り に 私たち 引き起こす 日常生活上 の
13 [損害]
支障
- 14 M2: [應該 可以] 呀 (後略)

(NCSC: M025)

- 1 M2: (前略) 彼女を強制的に入院させることができるでしょう
- 2 M1: (...) なんてことだ xxx
- 3 M2: (...) もし [彼女は xxxx だったら]

- 4 M1: [あのさ] 強制入院と DV (配偶
5 者暴力) は紙一重の差だよ、分かる? ((笑))
6 M2: (...) だから私なら
7 M1: (..) 彼女を強制的に入院させることは、彼女のご両親ならで
きるが(..)
8 ぼくらはできない
9 M2: (0.0) ど [うして]
10 M1: [僕ら] 夫 はできない
11 M2: (..) できるだろう
12→ M1: (..) えっと、日常生活上の
13 [支障] が発生しない限り
14 M2: [できるはず] だと思うけど (後略)

1 行目で、M2 は夫は妻を強制的に入院させることが可能であることを主張し、文末詞の「吧 (「でしょう」)」を用いて M1 に「同意を導く (solicit agreement, Li and Thompson 1981)」という談話の意味を表している。2 行目では、M1 が発話の冒頭で、驚きを表す語気助詞「靠 (「なんてことだ」)」で M2 の説に不同意を示している。その後、M2 は続けて M1 を説得しようとしているが、M1 は発話中の M2 を遮り、自分の意見を表明し、再度不同意の意味を示している (3~5 行目)。そして、M2 は自分の主張を言い張り、M1 は再度発話中の M2 を遮り、「彼女を強制的に入院させることは、彼女のご両親ならできるが (..) ぼくらはできない」という部分的な同意を表明している (7~8 行目)。M2 は M1 の 7-8 行目の主張を疑問に思い、「為什麼 (「どうして」)」と言い返し、M1 は M2 の質問に対して、さらに「夫のぼくらはできない」という具体的な内容を加えて返答している (10 行目)。11 行目で、M2 は「できるでしょう」という「質問」で、M1 の 9 行目の主張を納得していない。

そして、12~13 行目で、M1 は条件節構文で参照情報を提示し、M2 を説得しようとしていると思われる。なお、12~13 行目の条件節構文は「聞き手の認識を改めさせる用法」を表す同時に、先行する「彼女を強制的に入院させることができるでしょう。(1 行目)」と談話の意味の一貫性を表している。意味的に、M1 は「日常生活上の支障が発生したら (12~13 行目)」という条件であれ

ば、あなたが言っている強制的に入院させること（1行目）が可能であることを示している。14行目で、M2はM1の主張に納得していないまま、同一話題を続けている。

このように、(12)は、M1は条件節構文の発話形式で、談話の意味の一貫性を表しながら、「聞き手の認識状態に対して、何らかの改変を加える情報（白川 2009: 170）」を提示し、M2の認識を機能を改めようとする機能があることがわかった。次の(13)は中国での工場用地の土地使用权についての話である。談話の背景として、F1は土地使用权が50年であることを主張している。

(13) (中国で工場用地の土地使用权の話。F1は土地使用权が50年であることを主張している)

- 1 F2: (..) 他們 是 終身 的 吧
2 F3: (..) hon
3 F1: (0.0) 終身 的 沒有 啦 (..) [你 是]
4 F2: [ei]
5 F3: (0.0) 他們 那個
6 F2: 終 [身 的 吧]
7 F1: [有 啦] (..) 很少 啦
8 F3: (..) 說 (..) [那個]
9 F1: [終身] 就是說 你 房子 那 一 (..) 那
10 [一 種 就是 終] (...) 終 +/-
11→ F2: [你 不 動 的 話]
2SG 否定 移動する 条件節マーカー
12 F1: [身 的] (..) 但是土地方面的是不
13 F3: [不 是 啦]

(NCSC: M013)

- 1 F2: (..) 彼らには終身の土地の所有権があるでしょう。
2 F3: (..) hon
3 F1: (0.0) 終身じゃないよ (..) [それは]
4 F2: [ei (上昇調、lit: そうなの)]
5 F3: (0.0) 彼らはあれ

- 6 F2: 終 [身 でしょう]
- 7 F1: [あるけど] (..) とても少ないよ。
- 8 F3: (..) あの (..) [あれ]
- 9 F1: [終身] は 住居権 (..) あの
- 10 [あの 終] (...) 終 +/-
- 11→ F2: [あなたが移動することがなければ]。
- 12 F1: [身 なの] (..) でも、土地のほうは
そうじゃない。
- 13 F3: [違うよ]。

F2 は会話の最初で「彼らには終身の土地の所有権があるでしょう。」という認識を表し、F1 はそれを否定している (1~3 行目)。その後、F2 は「ei (上昇調)」で「そうなの」という疑問のニュアンスを表し、6 行目で自分の認識を主張し続けている (4~6 行目)。9~10 行目で、F1 は住居権は終身であるが、土地所有権はそうではないと話し、11 行目で、F2 は聞き手の F1 がまだ 9 行目の発話を終えていないことを知った上で、条件節構文の発話の形式で、F1 の発話を遮っている。11 行目の遮り行為 (interruption) は競合的な意味合いを持ち、「相手から無理やりにターンを取ろうとする好ましくない行為」(林 2008: 19) と見なされる。談話ストラテジーとして、11 行目で F2 は自分の認識を条件節構文で「参照情報」として提示することで、「聞き手は認識が不十分である」ような情報を指摘し、聞き手の知識を改めさせようとする。なお、話し手の F2 は、11 行目の条件節構文を通して、10 行目にある聞き手 (F1) の認識を改めさせると同時に、先行する 1 行目にある自分の談話への追加説明もともなっている。すなわち、11 行目で、F2 は条件節構文の発話形式を通して、談話の意味の一貫性を果たしながら、聞き手の認識状態を改めさせる参照情報を提示している。

4.3.1.2 聞き手にさらなる詳しい情報を求める用法

次は「聞き手にさらなる詳しい情報を求める用法」である。このタイプの条件節構文は話し手が条件節構文で、ある仮定的な条件を聞き手に提示し、さらに聞き手に詳しい説明を求めている談話のパターンである。このようなタイプ

の条件節構文は意味的に「どうするか (どうなるか) 」ということの問題にしておき、「話し手は、途中まで言ってやめているわけで、文字どおりの言いさし」(白川 2009: 74-75) である。また、このタイプの条件節構文は先行する談話の内容に基づいたものであるため、談話の意味の一貫性も果たしていると考えられる。なお、このような条件節構文の殆どは話し手の主観的な認識に基づいた発話である。例えば、(14) の条件節構文は話し手の認識の内容、(15) の条件節構文は話し手が聞いた伝聞内容である。(14) と (15) は話し手は条件節構文で、主観的な認識スタンスの表出を通して、聞き手にさらなる詳しい説明又は情報を求める談話のパターンである。例えば、(14) は産後ケアは姑に任せるか産後ケアセンターに行くか、という議論である。

(14) (姑と産後ケアの話)

- 1 F1: (前略) (..)啊如果說(..)婆婆真很介意你回娘家的話(..)
- 2 那你就去做月子中心 (..) &=laughs
- 3→ F2: (..) 啊 那 如果 婆婆 很 熱心 要
あ じゃ *rúguǒ* 姑 すごく 親切 意向
- 4 幫 你 做 嘞
手伝う あなた する SFP-疑問辞
- 5 F1: (..)那你要看婆婆會不會做啊(1.8) 不是 (..) 不是 (..) 這種東西
- 6 不是 (..) [uh]
- 7 F2: [婆婆]都自以為會做啊 (0.7) 婆婆都會
- 8 自以為說我會做啊
- 9 F1: (..) 自以為?
- 10 F2: (..) 當然啊

(NCSC: M009)

- 1 F1: (前略)。もしお姑さんはあなたが実家に戻ることを嫌がっ
- 2 たら、産後ケアセンターに行けばいい (笑)。
- 3→ F2: じゃ、もし姑がすごく親切に自分の産後ケアをやって
- 4 くれるつもり だったら?
- 5 F1: その場合、あなたの姑が産後ケアをうまくやれるかどうか
- 6 次第だよ。[えっと]

- 7 F2: [姑は]いつも自分ができると思いこんでいる
よ。
- 8 (0.7) 姑は、私ができるよ、みたいに思い込んでいるよ。
- 9 F1: 思い込んでいる？
- 10 F2: そうだよ。

1~2 行目では、F1 が F2 に「姑があなたが実家に戻るのを嫌がったら、産後ケアに行けばいい」のようにアドバイスしている。3~4 行目で、F2 は 1 行目の話題に対して、条件節構文を通して、より詳しい情報を求めている。5~6 行目は F1 が「その場合、あなたの姑が産後ケアをうまくやれるかどうか次第だよ。」という認識を示している。従って、3~4 行目の条件節構文は、話し手の F2 が「産後ケアと姑」をめぐる F1 に詳しい情報や知識を引き出す手段であると考えられる。(15) も自身の経験に基づいて、条件節構文の発話を通して、聞き手に詳しい情報を促す談話の構造である。

(15) (どの実験室のやり方がハードワークになるかという話)

- 1 F1: (0.7) um (0.9) 可是如果自己分的话 (2.2) 會太操嗎 (...) 沒有
2 抱著必死的決心進來
- 3 F2: (1.8) 沒有抱著必死的決心進來 (..) 妳也得被操啊(..) 不然呢
- 4→ F1: (1.4) 如果 他們 有 聽說 有 (...) 有 像 哪個 之前的
rúguǒ 彼らは ある 聞く ある ある 例示 どの 前の
5 學長 (...) 跑 掉的 (..) 先例
先輩 逃げる しまう 前例
- 6 F2: (0.0) 當然不會跟他們講有些跑掉的先例啊 (..) 我們要講說其實
7 每個實驗室都是這麼地操(...) 只是妳不 (..) 妳不待在那個
8 實驗室 (..) 妳不知道狀況 (..)
- 9 F1: (0.0) 而且 [我們]
- 10 F2: [就是] 只是操的方式不一樣而已 (...) 其實都很操
11 (1.4) 先斷了他們後[路再講]
- 12→ F1: [可是 他們 如果] 說 (..) 欸 (..) XXX

でも 彼ら もし 言う あの 人名

- 13 那一間 很 (...)「 很 」
あの実験室 とても とても
- 14 F2: [那] 是傳說啊 (...) 妳怎麼知道 ..
15 妳搞不好去了之後妳被嚇了出來 ..
- (NCSC: M027)
- 1 F1: (0.7) um (0.9) もし自分で実験室を選んだら (2.2)
2 ハードワークになるかな(...) 覚悟せずに入學したら。
3 F2: (1.8) 覚悟せずに入っても (..) ハードワークになるんだよ (..)
それが何か。
4→ F1:(1.4) もし彼らが (...)この前に逃げちゃった (...) 先輩の (..)
5 前例を聞いたら。
6 F2: (0.0) 彼らに逃げた人たちの事情を言わないのは決まっている
よ。(..) 私たちが言うべきなのは、実際
7 どの実験室でもハードワークだということだ (...) ただ
8 (..) その実験室にいない限り (..) (実際の) 状況が分からない
よ。(..)
9 F1: (0.0) それに「 私たちが 」
10 F2: [それは] ただやり方だけが違うんだ
よ。(..) どちらでもハードワークだよ。
11 (1.4) 先に観念「 させればいい。 」
12→ F1: [でももし彼らは] (..) あの (..)
XXX(人名)が所属している実験室が
13 とても (...)「 とても 」 楽だみたいなことを言ったら。
14 F2: [それは] 噂だよ (...) 分からないんじゃない
か (..) ひょっとして入ったら
15 恐れすぎて逃げちゃうかも。(..)

4 行目と 12~13 行目の条件節構文はどちらも話し手 F1 が他の誰かから聞いた伝聞の内容である。話し手は 4 行目と 12~13 行目の条件節構文を通して、聞き手にほかの見解を述べることを促している。1 行目から 3 行目までは「ハードワークになるかどうか」という「質問-応答」という隣接ペアとなり、4~5

行目はF1が3行目のF2の応答の内容に追加して仮定の条件の内容を提出し、F2のほかの見解を促している。また、12~13行目では、F1が同一問題について、条件節構文を通して、再度F2に質問し、F2の意見を求めている。

4.3.2 評価を表すモーダル機能を担うタイプ

Evans (2007: 403~405) は非従属化構文には「Exclamation and evaluation (感嘆と評価)」を表す「モーダル機能 (Modal meaning)¹⁹」があると指摘している。また、白川 (2009: 172) は条件節構文について、「機能的には評価のモダリティを担う形式の一つとして位置付けることができる」とも述べている。中国語の条件節構文においても「評価を表すモーダル機能」があることがわかった。(16) は条件節構文でF1が評価を表すことで、F2に同意を示す用法である。

¹⁹非従属化構文の機能と起源について、Evans (2007: 383~423, 2009: 9~10) は数多くの言語の非従属化の現象を観察した上で、大まかに三つのタイプに分けている。

- ・ Evans の非従属化構文の機能と起源の分類
 - A. Indirection and interpersonal control:
 - (a) Function: requests and commands, hints, warnings and admonitions.
 - (b) Origin: ellipsis of predicates of desire, permission, ordering, enablement (enabling predicates), etc.
 - B. Modal functions of various types:
 - (a) Function: epistemic and evidential meanings; deontic meanings (especially hortatives and obligation); exclamation and evaluation
 - (b) Origin: ellipsis of predicates of reporting, thinking, perceiving, asserting, emotion, evaluation
 - C. Signalling presupposed material:
 - (a) Function: negation (i.e. negative clauses have subordinate form), contrastive focus, reiteration, disagreement with assertions by previous speaker.
 - (b) Origin: ellipsis of markers of cleft constructions
- 「A. 間接的、もしくは対人的なコントロールの機能 :
 - a. 機能 : 要求と命令、ほのめかし、警告と忠告
 - b. 起源 : 願望、許可、命令、権能を表す述部の省略
- B. さまざまなタイプのモーダル機能 :
 - a. 機能 : 認識的、証拠的意味、義務的意味 (特に忠告や義務)、感嘆や評価
 - b. 起源 : 報告、思考、知覚、主張、感情、評価を意味する述部の省略
- C. 前提とされる要素の表示機能 :
 - a. 機能 : 否定 (すなわち、否定節が従属形式を有する文)、対比的な焦点、繰り返し、前の話し手の主張に対する不同意
 - b. 起源 : 分裂文のマーカーの省略」

(Evans 2007: 386~423, 2009; 日本語訳は筆者による)

(16) (F2 は「自分の同僚は、前に無断欠勤をしたのに、会社に給料を要求したことがある」という話を F1 に話している。)

1 F2: (..) 對啊, 想說他為什麼會做這麼不要臉的事呢?

2 F1: (..) 他 想要 試試 看 啊 (..)

3SG 意向 試す みる SFP

3→ 他 如果 試 [成功 的話]

3SG *rúguǒ* 試す 成功する 条件節マーカー

4 F2: [對啊 我就想]

(NCSC: M003)

1 F2: そうだよ、なぜ彼がこんな図々しいことを
やっているかだよ。

2 F1: 彼はやってみたかったんだろうよ。

3→ 彼が [成功したら。]

4 F2: [そうだよ。こう思っている...]

(16) は 1 行目で、F2 が自分の同僚の無断欠勤の行為に図々しいと評価している。3 行目では、F1 の「他如果試成功的話。(彼が成功したら。)」の条件節構文の「～的話。」は F2 の同僚の行為に対するネガティブな評価を表している。この条件節構文は意味的に「彼が成功したら、{やばいよ。／次もまた無断欠勤をするよ。}」というネガティブな評価を表している。Heritage & Raymond (2005: 16) では相互行為において、先行談話内容（「談話 1」）が評価 (assessments) を表し、それに対応する次の談話（「談話 2」）も評価の表出である場合、この「談話 2」は「同意、不同意、調整 (agreement, disagreement or adjustment)」を表していると指摘されている。(16) のような談話のやりとりはいわゆる「評価 (assessments)–第二評価 (second assessments)」(Pomerantz 1984) という談話構造となり、話し手は第二評価の産出を通して、先行する談話文脈における評価内容に対する同意または不同意を示す (Pomerantz 1984: 59)。本研究でも、(16) は F1 が条件節構文で第二評価を表すほかに、F2 の評価内容に同意を示していることを観察した。一方、先行する談話文脈にある評価に同意を示す (16) に比べて、(17) は条件節構文で話し手が評価を表すことで、聞き手に不同意を示す用法である。

(17) (中国の経済成長についての話。F2 は中国の経済成長がまだ高度成長になっていないと言っている。)

- 1 F1: (...) 沒有 (..) 大陸發展得(...)人家就是 (...)超(...)太快了啦 (0.7)
2 幾年 (...) 才十幾年就 (..) 就全
3 F2: (1.2) 對啦 這 他們 國內 本身(...) su (0.7)現在 跟 十年前
そうだよ その 彼ら 国内 自体 いま と 十年前
4 比 (...) 的話 (..) 那是 (...) 差距 很 大
比べる 条件節マーカー それは 差 かなり 大きい
5 → (..) 那 [如果] (..) 水平的 問題 (...) 國家 跟 國家
じゃ *ríguǒ* レベル的 問題 国 と 国
6 水平的 問題 的話
レベル的 問題 条件節マーカー

(NCSC: M013)

- 1 F1: (...) 違う (..) 中国の経済成長は (...) もうあれだよ (...) すごく
(...) 速すぎるよ (0.7)
2 何年間(かな) (...) 数十年間だけで (..) 全部は
3 F2: (1.2) それはそうだけど、彼らの国内自体(...)su(0.7) いま十年前に
4 比較する (...) と (..) それは (...) かなりの差がある
5→ (..) じゃ、[もし] (..) 経済成長のレベルの問題 (...) 国と国の間の
6 (経済成長)レベルの問題からすると。

(17) は1~2行目でF1は中国の経済成長が高度成長を遂げていることを評価している。その後、聞き手のF2は3~4行目で、まず「對啦 (そう)」で強く同意をしたうえで、続けて5~6行目で、条件節構文を通して、「国と国の間の(経済成長)レベルの問題からすると、中国の経済成長はまだ高度成長していない」という意味を表し、F1の評価に不同意を表している。

4.4 中国語の条件節構文の談話機能と対人的動機付け

中国語の条件節構文の各タイプは、談話機能と対人的動機付けについて、下の表 4 の分布となる。

表 4. 中国語の条件節構文の談話のタイプの分布表

条件節構文のタイプ	条件節構文の談話機能		比率
談話の情報構造に関わる用法	先行談話に対する条件提示 ((9), (10))		4 (16%)
談話の情報構造に関わる用法 + 対人的動機づけ	参照情報を提示する機能	(a) 聞き手の認識を改めさせる ((12), (13))。	12 (46%)
		(b) 情報要求 ((14), (15))	4 (15%)
	評価を表すモーダル機能	聞き手の評価に対する(不)同意 (a) 同意表示 ((16), 合計 2 例) (b) 不同意表示 ((17), 合計 4 例)	6 (23%)
計			26 (100%)

(コーパス: NCSC)

中国語の条件節構文の「談話の情報構造に関わる用法」は、談話ストラテジーとして、先行談話内容に対する条件を提示している。この用法は談話の「概念的構造 (e.g. 本来の条件節の意味を表すこと／先行談話につなげること)」と「情報状態 (e.g. 新情報を提示すること)」(Schiffrin 1987)に関わりがある²⁰。

一方、「参照情報を提示する機能」と「評価を表すモーダル機能」はどちらも条件節の本来の意味を表し、先行談話の内容に依存しながら、対人的機能に機能拡張していることが判明した。例えば、「参照情報を提示する機能」は「話

²⁰ Schiffrin (1987) の談話の一貫性モデルの詳しい内容は第二章を参照されたい。

し手と聞き手との間の認識的ギャップをうめる」(白川 2009: 170)と「聞き手への情報要求を行う」の対人的機能に、「評価を表すモーダル機能」は「聞き手の評価に対する(不)同意を表す」の対人的機能に機能拡張していることを観察した。なお、これらの対人的機能はいずれも Schifffrin の「談話の一貫性モデル」における「参与者構造」にも関わっている。NCSC で検出された条件節構文全体の 26 例のうち、22 例 (84%) を占めている。このことは、談話中、認識の不均衡またはギャップが発生したとき、中国語は条件節構文を「話し手と聞き手との間の認識的ギャップをうめる」(同上) ストラテジーとして多用することを示唆している。特に、「聞き手の認識を改めさせる」や「聞き手の評価に対する不同意を示す」のような非選好的応答 (dispreferred response) の環境 (environment) で、中国語は条件節構文の使用頻度が高いことを示しており、16 例 (73%) を占めている。

非従属化構文が用いられる場面について、Evans & Watanabe (2016: 31) は「非従属化は、指示表現や話し手が聞き手にとって不快であると判断される事実の陳述を避けたい場合のみならず、認識的な評価が問題となっている場合にも出現することが特に一般的であるように思われる。」と指摘している。したがって、上述の非選好的応答の環境で、中国語において条件節構文の使用頻度が高いことは一般的だと考えられる。

次節では本節での観察結果を日本語の条件節「～たら」や「～れば」節の非従属化構文と対比する。上述のような非選好的応答の環境で、条件節構文が用いられた場合、日中両言語の間に、どのような違いがあるかを考察する。

4.5 日本語のタラ・レバ節の非従属化構文との対比

以上 4.2 から 4.4 節では、中国語の条件節構文の談話の構造と談話ストラテジーを考察した。本節では、中国語の条件節構文の使用で観察した内容に絞り、日本語のタラ・レバ節の非従属化構文 (以後、「タラ・レバ節構文」と称する) を考察し、日中両言語における条件節構文の談話機能の違いを分析する。

4.5.1 日中両言語で共通している条件節の非従属化構文の用法 (1):

先行談話内容に対する条件提示

まずは「先行談話に対する条件提示」のタイプである。(18) では、F146 は F050 に「辛い物はだめなんだよね」と聞いた後、F050 は「ある程度までは大丈夫」と応答している (1~2 行目)。その後、3 行目で F146 は再度 F050 に確認し、F050 は「レバ」節構文で「よっぽど辛くなければ。」という条件を提示して F146 に応答している。

(18) (辛い物の話)

- 1 F146 : 辛い物はだめなんだよね、でもね。
 - 2 F050 : でもね、ある程度までは大丈夫。
 - 3 F146 : 本当?
 - 4→ EOS F050 : うん。(ふーん) すっごい、よっぽど辛くなければ。
- (「名大」)

次のレバ節構文も「先行談話に対する条件提示」のタイプである。日本語の (19) は 1 行目と 2 行目が「同意要求ー応答」の隣接ペアとなっており、1 行目の「～なんてないでしょうね」という発話は聞き手の同意を引き出す手段であると考えられる。3 行目で、F079 は F001 の応答の内容を踏まえ、さらに質問を追加している。その後、4 行目で F001 が「八ヶ岳行けば」という条件節構文で聞き手に条件を提示している。

- (19) 1 F079 : この辺にはイノシシなんていないでしょうね。
 - 2 F001 : ちょっと上行くといっぱいいいます。
 - 3 F079 : いっぱいいいるの? うそー。いるですか。
 - 4→ F001 : 八ヶ岳行けば。
- (「名大」)

このように、日本語でも先行談話にある条件を提示する機能が見られ、談話の情報構造に関わる用法があることが明らかになった。これは中国語の条件節構文との共通点だと考えられる。次節では中国語の条件節構文で観察した「参

照情報を提示する機能」と「評価を表すモーダル機能」という対人的動機づけをめぐり、日中両言語の対比を行う。

4.5.2 日中両言語で共通している条件節の非従属化構文の用法 (2):

聞き手への情報要求の用法

前述のように、中国語の条件節構文は「聞き手への情報要求」の談話ストラテジーを果たしている。補足的に、中国語の条件節構文における「情報要求」の用法を表す (20) が挙げられている。(20) の 1 行目は A の主張であり、2 行目は B が A の主張について、条件節構文を通して、より詳しい情報を要求している。

(20) (友達になるかどうかの基準についての話)

1 A: (前略)知道他夠不夠善良的時候，我才跟他交好朋友。

2→ B: 要是 他 不夠 善良 的話 呢?

もし 彼 否定 正直 条件節マーカー SFP-疑問辞

3 A: 就不要他這個朋友了。

(SINICA)

1 A: 彼が正直な人かどうか分かったとき、友達になるかどうかを決めるよ。

2→ B: もしそんなに正直な人じゃなかったら?

3 C: それじゃ、そんな友達いらないよ。

日本語でも (20) に類似した例が検出された。白川 (2009: 74~75) は、(21) は勧めの表現ではなく、聞き手に仮定的な条件を提示して、「どうするか (どうなるか) 」ということの問題にしておき、「話し手は、途中まで言ってやめているわけで、文字どおりの言いさし」と述べている。

(21) 1 みのり: ねえ、どうやったらいいんだろうね。

2 ひらり: サァ……好きな人には好きっていうしかないんじゃない?

3 みのり: それがいえりゃあねえ……。

4 ひらり: 私なら言っちゃう。

- 5 みのり： 言える？
6 ひらり： 言えるよ。
7 みのり： よく平気ね。
8 ひらり： だって好きなもんだもん。
9→みのり： 相手がイヤだって言ったら？
10 ひらり： 泣く。

(白川 2009: 74)

(21) はみのりは、ひらりに好きな人にどうしたらいいという問題を聞いている (1 行目)。その後、ひらりは「好きな人に好きっていうしかない」を主張し (2~8 行目)、みのりはひらりの主張について「相手がイヤだって言ったら？」という条件節構文で疑問を提出し、さらなる詳しい説明をひらりに促している (9 行目)。10 行目ではひらりが応答をした。(21) の「タラ節」構文は中国語と同様、聞き手への情報要求の談話ストラテジーを果たしている。

4.5.3 日中両言語で異なる条件節の非従属化構文の用法:

「評価モダリティ」から対人的機能へ

白川 (2009: 172) は (22') の条件節構文は (22) のように「機能的には評価のモダリティを担う形式の一つとして位置付けることができる」と指摘している。

(22) 傘を持って行ったほうがいいよ。雨が降りそうだから。

(22') 傘を持って {行ったら？／持っていけば？}

(白川 2009: 172)

そして、白川 (2009) は、(22') のような評価のモダリティ形式が (23)~(25) のように、本来の条件節の意味が希薄化し、「「勧め」の用法を派生させる」と指摘している。

(23) シャワー使ったら？

(白川 2009: 171)

(24) (外出前に鏡の前であれこれと衣装合わせをしている娘に母親が助言して)

スカーフでもしてみれば。

(米倉 2013: 130)

(25) (脱臭効果がある便器を買う提案)

1 M010: トイレを、に新聞を持って入るっていうのは、(うん) それだけ時間のかかることをするってことなんだよ。(そうだよ) 空気悪くなるって。(ああ、そういうことなんだ) うん、そういう * * * あるな。

2→ F094: えー、脱臭効果がある便器とか買えば。

(「名大」; ‘()’は聞き手の相づちを示している。)

米倉 (2013: 129~130) は、(23)~(25) の条件節構文について、「聞き手に選択の余地を残す」意味があり、また「「ば」の後続節の省略そのものも、話し手による断定を回避し、押し付けがましさを減らすことに一役かっている」と述べている。言い換えれば、「勧め」の機能を担っているタラ・レバ節構文は、話し手の押し付けがましさを軽減させる間主観性がある。

一方、(26) の中国語の条件節構文 (3 行目) が 4.3.2 で述べたように、評価を表すモーダル機能を果たしている。例えば、(26) の条件節構文は (26') のように、話し手の評価を表す形式に言い換えることが可能である。

(26) (クラス管理の話題)

1 F3: [那] 我覺得 其實 學生 (..) 多少都會 (..) um (...) 你要他們

2 乖乖的是不可能的啦 (...) 就是

3→ F1: (..) 就是 (...) 控制 在 一個 範圍 之 內 的話

あの コントロール に ある 程度 の 中 条件節マーカー

4 F3: (..) 對啦 就是 (...) 像

5 F2: (..) 至少不要打擾到其他人這樣就好

(NCSC: M001)

1 F3: [あの] 實際、學生 (..) 多少は (..) um (...) 彼らに

2 おとなしくさせるのは無理だと思うよ(...) あの

- 3→ F1:(..) あの (...) ある程度コントロールできれば。
- 4 F3:(..) そうだよ あの (...) 例えば
- 5 F2:(..) 少なくとも他の人を邪魔しないでいい。
- (26') F1:(..) 就是 (...) 控制 在 一個 範圍 之 内 的話
 あの コントロール に ある 程度 の 中 条件節マーカー
就 可以 了。
 そして 大丈夫 SFP
 「あの…ある程度コントロールできれば大丈夫だよ。」

しかし、(26) の条件節構文は、(23)~(25) の日本語のように、「勧め」の対人的機能へ拡張せず、「聞き手の評価に対する (不) 同意を表す」という対人的機能に機能拡張している。(26) は学校のクラスの管理に関する話題であり、F3 は 1~2 行目で「学生たちにおとなしくさせるのは無理だと思う」という自分の評価を表している。3 行目で F1 は F3 の評価に対して、「ある程度コントロールできれば」という条件節構文で、「第二評価²¹」を表し、F3 の評価に対する同意を表している。

なお、中国語では、評価を表すモーダル機能を担う条件節構文は発話される先行の談話文脈において、他の談話参加者の評価がまったくなければ、「形式・意味の両面にわたって不完全な文」(白川 2009: 73) ということになると考えられる。

また、面白いことに、(23)~(25) は中国語に訳すと、「勧め」の表現ではなく、聞き手に仮定的な条件を提示して、「どうするか (どうなるか)」ということの問題にしており、「話し手は、途中まで言ってやめているわけで、文字どおりの言いさし」(白川 2009: 74~75) となる ((23', 24', 25'))。

- (23') 如果 去淋浴 的话?
rúguǒ シャワーを使う 条件節マーカー
 「シャワー使ったら、どうなるか。」

²¹ 「第二評価」の説明について 4.2 を参照されたい。

(24') 如果 也 試試看 圍巾 的話?

rúguǒ でも してみる スカーフ 条件節マーカー

「スカーフでもしてみたら、どうなるか。」

(25') F094: 啊—, 如果 買 有 除臭效果 的 馬桶 的話?

えー *rúguǒ* 買う ある 脱臭効果 の 便器 条件節マーカー

「えー、脱臭効果がある便器とか買ったら、どうなるか。」

このように、日本語は条件節構文が「勧め」の意味に特化していることに対して、中国語の条件節構文は「勧め」に機能拡張せず、条件節の本来の意味を保ちながら、「評価のモダリティを担う」形式から、先行談話における聞き手の評価に対する (不) 同意を表す機能に機能拡張していることが判明した。これは中国語の条件節構文の対人的機能は、先行談話文脈に依存しなければならないという特徴があるからだと考えられる。談話ストラテジーについて、Mithun (2008:107) は次のように指摘している。

(27) It is not unreasonable to imagine that syntactically subordinate clause forms might come to be identified as less assertive than main clause forms.

「統語的に従属的な形式が主節の形式より弱い断言を表わすものとみなされるようになると想像することは不合理ではない。」

(Mithun 2008:107; 日本語訳は筆者による)

この見解から見ると、「聞き手の評価に対する (不) 同意を表す」用法において、従属節のみの言語形式である条件節構文は「断言の弱め (downgrading)」(遠藤 2012: 257) の効果があり、すなわち、「断言回避」(メイナード 2008, 米倉 2013) という間主観性を表していると思われる。

例えば、(17) を再度見る。(17) では、F1 の評価に対して、F2 は条件節構文 (5~6 行目) で F1 の評価に対する不同意を示している。(17) の条件節構文は「国と国の間の経済成長レベルの問題からすると、まだ高度成長になっていないと思う」という評価を表す機能だけではなく、また上述の Mithun の指摘のように、従属節の形式でより弱い断言を表わすものとみなされる。すなわち、(17) のような条件節構文の言語形式は間主観性が高まる効果があると考えられる。

(17) (中国の経済成長についての話。F2 は中国の経済成長がまだ高度成長になっていないと言っている。)

- 1 F1: (...) 沒有 (..) 大陸發展得(...)人家就是 (...)超(...)太快了啦 (0.7)
 2 幾年 (...) 才十幾年就 (..) 就全
 3 F2: (1.2) 對啦 這 他們 國內 本身 (...) su (0.7) 現在 跟 十年前
 そうだよ その 彼ら 国内 自体 いま と 十年前
 4 比 (...) 的話 (..) 那是 (...) 差距 很 大
 比べる 条件節マーカー それは 差 かなり 大きい
 5 → (..) 那 [如果] (..) 水平的 問題 (...) 國家 跟 國家
 じゃ もし レベル的 問題 国 と 国
 6 水平的 問題 的話
 レベル的 問題 条件節マーカー

(NCSC: M013)

- 1 F1: (...) 違う (..) 中国の経済成長は (...) もうあれだよ (...) すごく
 (...) 速すぎるよ (0.7)
 2 何年間(かな) (...) 数十年間だけで (..) 全部は
 3 F2: (1.2) それはそうだけど、彼らの国内自体 (...) su (0.7) いま十年前
 に
 4 比較する (...) と (..) それは (...) かなりの差がある
 5→ (..) じゃ、[もし] (..) 経済成長のレベルの問題 (...) 国と国の間
 の
 6 経済成長レベルの問題からすると。

まとめてみると、日本語と中国語の条件節構文の類似点と相違点は次の表 5 のようになる。

表 5. 日中両言語の条件節構文の談話のストラテジーの対比表

談話タイプ	談話ストラテジー	
	日本語	中国語
談話の情報構造 に関わる用法	先行談話内容に対する条件の提示 (日: (17, 18); 中: (8, 9))	
談話の情報構造 に関わる用法＋ 対人的動機づけ	聞き手への情報要求 (日: (19, 20); 中: (13, 14))	
	評価を表すモーダル機能	
	条件節の意味の希薄化： 「 勸 め 」 の 用 法 (例 22, 23, 24)。	条件節の意味の維持： 弱い断言で聞き手の評 価に対する (不) 同意 を表す (例 15, 16)。

4.6 本章のまとめ

以上、本節は日中両言語の条件節構文の分析を行った。その結果、まず、両言語ともに、条件節のみの言語形式で、「先行談話に対する条件提示」という談話の情報構造に関わる用法があることがわかった。

一方、対人的動機づけについて、日中両言語はどちらも条件節構文を通して、聞き手により詳しい情報を要求する談話のストラテジーが見られた。しかし、非選好的応答の談話の環境において、日中両言語には相違点が見られた。例えば、「評価モダリティ」を担う形式から対人的機能への機能拡張について、日本語の条件節構文は談話の文脈に依存せず、話し手の評価的感情を聞き手にもちかけ、「勧め」の用法に機能拡張している。それに対して、中国語の条件節構文は評価を表すモーダル機能から「聞き手の評価に対する (不) 同意」を示すことに機能拡張している。しかし、中国語の条件節構文は「聞き手の評価に対する (不) 同意」という対人的機能に機能拡張するために、先行する談話の文脈に依存しなければ、形式と意味的に不完全文になることが明らかになった。そのため、日中両言語の間主観性も異なっており、日本語は「聞き手に選択の余地を残し、話し手の押し付けがましさを軽減させる」間主観性、中国語は「断言回避」の間主観性を表していることがわかった。本章の分析結果では、

日中両言語の条件節構文の間主観性がある対人的動機付けにおいて、日本語の条件節構文は構文自体が「勧め」の対人的機能に特化している。一方、中国語の条件節構文においては、談話の意味の一貫性を維持することが優先であり、その後、「聞き手の評価に対する（不）同意を表す」対人的機能に機能拡張していることを明らかにした。

第5章 日中両言語の譲歩節の非従属化構文の形式と談話機能

5.1 はじめに

現代日本語の「ケド節の非従属化構文」（以後、「ケド節構文」）の研究は従来から盛んに行われてきた（水谷 1989, 曹 2000, 許 2004, 白川 2009）。水谷 (1989: 59~60) はケド節構文の談話機能には、「自分の意見を述べ、相手にももの言う機会を与える」用法があると述べている。曹 (2000: 89) はケド節構文を「言い終わり」と称し、「言い終わり」の「けど」で終わる発話は、「発話緩和」、「発話補完」、「発話断定回避」の三つの談話機能が現われた。」と指摘している。許 (2004) は文末に現れる「ケド」の発話は「補足説明」、「申し出／誘い」、「断言回避」などの機能を有すると指摘している。白川 (2009: 91) は「ケド節の談話機能は、聞き手の認識に何らかの改変を促すような参照情報を提示することである。与えられた情報を前提にした判断は聞き手に委ねられているが、「認識がそれでよいか確認せよ」との話し手の聞き手に対する働きかけの態度がケド節によって明示されている。」と指摘している。先行研究におけるケド節構文の談話機能は次の表6になる。

表6. 先行研究におけるケド節の非従属化構文の談話機能のまとめ

談話機能	先行研究
(A) 相手に誘いかける用法	水谷 (1989)、許 (2004)
(B) 自分の意見を述べ、相手にももの言う機会を与えるための用法	水谷 (1989)
(C) 発話緩和 (自己修正)	曹 (2000)
(D) 発話補完 (情報補足)	曹 (2000)、許 (2004)
(E) 断言回避	曹 (2000)、許 (2004)
(F) 「話し手は聞き手の認識状況に対して何らかの改変を促す (白川 2009: 32)」	許 (2004)、白川 (2009)

例えば、(1) のケド節構文には「話し手は聞き手の認識状況に対して何らかの改変を促す」という談話機能があると白川 (2009: 32) は述べている。

(1) [早苗が入ってくる]

早苗：「失礼します。会議が、もうはじまるそうですけど……」

正樹：「え? (と、時計を見る) あ…… (忘れていたのだ) 」

(白川 2009: 15)

しかし、(1) を (1') のように中国語の「雖然 (*suīrán*, 「けど」)」節に訳すと、不自然な表現になる。(1) の場合は、中国語であれば、「雖然」がないほうが自然であると思われる。

(1') ? [早苗進來]

早苗：「不好意思。雖然 會議 似乎 馬上 要 開始了……」

失礼する *suīrán* 會議 そう もう する はじまる

正樹：「啊? (看了手錶) 啊…… (忘了)」

また、(2) と (3) のけど節はどちらも、何らかの情報を補足しているが、(2) は (2') のように「雖然」で訳せるが、(3) は訳すことができないと考えられる ((3'))。

(2) (日本の大学についての話)

ジョソン: ……その 890 校の中には短大も入っているんでしょうか。

小林：入っていると思いますよ。何校だか忘れましたが。

(水谷 1989: 58)

(3) (学生が数人の先生に友達目から血が出たことを知らせる場面で)

1H：→それにしちゃあ大事（おおごと）じゃないね。←、眼球↑限球↑

2S：眼球よ、白いところからだけど。

3H：にじむんじゃあなく、にじむの↑

4S：でちゃったの、あのねー、切っちゃったの、

こうゆうのでね、ベニヤで。

(曹 2000: 94)

(2') 我 想 有包含 喔。 雖然 忘 了 有 幾校。

1SG 思う 入っている よ-SFP *suīrán* 忘れる 過去 ある 何校

「入っていると思いますよ。何校だか忘れましたが。」

(3')? 2S: 眼球 喔...雖然 是 從 白色的部分

眼球 よ *suīrán* COP から 白いところ

「眼球よ、白いところからだけど。」

例えば、(2) の「何校だか忘れましたが」は「入っていると思いますよ」に対する情報の補足、(3) の「白いところからだけど」は「眼球よ」に対する情報の補足であると考えられる。では、なぜ中国語の場合において、(2) と (3) のような差異が生じるのだろうか。本章では、日中両言語のケド節のような譲歩節の非従属化構文の談話機能の違いについて議論する。

次に、本章の研究対象について述べる。日本語の「ケド」節に対応する中国語の複文は (4) と (5a) の「雖然 P, 但(是) (*dàn(shì)*) Q。」や (5b) の「儘管 (*jǐnguǎn*) P, 但(是) Q。」がある。(4) は従属節と主節の意味ではお互いに対比している「対比用法」であり、(5) は話し手は従属節で述べることを容認したうえで、従属節と対立した主節を述べる「譲歩用法」である (邢 2001: 467)。

(4) 対比用法

那時 我 的 祖母 雖然 還 康健，

あの時 1SG の 祖母 *suīrán* まだ 元気

但 母親 也 以 分擔 了 些 家務，……

dàn 母 も 完成 分担 過去 いくつか 家事

「あの時、私の祖母はまだ元気だったんだけど、母もいくつかの家事を分担していた。」

(5) 譲歩用法

a. 雖然 多 花錢 ， 他 也 不 肯 放 過 這 個 機 會 。

suīrán 多く金にかかる 3SG も 否定 逃す この チャンス

「多くのお金にかかるが、彼もこのチャンスを逃したがらない。」

b. 儘管 彭德懷 同志 也 有 缺點，但 對 彭德懷 同志 的

jǐnguǎn 人名 同志 も ある 欠点 *dàn* へ 人名 同志 の

處理 是 完全 錯誤 的。

処分 COP 完全に 間違う NMLZ

「彭德懷同志にも欠点はあるけど、彭德懷同志への処分は完全に間違っているよ。」

(邢 2001: 486, 466, 304)

しかし、(5b) の「儘管 P, 但(是) Q 。」は主節がない使用例が談話のコーパスから検出されないため、本研究の研究対象から除く。一方、(4) と (5a) の「雖然 P, 但(是) Q 。」の「雖然 P 。」の主節がない言語形式は数多く検出されるため、本章は中国語の「雖然」節の非従属化構文（以後「「雖然」節構文」）を研究対象とする。

先に本章の研究結果から述べると、日本後の「ケド」節構文と中国語の「雖然」構文はどちらも、「先行談話への自己修正／情報補足」などの談話の意味の一貫性に関わる用法があるが、日本語のケド節構文は「先行談話への自己修正／情報補足」からさらに「聞き手に何らかの行動を促そうという態度を明示的に示す」という対人的機能に機能拡張している。また、「話の唐突さを緩和する」（日本語記述文法研究会 2008: 261）という対人的機能を果たすために、中国語の「雖然」節構文は先行する談話文脈に関連した新しい話題を相手に提示しなければならないということに対して、日本語の「ケド」節構文は先行談話との関連性がなくても、新しい話題を導入することが可能であることがわかった。上述の日中両言語の談話機能の違いは、中国語の「雖然」節構文は常に先行談話に対する譲歩・対比の意味を保たなければならないという特徴があり、日本語のケド節構文は譲歩・対比の意味が希薄化していると考えられる。

本章の構成は次のようになる。5.2 節から 5.4 節では中国語の「雖然」節構文の談話構造と機能を分析する。5.5 節は日本語のケド節構文との対照研究を行い、日中両言語の違いを明らかにする。5.6 節は本章のまとめである。

5.2 談話の情報構造に関わる用法:

先行談話への「自己修正／情報補足／話題導入」の機能

先行談話への「自己修正」（曹 2000）は、話し手がある意見或いは評価を表した後で、次の発話でその意味または評価の修正を行う機能である。例えば、(6) について、曹 (2000: 94) は「3S の「けど」で言い終わる発話は正しく理解してもらうため付け加えた形の自己修正と言える。」と指摘している。

(6) 自己修正する場合

1 S: あの、チケットどうするかって★ゆう電話。

2 H: →ふーん。←

3 S: わたしすっかり忘れてたよーとかいって、元気だなーとか思って、
で、次の日会社行ったら、はりきって仕事してたよ、はりきって
いないかもしれないけど。

4 O: わたしの心の叫びが通じたのねー。

(曹 2000: 94)

先行談話への「情報補足」(曹 2000, 許 2004)とは先行談話に対するある情報を補足している用法である。例えば、(7)について、許(2004: 60)は「話し手がその置かれている状況と対比する情報を取り上げて補足説明をするときに使われる。」と述べている。

- (7) 1 実 「こんな風にさ、全部集まったのなんか、一年ぶりぐらいじゃないの。みんな、仕事持ちちまって、忙しくて、つまんなくなってきたよなあ。」
2
3
4 健一「そうだな。」
5 良雄「はじめはほとんど、仕事おぼえるので余裕なかったけど。」
6 陽子「少し、楽になって来たんじゃない?」

(『ふぞろい2』, 許 2004: 60)

具体的に、まず、(7)では「今は仕事にもだいぶ慣れてきて、時間とところの余裕もあるので、皆で集まることができた(許 2004: 60)」という1~3行目の実の話が「先行談話」として想定されている。そして、5行目で、良雄は自身が述べた話の文末に「けど」をつけて提示することによって、「先行談話」に対する補足説明を行っている。

次に、先行談話への「話題導入」はいわゆる談話の「前置き」(日本語記述文法研究会 2008)の用法である。(8)の前置きの「けど」節は「節の内容が主節の内容を言うための前置きであって、その文で本来言いたいことそのものではないことを示す」ことを表している(同上: 259-261)。

(8) (元の話題から別の話題に移行する際)

- 1 A: 今度掛けとく. のりおさんにも掛けたいし→
- 2 私ものりおさんの声も聞きたいし→
- 3 B: うんうん[うん.] &=noise
- 4→ A: [うん] →うん. .h 後ね→ あの&=laugh
- 5 全然話違うけどね→
- 6 あの飛行機がね→ (飛行機の話が続けている)

(「名大」)

すなわち、(8) は A と B が「のりおさんに電話をかける」話をしているが、4 行目で、A が「全然話が違うけどね」を通して、新しい話題 (飛行機の話) を導入する前置きとなり、「話の唐突さを緩和する」(同上: 261) という効果も狙っている。次節では「雖然」節構文の先行談話への自己修正、情報補足、話題導入の談話機能进行分析する。

5.2.1 先行談話への「自己修正」の機能

(9) は話者の評価が表された直後、「雖然」節構文が用いられる「自己修正」の例である。5~6 行目で、A は評価を出してから、7 行目で、「雖然」節構文を通して、自分の意見を修正している。

(9) (政治の話)

- 1 A: 那这个很明显,不过林洋港不可能赢嘛.
- 2 B: &=h.
- 3 A: 那 他不可能会赢的啦.
- 4 B: 对.
- 5 A: 那只是说,我倒是觉得就是说 他们这些一些论调对台湾将来的伤害
- 6 会很大。
- 7→ 虽然 说 <English I don't know>, 这是 很 复杂的 问题,
suirán 助詞 知らない これ とても 複雑な 問題
- 8 就是说 到底 怎么样 是 好的 还是 坏的.
つまり いったい どんな COP いい 又は 悪い

(CallFriend: 5855; 7 行目の‘English’は英語で発話されたときの記号である。)

- 1 A: これではっきり分かっている。でも、林洋港は勝てないよ。
- 2 B: (笑)
- 3 A: あの、彼は勝てないんだよ。
- 4 B: そう。
- 5 A: ただ、むしろ彼らのいくつかの言論は将来台湾に対して
- 6 大きなダメージを与えると思う。
- 7→ 知らないけど。これはとても複雑な問題なんだけど。
- 8 つまり、いったいどうすれば良いのか悪いのか

5~6 行目は A のターンの完結可能な時点だと思われる。談話分析において、6 行目は、A の発話の「次の話し手のターンに移行する適切な場所²² (transition relevance place, TRP)」という「話者交替の時点」だと考えられている。話し手は TRP が可能な時点で、「雖然」節構文を通して、自分のターンを延長している。談話ストラテジーとして、話し手が自分のターンを延長した「雖然」節構文は、次の聞き手に対して問題が起ころうな話者交替になりそうな場面を処理したり (Schegloff 2000: 13)²³、または、次の話し手のターンに出現可能な不同意を処理したりする機能がある (Luke 2012: 160)²⁴。したがって「雖然」節構文は 5 行目の TRP に現れ、5 行目の断言的な口調を和らげる談話機能があると考えられ、間主観性の効果があると考えられる。

(10) は 1 行目で B が「ずっとあなた (A) と親しい関係だ」という認識を A に示している。1 行目は終助詞の「哎 (「よ」に相当する意味)」が用いられ、1 つのまとまった発話だと考えられ、すなわち TRP の時点だと考えられている。

²² 高木・細田・森田 (2016: 53) 訳

²³ 原文: managing problematic transitions to a next speaker

²⁴ 原文: handling possible upcoming disagreement

(10) (知り合いの程度の話)

- 1 B: 我现在还一直跟你很熟哎.
2→ 虽然 好像 我们 好像 四五年 都 没有
suīrán らしい 私達 らしい 四五年 ずっと ない
3 都 没有 很少 讲话 哦.
ずっと ない 少ない しゃべる SFP
4 A: 嗯哼.

(CallFriend: 5855)

- 1 B: 私はいまもまだあなたと親しくしているよ。
2→ 四、五年の間、私たちはずっと、ずっと、
3 そんなに多く話していないけどね。
4 A: うんうん。

このような話者交替可能な時点には、「四、五年の間、私たちはずっと、ずっと、そんなに多く話していないけどね」という「虽然」節構文が使われている。この場合の「虽然」節構文は B が 1 行目の自分の言論を修正する機能があると考えられる。なお、談話ストラテジーとして、B は TRP の時点に「虽然」節構文で、次の話し手のターンに出現可能な不同意を処理し、1 行目の断言的な口調を自己修正している。

(11) では、A が 1~3 行目でフリーサンプルのアンケート調査の項目を全部記入したと言っている。

(11) (フリーサンプルのアンケート調査についての話)

- 1 A: 對啊. 那他像那種什麼噁什麼 <unclear>
2 他就送你那個兩個禮拜的藥水.
3 那我想那個我也沒有要.? xxx 沒有用,
4→ 雖然 我 已經 去 要 了.
suīrán 1SG もう 行く もらう SFP
5 B: &=h?

(TalkFriend: 5943)

- 1 A: そうそう、で、そのような、うん、なんか xxx
- 2 で、(アンケートを記入した後) その店は二週間分の目薬を送ってくれる。
- 3 でも、いらないと思う。xxx 使っていないから。
- 4→ もうもらいに行ったけど。
- 5 B: (笑)

その後、4行目でAは話者交替の時点 (TRP) に「雖然」節が用いられ、3行目の評価を自己修正している。(11) は「先行談話への自己修正」の機能が見られ、談話ストラテジーは断言的な口調を和らげていると考えられる。

5.2.2 先行談話への「情報補足」の機能

(12) と (13) は先行談話への「情報補足」の機能がある談話例である。(12) はAがBと台湾の清華大学の特色について話し合っている場面である。

(12) (台湾の清華大学の特色について)

- 1 A: 清華 都 是 理工科 啊，
大学名 全部 COP 理工学部 SFP
- 2→ 雖然 就 是 沒有 什麼 念 法律 或 經濟、政治。
suīrán 助詞 COP 否定 なんか 勉強 法律学部 或いは 經濟、政治学部
- 3 B: 經濟有啦！

(SINICA)

- 1 A: 清華大学 (のみんな) は全部、理工学部で勉強しているよ。
- 2→ 法律学部或いは經濟、政治学部なんか (を勉強する人) がないけど。
- 3 B: 經濟学部 (を勉強している人) はいるよ。

1行目で、Aは「清華大学のみんなは全部、理工学部で勉強しているよ。」と発話した後、「雖然就是沒有什麼念法律或經濟、政治。(法律学部或いは經濟、政治学部なんかを勉強する人がないけど。)」の「雖然」節 (2行目) を通して、情報を補足している。

(13) は1行目でMが「あなたたちは知り合いの時間が長くて、その後、付き合い始めた」という認識をFに言っている。

(13) (Fの恋愛の話について話している。Mは、Fは恋人と長く知り合いだった後、付き合い始めたと思っている。)

- 1 M: (..) (前略) (...) 你們是先認識很久才那個
2 F: (..) 沒有認識很久啊 (..) 我們沒有認識很久啊 (0.5) 我是暑假 (..)
3 就是 (..) 就我們那 (..) 去當代表隊口琴營的學員的時候
4 (..) 我才認識他的啊
5 M: (1.0) 喔 (..) 也是 (..) 可是
6→ F: (..) 雖然 說 高中 (..)
suīrán 助詞 高校
7 M: (...) [知道 的]還是[知道]啊
8 F: [因為 我 高中] (..) [沒有] (..)我高中的時候對他完全沒有任
9 何印象
10 M: (0.0) 但你知道 [這個人啊]

(NCSC: M019)

- 1 M: (..) (前略) (...) あなたたちは知り合いの時間が長くて
2 F: (..) 長くないよ (..) 私たち、そんなに長い間知り合いだったわけ
3 ではないよ (0.5) 私は夏休みで (..)
4 その (..) 私たちは (..) 代表チームとしてハーモニカキャンプに
5 参加したとき
6 (..) 知り合ったんだよ
7 M: (1.0) そう? (..) まあ (..) でも
8→ F: (..) 高校時代は (彼氏を知っていた) なんだけど (..)
9 M: (...) [知っていた] ほら [知っていた] でしょう
10 F: [高校のとき] (..) [ない] (..) 高校のとき、彼のことは全然
11 印象に残っていないんだ
12 M: (0.0) でも知っていたでしょう [この人]

FはMの認識を否定し、恋人と知り合った時点をMに話している(2~4行目)。5行目ではMによる1.0秒の沈黙があり、「可是(でも)」を発話して反論しようとする姿勢が見られる。6行目で、Fは「雖然」節を通して、「同じ高校のサークルにいたんだけど」ということを言おうとし、2~4行目の自分の発話に情報補足を行っている。

その後、Mは「ほら、やっぱり高校時代から知っていたでしょう」のような口調でFの発話に遮っている(7行目)。Fはその後で当時、自分の恋人に対して何の印象も持っていなかったことを説明したが、Mは「でも、やっぱり、その時、あの人を知っていたでしょう」と主張している。

5.2.3 先行談話に関連した話題を導入する機能

次の(14)~(16)は先行談話に関連した話題を導入する機能を担うことが観察されている。なお、(14)~(16)では、「雖然」節構文によって導入された話題は、いずれも先行する話題を対比的に結び付けているという特徴がある。例えば、(14)はAの知っている人がマイクロンへの投資を通してかなり儲かっている話である。

(14) (マイクロンの投資の話について)

- 1 A: 我們學校有一個人喔,他在那個報紙上面.
- 2 B: 恩.
- 3 A: 他,用,四千塊啊.
- 4 B: 恩亨
- 5 A: 賺了三十萬
- 6 B: 哇她媽的,滿好的嘛,這種-這種喔,你有錢對不對,你有這個錢,
- 7 那你有這個<ENG tip ENG>喔.
- 8 A: 恩哼.
- 9 B: 那他可以很簡單,對不對?不需要那個什麼博士什麼小的什麼對不對?
- 10 A: 恩哼.
- 11 B: 你有這個<ENG tip ENG>呢那很簡單.
- 12 A: Yeah.

13→B: 對啊, 雖然 他們 很 早 就 曉得 那個
そう *suīrán* 彼ら 程度 早い 助詞 わかる あの

14 <ENG micron ENG> 會 很, 很 好.
マイクロン 未来 程度 程度 良い

15 A: 嗯哼.

16 B: 對不對那傢伙就買了. 他那個時候那個錢也不多, 所以, 賺了不多,
17 可是賺得滿好的

(CallFriend: 5069; 'ENG'は英語で発話されたときの記号である。)

1 A: うちの学校にある人がいて、彼は新聞の記事に掲載されている。

2 B: うん。

3 A: 彼は四千元(台湾ドル)でね。

4 B: うんうん。

5 A: 30 萬元を儲けた。

6 B: うわー、クソ、すごくいいね、これ-これね、あなたはお金があつたら、
でしよう、お金があつたら、

7 そして、あなたはそのコツが分かったらね。

8 A: うんうん。

9 B: それで彼はとても簡単にできるだろう? 博士号なんかはいらない
だろう?

10 A: うんうん。

11 B: このコツが分かったらね、それは簡単さ。

12 A: そう。

13→B: そう、っていうか、彼はずっと昔からあれ、

14 あのマイクロン(の投資)が良くなるのが分かっていた。

15 A: うんうん。

16 B: だろう。あいつがこれで買った。彼はそのときお金を多く持っていなかった。だから、そんなに儲かっていなかった。

17 でも、うまく儲けたんだ。

1~12 行目は同じ話題が続き、11 行目で B が「你有這個 <ENG tip ENG> 呢那很簡單 (コツが分かったらね、それは簡単さ)」と発言し、12 行目で A が

「そう (Yeah)」と賛同している。そして、1~12 行目までの人物の話題は引き金となり、13~14 行目で B は「對啊 (そう)」を発してから、「彼はマイクロンの投資がうまくいくことを知っている」という「雖然」節構文に関連した話題を持ち出している。その後、15 行目で A は「嗯哼 (うん、うん)」という「継続子 (continuer)」(Schegloff 1982, 日本語訳: 遠藤 2012) を発するのみであり、B の物語りの詳述を促すサインとなっている。16~17 行目では A が「雖然」節構文で提示した物語を始めている。

(14) の「雖然」節構文によって導入された「彼はマイクロンの投資がうまくいくことを知っている」は先行する談話の「コツが分かったら誰でもできる」を対比的に結び付けているという特徴がある。そして、上述のように、(14) の接続詞の「雖然」は対比を表すマーカーであるが、さらに話題転換の機能を担う「っていうか」(若松・細田 2003) と同様の用法を持っていると考えられる。

次の (15) は舞台劇の話の経費に関する談話である。A は 1~2 行目で「公的機関に出資されたら、政府の方針でがんじがらめになって、好きなように仕事ができない」と述べている。

(15) (舞台劇の演出の経費の話)

- 1 A: (略) 如果你做了政府的機構，來搞這個舞台劇的話，(中略)，
- 2 很多事情綁手綁腳的就是了。
- 3 B: 對，還有你自己最想做的事情做出來，
- 4→ 雖然 是 說 怕 虧 錢 是不是？
suīrán COP 言う 恐れる 損する お金 違うの
- 5 A: 對…，
- 6 B: 錢方面沒有問題，可是個人的話，(後略)

(SINICA)

- 1 A: 公的機関が主催した舞台劇の演出の仕事を受けたら、(中略)、
- 2 政府の方針でがんじがらめになって、好きなように仕事ができないんだよ。
- 3 B: そう、また一番やりたいのを遠慮なく演出できないね。
- 4→ っていうか、これで(個人的な出資で)お金を損しちゃうことを恐れているって前に言ったよね。

5 A: そうそう...

6 B: お金なら問題がないと思うけど。でも個人的な出資ならちょっと...

3行目で、Bはまず、Aの談話内容に同意し、その後、4行目で疑問形の「雖然」節を用いて、「っていうか、個人的な出資なら金を損しちゃう可能性があるって言ったよね?」という「金を損する」の話題をAに持ち出している。そして、5行目でAは「そう」と応答し、Bの4行目で言っていることを容認している。その後、6行目でBは続けて4行目の「雖然」節によって提出された話題を続けている。言い換えれば、(15)の疑問形の「雖然」節構文は聞き手に応答を求めるほかに、先行談話に関連した話題を導入する引き金となり、聞き手の容認を得た後で、新たな話題が続くというパターンだと思われる。なお、(15)の「雖然」節によって導入された「個人的な出資」は、内容の衝突する先行談話の「公的機関に出資されること」を対比的に結び付けているという特徴がある。すなわち、(15)の「雖然」は譲歩の意味を表すマーカーでもあると考えられる。次の(16)も「雖然」節構文によって先行談話に関連した話題を導入する例である。

(16) (大学4年生の体育の授業の話)

1 A: 下學期可以超修，我大三就可以畢業了。加上，

2 B: 可是，要那麼早畢業好嗎？沒有那麼誇張喔！！

3 A: 沒有啦！！大四是體育必修啊！！

4 B: 對啊！體育必修。

5→ A: 雖然 現在，現在 什麼 法律 又要 規定 變 選修
suīrán いま いま なんか 法律 また 規定する なる 選択科目

6 了 啊？大四，
終助詞 SFP 四年生

7 B: 變選修了喔？

8 A: 快了呀！

9 B: 變選修了喔？

10 A: 對啊！他說大四選修，大...

11 B: 那有沒有學分？

12 A: 有，有學分。

(SINICA)

1 A: 来学期は先に(大学 4 年生の)履修単位を取ることができるから、
そうしたら、3 年で卒業できるよ。それに...

2 B: でも、そんな早く卒業するって本当にいいの。それはもってのほかだよ。

3 A: 冗談だよ。4 年生の体育の授業は必修科目だから。

4 B: そうだよ、体育の授業は必修科目だよ。

5→ A: っていうか、いま法律でなんかそれを選択科目にする話が

6 あるじゃない？ 4 年生。

7 B: もう選択科目になってる？

8 A: もうすぐだよ。

9 B: もう選択科目になってる？

10 A: そうよ！4 年生で選択科目になるって、大(学四年)...

11 B: 単位がある？

12 A: ある、単位がある。

(16) は「大学 4 年生の体育の授業」に関わる談話である。3 行目で A が「学部四年生の体育科目は必修だ」という主張をし、4 行目で B がそれに賛同している。そして、5~6 行目で A は「雖然」節構文によって「いま法律でそれ (体育の授業) を選択科目にする話があるじゃない？」という先行談話に関連した話題を導入している。7 行目で B が「もう選択科目になってる？」と問いかけると A は 8 行目からこの新しい話題を始めて、9~12 行目の談話は「雖然」節構文で導入された新たな話題をめぐって続いている。なお、(16) の「雖然」節によって導入された「いま法律でなんかそれを選択科目にすること」は、内容の衝突する先行談話の B の発言の「体育の授業は必修科目だよ」を対比的に結び付けているという特徴がある。すなわち、(16) の「雖然」は (15) と同様に譲歩の意味を表すマーカーでもあったと考えられる。

(14)~(16) の「雖然」節構文は、いずれも先行談話に対する対比・譲歩の意味を保持しながら関連した話題が導入されたとき、用いられる言語形式である。

このタイプの「雖然」節構文には発話された後で、聞き手が導入された話題の語りを促すサインを示し、導入された話題が続いているパターンが見られた。例えば、聞き手は、(14) の「うんうん」の話題の継続子の返答、(15) の「そう」の容認表現、(16) の「もうそうになっているの」のような疑問表現を通して、導入された話題の語りを促すサインを示している。言い換えれば、このタイプの「雖然」節構文は、常に聞き手の反応を確認する効果があり、談話ストラテジーとして「話の唐突さを緩和する」（日本語記述文法研究会 2008: 261）という間主観性があると考えられる。

5.3 「雖然」節構文の対人的動機付け：不同意の発話行為を緩和する効果

本節の「雖然」節構文は「部分的同意 (partial agreements)」(Pomerantz 1984: 75) から不同意を表す機能が観察され、省略された不同意の内容を聞き手に推測させ、不同意の発話行為を緩和する談話ストラテジーが見られる。²⁵この用法は談話コーパスで 1 例しか検出されず、出現頻度が非常に少ない例である。

例えば、(17) は男子アイドルグループの Winds のメンバーについての談話であり、話し手の F2 が直前の F3 の評価に対して、「雖然」節構文を使って、「部分的同意」を表している。

(17) (男子アイドルグループ Winds のメンバーの話について)

- 1 F3: (0.0) 你知不知道 W-inds@s:eng
- 2 F2: (..) 我知道
- 3 F3: (..) 你知不知道涼平
- 4 F2: (..) 我知[道]
- 5 F3: (..) [他 很] 可愛 他 很 帥
- 6→ F2: (0.0) 雖然 他 還蠻 可愛
suīrán 3SG わりと かわいい
- 7 F3: (..) 屁啦 明明就比較帥

²⁵ 同意の後で、不同意の内容が発話される例は次のようになる (Pomerantz 1984: 75)。
 (例) (G'IB 4: 32)

R: Butchu admit he is having fun and you think it's funny.
 →K: I think it's funny, yeah. But it's a ridiculous funny.

- 1 F3: W-inds を知ってる？
- 2 F2: 知ってる。
- 3 F3: そのメンバーの涼平くんを知ってる？
- 4 F2: 知っている。
- 5 F3: 彼はかわいくて、イケメンだし。
- 6→ F2: 彼はわりとかわいいけど。
- 7 F3: うそ、(彼は)明らかにイケメンなのに。

5 行目では F3 がメンバーの涼平について「かわいくて、イケメンだし」という評価を与えており、6 行目では、F2 が「雖然他還蠻可愛 (彼はわりとかわいいけど)」という「雖然」節構文によって評価を表明し、「かわいい」の部分に同意しつつも「イケメン」の部分には不同意を示している。すなわち、「雖然」節の完全文には「かわいい」と対比している評価の「かっこいいと思えない」が省略されている。話し手は単独的な「雖然」節構文を通して、このような部分的同意を示すことによって、不同意の発話行為を緩和する効果があると考えられる。

5.4 中国語の「雖然」節構文の談話構造や談話ストラテジー

中国語の「雖然」節には 5.2 の「情報構造に関わる用法: 先行談話への自己修正／情報補足／話題導入」と 5.3 の「対人的動機付け: 反対意見の表明」の談話ストラテジーがあることが明らかになった。まず、「談話の情報構造」に関わる用法、すなわち先行談話への「自己修正」、「情報補足」、「話題導入」は合計 23 例が検出された。「対人的動機付け」に関わる用法は 1 例のみ検出されたが、「部分的同意」を示す場合に用いられ、不同意の発話行為を緩和する効果があると考えられる。

Schiffrin の談話モデルの観点からみると、5.3 と 5.4 の「雖然」節構文の談話モデルはいずれも対比または譲歩の意味を保ちながら、「情報補足」や「断言回避／話の唐突さを緩和する／不同意の発話行為を緩和する」の対人的機能などの発話行為を行っていることが判明した。すなわち、「雖然」節構文はいずれも先行談話と論理的に結びつけることになるため、「概念的構造」と関わり

がある。これは 5.5 の日本語のケド節と異なっている点だと考えられる。「雖然」節構文の談話機能は表 7 のようになる。

表 7. 話し言葉コーパスにおける「雖然」節構文の談話のタイプの分布表

タイプ	談話機能	談話ストラテジー	比率
談話の情報構造に関わる用法	先行談話への自己修正 ((9)~(11))	断言的口調を和らげる	5 (22 %)
	先行談話への情報補足 ((12), (13))	情報補足	13 (57 %)
	先行談話に関連した話題を導入する機能 ((14)~(16))	話の唐突さを緩和する	4 (17 %)
対人的動機付け	部分的同意を示す ((17))	不同意の発話行為を緩和する	1 (4 %)
計	23 (100%)		

上の表 7 から「雖然」節構文は情報構造に関わる用法が対人的動機付けに関わる用法に比べ、圧倒的に多く検出されており、情報構造に関わる用法から対人的機能に機能拡張した例が多いと判明した ((例 9~11, 14~26))。このことは「雖然」節構文の談話機能が談話文脈によって理解されなければならないということを示唆している。次節は日本語のケド節の非従属化構文との対比を分析する。

5.5 日本語のケド節の非従属化構文との対比

日本語のケド節の非従属化構文（以後、「ケド節構文」）について、白川 (2009: 91) は「ケド節の談話機能は、聞き手の認識に何らかの改変を促すような参照情報を提示することである。与えられた情報を前提にした判断は聞き手に委ねられているが、「認識がそれでよいか確認せよ」との話し手の聞き手に対する働きかけの態度がケド節によって明示されている。」と指摘している。横森 (2013) は自然談話のデータから、ケド節構文には「詳述促し」と「問

題対処促し」などの談話のストラテジーがあると指摘している。例えば、(18)ではレストランのウェイターが客全員にコーヒーか紅茶の、どちらがいいかを尋ねている。この場合のケド節は「与えられた情報を前提にした判断は聞き手に委ねる」(白川 2009: 91) という談話ストラテジーであると考えられる。

(18) X : コーヒーか紅茶がつきますけど。

M 031 : あ、コーヒー。ホットコーヒー。

F 098 : あたしも。

F 013 : あたしもコーヒー。

(「名大」)

しかし、中国語の談話コーパスでは、(18) のケド節構文のように、何らかの情報を提示することによって、聞き手の認識を改めようとしたり、聞き手に何らかの対処をしてもらうタイプの談話ストラテジーが見当たらない。従って、日本語と対比するために、本節では、中国語の「雖然」節構文で明らかになった「先行談話への自己修正」、「先行談話への情報補足」、「先行談話に関連した話題を導入する機能」、「部分的同意を示す機能」の談話機能に絞り、日本語のケド節構文を考察する。この対比研究を通して、「雖然」節構文とケド節構文の談話機能の違いを分析する。

5.5.1 日中両言語で共通している譲歩節の非従属化構文の用法:

「部分的同意」を示す場合

5.3 で、中国語は「雖然」節構文で部分的同意を示すことが可能であることがわかった。このような用法は、実際、日本語の談話コーパスでも数多く観察されている。例えば、(19) は A が花の絵を描くことに対して、「簡単ね」という評価を出してから、B が「うん、やる事は簡単だけど」という評価を出している。

(19) (花の絵を描くことについて)

1 A: 簡単ね.

2→ B: うん. 簡単簡単うん やる事は簡単だけど.

3 A: うん.

4 B: それは絵を細かい絵をやったら ほら時間がかかるじゃない.

(CallHome: 2239)

しかし、この評価は1行目のAの「簡単ね」に同意を示すわけではなく、むしろその後、4行目でAの評価に不同意を示すことを投射している。すなわち、(19)のケド節は「やる事は簡単だ」ということを承認したと同時に、「やる事は簡単だ」に衝突する事柄の「それは絵を細かい絵をやったら時間がかかる(4行目)」を対比的に結び付けている譲歩の意味がある。(19)のケド節構文には、このような譲歩の意味がある用法があるため、(19')のように、中国語の「雖然」節構文に訳されうるわけである。

(19') 2 B: 對，簡單簡單，恩，雖然 要做的 事情 是 很簡單。

うん 簡單簡單 うん *suīrán* やる 事 COP 簡單

「うん. 簡單簡單うん やる事は簡単だけど.」

談話コーパスの調査によると、ケド節構文で「部分的同意」を表すことによって聞き手への反対意見を示す用法の使用頻度は中国語に比べ、日本語において圧倒的に多いということであるが²⁶、「部分的同意」を表す用法は日中両言語において観察されている。

5.5.2 日中両言語で異なる譲歩節の非従属化構文の用法 (1):

先行談話への自己修正／情報補足

中国語の「雖然」節に見られた、話し手が自分のターンで自分の談話を修正する用法もケド節構文には存在する。例えば、(6)を再度見る。

(6) 自己修正する場合

1 S: あの、チケットどうするかって★ゆう電話。

2 H: →ふーん。←

²⁶ 中国語のコーパスでは1例しか観察されていない。

3S: わたしすっかり忘れてたよーとかいって、元気だなーとか思って、
で、次の日会社行ったら、はりきって仕事してたよ、はりきって
いないかもしれないけど。

4O: わたしの心の叫びが通じたのねー。

(曹 2000: 94)

(6) は3段目の「はりきって仕事をしてたよ」という TRP では、その後直ちにケド節構文が現れ、「はりきって仕事をしてたよ」に対しての自己修正を行っている。

曹 (2000: 94) は「3S の「けど」で言い終わる発話は正しく理解してもらうため付け加えた形の自己修正と言える。」と指摘している。(20) も「先行談話への自己修正」のタイプであり、ケド節構文は話し手の洋一が自分の発言の「ないな」に対する修正を行っている。

(20) 根本: お前はゆき…女房[注:洋一の妻]に関心あるのか。

洋一: ……ないな。……だからって不倫したりする気もないけどね。

(白川 2009: 19)

ケド節構文ではある情報を聞き手に提供する「先行談話への情報補足」タイプも観察されている。前掲の (3) を再度見る。(3) の H と S は同じ職場の同僚である。

(3) (学生が数人の先生に友達目から血が出たことを知らせる場面で)

1H: →それにしちゃあ大事（おおごと）じゃないね。←、眼球↑限球↑

2S: 眼球よ、白いところからけど。

3H: にじむんじゃあなく、にじむの↑

4S: でちゃったの、あのねー、切っちゃったの、
こうゆうのでね、ベニヤで。

(曹 2000: 94)

1H で、H は「眼球から血が出たのか」(曹 2000: 94) という質問を S に聞いている。S は「眼球よ」という肯定的な応答をしてから、「白いところからだけど」というケド節構文で「眼球」というより、「白いところ」から出血したという情報を補足している。前掲の (2) も「先行談話への情報補足」の使用例である。

(2) (日本の大学についての話)

ジョソン:その 890 校の中には短大も入っているんでしょうか。

小林: 入っていると思いますよ。何校だか忘れましたが。

(水谷 1989: 58)

他方、(21) のケド節構文は「先行談話への情報補足」のほか、対人的機能を表示している例である。(22) は発話の TRP の時点に現れ、「せっかくだけど」という話し手の残念な気持ちを補足して示しているほか、(21') のように、「せっかくだけど、今回は遠慮しておくよ。」という発話解釈を聞き手に判断させるという間主観性があると考えられる。

(21) (食文化の研究会に行こうとさそわれて)

そうだなあ。食べるのならともかく、話を聞くだけだなんて、

ちょっと気が進まないね、せっかくだけど。

(水谷 1989: 58)

(21')、せっかくだけど、今回は遠慮しておくよ。

興味深いことに、「先行談話への自己修正 ((6)) / 情報補足 ((2))」の機能を果たしたケド節は「雖然」節構文に対訳することが可能であるが (6', 2')、(20)、(3)、(21) のケド節は「雖然」節構文に対訳したら、不自然になる ((19', 3', 20''))。それは (20) や (3) のケド節構文は情報の補足だけではなく、さらに「聞き手の認識状態を変えて結果的に何らかの行動を促そう」という態度を明示的に示している」(白川 2009: 33) 機能も含んでいるからである。

- (6') 3 S: 然後, (同事) 隔天 去 了 公司,
 で (同僚) 次の日 行く 過去 会社
 幹盡十足地 在 工作 喔,
 はりきって テイル 仕事 よ-SFP
雖然 可能 沒有 到 幹盡十足。
suīrán かもしれない 否定 程度 はりきって
 「(前略)。で、次の日会社行ったら、はりきって仕事してたよ、
 はりきっていないかもしれないけど。」
- (2') 小林: 我 想 有包含 喔。 雖然 忘 了 有 幾校。
 1SG 思う 入っている よ-SFP が 忘れる 過去 ある 何校
 「入っていると思いますよ。何校だか忘れましたが。」
- (20')? 沒有 耶...雖然 即便如此 我 也 沒有 要 出軌 哪
 ない な *suīrán* だからって 1SG も 否定 する気 不倫 ね
- (3')? 眼球 喔...雖然 是 從 白色的部分
 眼球 よ *suīrán* COP から 白いところ
- (21'')? 對啊。 吃 的話 姑且不論, 只是 去聽聽 話 什麼的,
 そうだなあ 食べる なら ともかく だけ 聞きに行く 話 なんて
 有點 不太 想(去) 呢, 雖然 您 特意 要請
 ちょっと 否定 (行く)気 ね-SFP *suīrán* 2SG-POL せっかく 誘う

例えば、(20) は「わたしは女房に関心がないけど、不倫したりする気もないよ。」、(3) は「眼球というより、目の白いところから血が出たよ。」という参照情報を聞き手に提示し、「誤解しないでください。 ((20,3)) 」という行動を聞きに促す談話ストラテジーである²⁷。また、(21) も (21') のように、話し手自分の残念な心情を補足して述べるだけでなく、また「せっかくけど、今回は遠慮しておくよ。」という発話解釈を聞き手に推測させるという間主観性の表現も含んでいると考えられる。それに対して、(6) や (2) は単に「情報補足」を表しているため、「雖然」節構文に対訳することが可能なわけである。

²⁷ 曹(2000: 94)は(3)のケドの機能について、「H(筆者注:「聞き手」)に正しく理解してもらうために付け加えた形の補足と言える。」と指摘している。

言い換えれば、「雖然」節構文は先行談話への情報補足と自己修正の機能を有しているが、ケド節構文のように、「聞き手に何らかの行動を促そうという態度を示す」或いは何らかの発話解釈を聞き手に推測させるという対人的機能を獲得していないことが明らかになった。

5.5.3 日中両言語で異なる譲歩節の非従属化構文の用法 (2):

話題を導入する機能

(22) は A と B が「のりおさんに電話をかける」話をしているが、4 行目で、A が「全然話が違うけどね」を通して、新しい話題を展開している。このケド節構文は 5.2.3 で述べたように、新しい話題が始まる前に、「前置き」の機能を果たしていると考えられる。

(22) (元の話題から別の話題に移行する際)

- 1 A: 今度掛けとく. のりおさんにも掛けたいし→
- 2 私ものりおさんの声も聞きたいし→
- 3 B: うんうん[うん.] &=noise
- 4→ A: [うん] →うん. .h 後ね→ あの&=laugh
- 5 全然話違うけどね→
- 6 あの飛行機がね→ (飛行機の話が続けている)

(「名大」)

(23) は 1~9 行目で郵貯の利子の話題を提示している。その後の 10 行目で、B は聞き手に注意を向けさせる「ねえねえ」で、A に注意喚起を行っている。さらに、14 行目で、B は「生命保険止めたんだけど」のケド節構文で新たな話題を提示している。

(23) (郵貯の利子から別の話題に転換している)

- 1 B: 郵貯かっこいいでしょう. 郵貯.
- 2 A: うん.
- 3 A: 何パーセント位 利子 日本で?
- 4 B: 知ら知らない知らない.

- 5 A: 知らないか.
 6 B: 全然 分からん.
 7 A: 阿呆.
 8 B: &=laugh
 9 A: うん.
 10 B: ねえ ねえ
 11 A: 何?
 12 B: 今さ
 13 A: うん.
 14→ B: 生命保険止めたんだけど
 15 A: 生命保険?
 16 B: 生命保険は止めたんだけど
 17 A: うん.
 18 B: なんか [: 何か] 積み立てみたいなやつで
 19 A: うん.

(CallHome: 3007)

しかし、(22) と (23) のケド節構文は中国語の「雖然」節構文に対訳することも不可能である ((22', 23'))。

(22')? 4 A: 恩 恩 然後 呢 那個 (笑)

うん うん 後 ね あの (笑)

5 雖然 話題 不一樣 喔

suīrán 話 違う ね

6 那個 飛機 啊

あの 飛行機 ね

(23') 10 B: ねえねえ (喂 喂)

11 A: 何? (怎麼)

12 B: 今さ (現在啊)

13 A: うん. (恩)

?14→ B: 雖然 (我) 把 人壽保險 停 了
suīrán (1SG) 他動詞マーカー 生命保險 止める 過去

5.2.3 の考察で、「話題導入」の機能を有する「雖然」節構文は先行談話に対する対比・譲歩の意味を保持しなければならないという特徴があるということが判明した。すなわち、「雖然」節構文は先行談話に関連した話題を導入する機能を有し、「っていうか」における「話題転換」の機能に類似していると考えられる。高木・細田・森田 (2016: 233) は「「ていうか」が非常に強い関連性を持つ行為の開始を期待させることを利用して物語の導入を行ったといえるであろう。」と指摘している。

しかし、(22) の「のりおさんの声も聞きたい (1~4 行目)」と「飛行機の話」、または (23) の「郵貯の利子 (1~13 行目)」と「生命保険」はどちらも、二つの話題の関連性が薄いと思われるため、このような新しい話題の導入が行われるとき、対比・譲歩の意味を保持しなければならない「雖然」節構文が用いられないと考えられる。

一方、ケド節構文の話題導入の機能は、(24) のように、何の前触れもなく、いきなり話題を始めることが可能であることが観察されている。(24) はたまたま目の前に写真のついた T シャツを着た人が通り過ぎたことをきっかけに、話題が導入されている。先行談話が存在していない (24) のような例はやはり中国語の「雖然」節構文に訳すことが不可能である。

(24) ((3 人で一緒に歩いている。写真のついた T シャツを着た人が通り過ぎる。))

ネッティー：あつ、あの T シャツで思い出したけど
 ((ストーリーが続く))

(高木・細田・森田 2016: 233)

このように、ケド節構文とは異なり、中国語の「雖然」節構文は前掲の例文の説明のように、話し手はその前の会話内容と一貫した物語を、いままでの話題と関連させながら、会話の中に導入していくことが必要である。これは「先行談話に関連した話題を導入する機能」がある「雖然」節構文が「順番を開始

すると前の発話と非常に強い関連性を持つ」(高木・細田・森田 2016: 233) ことを意味する「っていうか」に換言できる理由である。一方、日本語のケド節構文は関連性が無くても「話題導入」の機能を果たすことが可能である。Schiffrin の談話モデルの観点からみると、日本語のケド節構文は接続助詞「ケド」の対比・譲歩の意味が希薄化した場合、すなわち、先行談話と論理的に結び付けている「概念的構造」が欠如しても、何らかの発話行為を表すことが可能である。それに対して、「雖然」節構文は「やりとり構造」や「行為構造」における談話機能を表すために、先に談話的に何らかの結束性を明示しなければならないことが明らかになった。以上をまとめると、日本語と中国語の条件節構文の類似点と相違点は次の表 8 のようになる。

表 8. 日本語のケド節構文と中国語の「雖然」節構文の談話機能の対比表

談話機能	談話ストラテジー	
	日本語	中国語
(a) 先行談話への自己修正	「断言回避」 ((2, 6))	「断言回避」 ((9, 10, 11))
(b) 先行談話への情報補足	「情報の補足」 + α : (1) 「聞き手に何らかの行動を促そうという態度を明示的に示す」 ((3, 19)) (2) 聞き手に省略された発話解釈を推測させる。 ((20))	「情報補足」 ((12, 13))
(c) 話題を導入する用法	話の唐突さを緩和する	
	先行談話との関連性がなくとも、新しい話題を導入することが可能である ((22~24))。	話し手はその前の会話内容と一貫した物語を、いままでの話題と関連付けながら、会話の中に導入していく ((14~16))。
(d) 聞き手への部分的同意	不同意の発話行為を緩和する効果 (日: (21); 中: (17))	

5.6 本章のまとめ

本章は中国語の「雖然」節構文と日本語のケド節構文の分析を行った。その結果、まず、両言語ともに、従属節のみの言語形式で、「先行談話への情報補足」、「先行談話への自己修正」による「断言回避」、「部分的同意」による「不同意の発話行為を緩和する効果」などの談話ストラテジーがあることが明らかになった。

しかし、日中両言語の譲歩節構文はどちらも「先行談話への自己修正／情報補足」の用法が観察されているが、日本語のケド節構文はさらに「聞き手の認識状態を変えて結果的に何らかの行動を促そうという態度を明示的に示す」(白川 2009: 33) という対人的機能に機能拡張していることが明らかになった。それに対して、中国語の「雖然」節構文は聞き手に何らかの行動を促そうという態度を示していない。このことは日中両言語の譲歩節構文は「先行談話への自己修正／情報補足」を担う機能があるが、ケド節構文は「雖然」節構文で訳すことができないということを説明している。

一方、「話題導入」の機能から「話の唐突さを緩和する」という対人的機能への機能拡張について、「雖然」節構文はケド節構文と異なっていることがわかった。「ケド」節構文は先行談話との関連性がなくても、新たな話題を導入し、「話の唐突さを緩和する」機能を果たすことが可能である。それに対して、「雖然」節構文は「話題導入」による「話の唐突さを緩和する」機能を果たすために、話し手が先行談話に対する対比または譲歩の意味を保ちながら、会話の中に導入していかなければならないことが明らかになった。

第6章 日中両言語の理由節の非従属化構文の形式と談話機能

6.1 はじめに

従来の理由節の非従属化構文 (insubordinated reason clauses) を対象にした研究では少なくとも二種類のタイプが明らかになっている。第一のタイプは統語的な主節が省略され、理由節だけが表現される構文である。例えば、(1) のカヤディルド語や (2) の日本語は、主節の *Let's leave here* ((1)) または *please don't bother / don't worry* ((2)) といった内容が省略されている。このタイプの理由節の非従属化構文は常に「要求用法 (request)」(Evans 2007: 390) を示している。

(1) カヤディルド語 (Kayardild)

mala-ntha bala-thurrka kamarr-urrk
sea-COBL hit-IMM.COBL rock-IMM.OBJ.COBL
'(Let's leave here,) because the sea is hitting the rocks now.'

(2) 日本語

Boku wa ik-u kara
I TOP go-PRS because
'Since I am going, [please don't bother / don't worry /etc.].'
'Since I am going, [nobody else has to do it / the problem there will be solved etc.].'
(Evans 2007: 390)

第二のタイプは (3) の英語や (4) のイタリア語のように、理由節の非従属化構文において主節が存在せず、主節が省略された理由節が、前の発話に対する理由付け、動機の説明、指摘などの談話機能を果たしている。例えば、次の (3) は自分或いは聞き手の前の発話に対して発話された英語における理由節構文であり、「相手の発言に反駁する態度 (challenge)」(Traugott 2017b: 296) を示す非従属化構文として機能している。(4) の理由節では A が自分の前の言説に対して、その行動の動機を説明している。

(3) 英語

Irene: (Henry describes a series of acts)... That's asinine, Henry.

Henry: Because you don't understand, see, because it was done that way - =

Irene: I don't understand WHAT?

(Schiffrin 1987: 200 [Higashiizumi 2006: 35]; Traugott 2017b: 296)

(4) イタリア語

A. 'Ordino una spesa.' B. 'OK.'

I book a grocery delivery OK

A. 'Perche abbiamo proprio finito la pasta.'

Because we have really run out the pasta

A. 'I am going to book a grocery delivery.'

B. 'OK.'

A. 'Because we have really run out of pasta.'

(Cristofaro 2016: 400)

一方、中国語の「因為 (yīnwèi) P、所以 (suǒyǐ) Q。」のような因果関係を示す複文では (1) と (2) のような要求用法がなく、(3) と (4) に対応している用法が見られる。そこで、本研究では上述の理由節の非従属化構文に関する談話機能の研究に基づき、日中両言語の副詞節の非従属化構文の分析を行い、それぞれの談話機能を明らかにしたいと思う。

また、本章の研究対象について、中国語の理由を表す複文の形式の中で、(5) のような「因為 P、所以 Q。」が最も代表的な形式だと考えられる (邢 2001: 48, 57)。

(5) 1 F3: ...uh 因為 不是 正 (..) 正規 的 老師 (..) 所以 他們
yīnwèi 否定 正 正規 の 教師 suǒyǐ 彼らは

2 其實 也 敢 在 我 課堂上 睡覺 呀 什麼的
實際 も 度胸 で 1SG 授業中 寝る SFP なんて

1 F3: 正規の教師ではないから、彼らは

2 実際、私の授業でも寝る度胸なんてあるよ。

(NCSC: M001)

なお、中国語の理由を表す複文の形式の中で、(6) のような「由于 p, φ q.」という構文もあるが、書き言葉の表現であるため (同上: 64)、本章の研究対象から除く。したがって、本章では、「因為 P、所以 Q。」の非従属化構文を研究対象とする。

(6) 上了中学以后，由于 学校 离 家 较 远，

から 学校 離れる 家 すこし 遠い

每天 要 坐 公共汽车 上学。

毎日 する 乗る バス 学校に行く

「中学校に入学した後、学校は家からすこし遠く離れているから、毎日バスに乗って学校に行く。」

(邢 2001: 64)

先に本章の研究結果から述べると、日本語の「カラ」節と中国語の「因為」節の非従属化構文は、どちらも本来の理由節の意味を表す用法があり、すなわち、先行談話に対する「理由の説明／聞き手の意見への同調／質疑応答／聞き手の認識の修正」や「話者自己開始」²⁸による話題展開機能と新情報の導入機能」という用法があることがわかった。しかし、日本語のカラ節構文は、「聞き手の認識の修正」や「新情報の導入機能」の用法から、さらに相手への「要求用法」という対人的機能に機能拡張していることが明らかになった。この対人的機能は「因為」節の用法においては見当たらないことが判明した。

本章の構成は次のようになる。6.2 から 6.4 節は中国語の「因為」節構文の談話構造と機能を分析する。6.5 節は日本語のカラ節構文との対照研究を行い、日中両言語の違いを明らかにする。6.6 節は本章のまとめである。

6.2 中国語の「因為」節構文の談話の情報構造に関わる用法

6.2.1 先行談話への「理由の説明／相手の意見への同調／質疑応答」

「因為」節の談話の情報構造に関わる用法は、先行談話における相手の談話内容に対して、主節がない「因為」節（以後、「「因為」節構文」）が話し手に

²⁸ 「話者自己開始」は話し手が自分の発話のターンの途中で挿入された理由節であり、6.2.3 で詳述する。

よって産出されている。このような「因為」節構文は様々な相互行為を達成している。例えば、「理由の説明」、「相手の意見または認識との同調」、「質疑応答」などの相互行為が見られる。まず、「先行談話への理由の説明」は「因為」節構文において、最も多くの割合を占めている。

(7) は 1 行目で、F1 は「彼は昨日帰ってきて、疲れているようだったよ。」において、文末助詞「喔（「よ」）」で F2 に呼びかけている。2 行目で、F2 は「因為從淡水回來。(淡水から帰ってきたから。)」という、「因為」節構文で、F1 が言ったことの理由を提供し、F1 に応答している。

(7) 1 F1: 他昨天回來看起來好累喔

2→ F2: (...) 因為 從 淡水 回來

yīnwèi から 地名 帰ってきた

1 F1: 彼は昨日帰ってきて、疲れているようだったよ。

2→ F2: 淡水から帰ってきたから。

(NCSC: M034)

(8) は「因為」節構文で先行談話における相手の意見または認識に同調している用法である。(8) はマッサージチェアのブランド「天王」についての話である。

(8) (マッサージチェアのブランド「天王」についての話)

1 M: (...) 那種其實講難聽那說穿了只是一個機器阿 本身就賣很貴阿

2→ F1: 因為 是 天王 阿

yīnwèi COP ブランド名 SFP

(NCSC: M036)

1 M: (...) あれは実はこう言ったら悪いけど、あれはただ一つのマシンだよ、価格はとても高いよ。

2→ F1: あれは天王だからよ。

1 行目では、M が、「天王」というブランドのマッサージチェアが高いと評価している。2 行目では、F1 が「因為是天王阿 (あれは天王だからよ)」と返

答し、M の評価に同調している。

また、(9)は1行目で、M1が「彼に社長を務めさせる」ことについて、自分の驚いた気持ちを示している。2行目で、M2は「因為國泰証搞不清楚 (國泰証券会社が分からないから。)」という「因為」節構文で返答し、M1の認識に同調している。

(9) (人事の問題についての話)

1 M1: (0.0) 不過我倒是很訝異國泰証會找他當總經理

2→ M2: (0.0) 因為 國泰証 搞不清楚

yīnwèi 証券会社 分からない

(NCSC: M025)

1 M1: (0.0) 國泰証券会社は彼に社長を勤めさせるなんてびっくりした。

2→ M2: (0.0) 國泰証券会社は分からないから。

(10) はバスケットボールの試合についての話である。(7)~(9) と異なり、このタイプは話し手が「どうして」の質問を発し、聞き手が「因為」節構文で応答している。例えば、(10) は3行目で、F1はなぜF2が日曜日の試合に出ないことについて「どうして」で質問している。F2は4行目で、「因為我就要回家啊 (家に帰るからよ。)」という「因為」節構文でF1の疑問に応答している。

(10) (バスケットボールの試合についての話)

1 F1: (前略)...(..) 你會留下來打系季盃嗎

2 F2: (..) 會啊 (..) 可是我不會打禮拜天

3 F1: (1.0) 為什麼

4→ F2: (0.9) 因為 我 就要 回家 啊

yīnwèi 1SG 助詞 家に帰る よ

(NCSC: M026)

1 F1: (前略)...(..) ここに残りバスケの試合に出る?

2 F2: (..) 出るよ (..) でも日曜日の試合に出ない。

3 F1: (1.0) どうして。

4→ F2: (0.9) 家に帰るからよ。

6.2.2 先行談話における聞き手の認識を修正する機能

「先行談話における聞き手の認識の修正」は話し手が「因為」節構文で先行談話における相手の発話内容を修正する用法である。例えば、(11) は 1~2 行目で F1 があるベトナム料理の店の惣菜が好きではないと言い、3~4 行目で F2 が「因為」節構文で F1 の発話内容を修正している。

(11) (ベトナム料理についての話)

- 1 F1: (..) 越南菜也不錯 (..) 可是它每次的配菜都
2 有我不喜歡吃的[東西]
3→ F2: [那是 因為]你 不 喜歡的配菜 太多了 吧 (..)
それは yīnwèi 2SG 否定 好き 惣菜 多すぎ SFP
4 它每次的配菜都很棒啊 (..) 什麼
(NCSC: M026)

- 1 F1: (..) ベトナム料理がいいけど (..) でもいつも私が
2 好きじゃない[惣菜]があるよ。
3→ F2: [それは]あなたが好きじゃない素材が多すぎる
からだろう。(..)
4 あの店の総菜はいつもいいのよ。(..) なんか

聞き手の発話内容を修正するタイプは常に「否定」の表現が共起している。例えば、(12) は 1 行目で M がある美容室の経営状況がよくなさそうだという認識を示している。2 行目で F はまず「そんなことはないよ」と M の認識を否定し、そして、「就是因為我們去的那個時間是因為吃飯時間（それは私たちが行った時間は食事の時間だから）」という「因為」節構文で M の認識を修正している。

(12) (美容室の人気についての話)

- 1 M: (...) 可是生意好像沒有特別好
2→ F: (1.3) 不會 耶 (...) 就 是 因為 我們 去的 那個 時間
否定 SFP 助詞 COP yīnwèi 私たち 行った あの 時間

3 是 因為 吃飯 時間

COP yīnwèi 食事 時間

(NCSC: M023)

1 M: (...) でも(その美容室が)特に繁盛していなさそう。

2→ F: (1.3) そんなことはないと思うよ(...)それは私たちが行った時間は

3 食事の時間だったから。

6.2.3 発話の途中に挿入された「因為」節構文:

「先行談話への理由づけ」から「話題を展開する」談話機能へ

6.2.1 から 6.2.2 における情報構造に関わる用法で見られた談話機能は、いずれも聞き手が発話した後で、すなわち、話者交替が起こった後で、話し手が「因為」節構文で聞き手の発言に対応している用法である。

本節と後述の 6.3 の用法は話し手自身の発話のターンにおいて「因為」節構文が用いられている使用例である。このような「因為」節構文はいわゆる「話者自己開始の理由節 (self-initiated causal clauses)」(Song & Tao 2009: 74) である。本節の「因為」節構文の内容は、同じターンで話し手が自分が言った意見に対する理由づけ (justification, Schiffrin 2001: 58) だけではなく、さらに、これからの談話内容にも関連している。例えば、(13) では F3 が自分の二人の付き合っている学生のことを話している。

(13) (F3 は二人の学生のことを話している。)

1 F3: (前略)(..) 我覺得他們兩個很配 (..) 他們就是 (..)

2→ 因為 我 都 待 學務處 嘛

yīnwèi 1SG いつも いる 学生課 でしょ

3 (..) 然後(...)他們就是 (..) 一個是 (..) 校級幹部 (..) 就是說 (..) uh

4 早上的時候他 (..) 有點像糾察隊這樣 (..) 我們學校叫做校級幹部 (..)

5 就是他會在門口登記誰遲到這樣 (..) 然後(..)另外一個是那個是那個

6 (...) 音控 (..) 就有點像在播國歌的那一種 (...)

7 所以他們都常常來學務處(..)

(NCSC: M001)

- 1 F3: (前略)彼らは似合っていると思うけど。 (...) 彼らはね (...)
- 2→ 因為私はいつも学生課にいます。 (...)
- 3 彼らはね (...) 一人は (...) 学生委員 (...) つまり (...) あのう、
- 4 朝の時、彼が (...) 糾察隊(ピケット隊)みたいな (...) 我々は学
校委員っていう。 (...)
- 5 つまり、彼が学校のゲートの前で遅刻した人の名前を書くよう
な。 (...)それで(...)もう一人はその、その (...)
- 6 アナウンサー担当 (...) つまり(学校の朝会で)国歌を放送する
ような。 (...)
- 7 だから彼らはよく学生課に来ているよ。 (...)

話し手が自分の発話のターンの途中で用いられた「因為我都待學務處嘛 (私はいつも学生課にいますでしょ?)」(2行目)は、まず1行目の「彼らは似合っていると思うけど。」という自分の意見に対する理由づけとなっている。例えば、(13)の「因為」節構文は「私は彼らがお似合いだと思っている。なぜなら、私はいつも学生課にいますからである。」という意味を聞き手に示している。そして、ここで注目したいのは、3~7行目の談話内容の開始のきっかけは2行目の「因為」節構文が用いられたときである。すなわち、「因為」節構文が用いられた直後、談話の話題は「因為」節構文で言及した「学生課」の話題をめぐる展開されている。

(13)の談話内容は、「(1行目)自分の意見の表出」、挿入された「(2行目)「因為」節構文による理由づけ」、「(3~7行目)「因為」節構文に関連した話題の開始」の三つの部分の談話は支離滅裂な談話になっていない。なぜなら、この三つの部分の談話は「首尾一貫性 (coherence)」を果たしているからである。内田ほか (1989) は談話の首尾一貫性について、「テキストにはそれを構成するセグメントの間の統語的關係 (結束性) と共に、内容的な連関性 (首尾一貫性) が存在する。」と指摘している。実際、英語にも (13) に類似している例も観察されている ((14))。

(14) *Debby*: a. Well some people before they go to the doctor, they talk to a friend,
or a neighbor.

b. Is there anybody that uh . . .

Henry: c. Sometimes it works!

→d. Because there's this guy Louie Gelman.

e. he went to a big specialist,

f. and the guy . . . analyzed it wrong.

[narrative not included]

o. So doctors are – well they're not God either!

(Schiffrin 2001: 57; 「→」の注記は筆者による)

(14) の *because* 節の内容は話し手自身が言った *sometimes it works!* に対する理由づけである同時に、また e 行目から o 行目²⁹の談話内容を展開するきっかけでもある (Schiffrin 2001: 58)。すなわち、前掲した (15) と同じ、(14) における「(c 行目) 自分の意見の表出」、挿入された「(d 行目) *because* 節による理由づけ」、「(e~o 行目) *because* 節に関連する話題の開始」、の三つの部分の談話は首尾一貫性がある談話となっている。

Schiffrin (2001: 58) はこのような理由節は、隣接する発話に対する「ローカル機能 (local function (between adjacent utterances)) を有するほか、またより広い範囲や文構造にわたる「グローバル機能 (global function (across wider spans and/or structures of discourse)) 」もあると指摘している。次の (15) も「ローカル」と「グローバル」機能を果たしている例である。(15) は睡眠薬の効果が現れる時間についての話である。

(15) (睡眠薬の効果が現れる時間について)

1 M: (...) 我吃吃看 (..) 看看真的 (..) 會不會睡著 (...) 那個真的會睡

2 著 [嗎]

3 F1: [會]

4 F2:(...) 會 (..) 可是很慢 (0.7) 真的我很慢(0.6)我昨天晚上吃了喔 (...)

²⁹ g から m 行目の内容が省略されている。

- 5→ 我昨天晚上是再把那個 (0.8) 把 (...) 因為 (..)我 昨天 晚上
yīnwèi 1SG 昨日 夜
- 6 不是 才 把 課本 拿 回去 嗎 (..)可是我起碼要讀吧
否定 助詞 助詞 教科書 持つ 帰る SFP-疑問辞
- 7 F1: (0.0) m
- 8 F2: (..)我昨天晚上把它讀一讀然後上網看一看(..)就是有沒有圖片什麼
9 的 (..) 再 (..) 再 (..) 再 (..) 再找 (...) 我 (..) 大概 (..) 十 (0.6)
10 我十一點半左右(...)我想說好(...)我應該(0.9)半個小時至一個小時
11 之內我可以把它全部弄完 (..) 我十一點半就把藥吃了
(NCSC: M006)
- 1 M: (...) ぼくが飲んでみる。 (..) いったい (..) 眠れるかどうかを
チェックする。 (...) あれは本当に眠れる。
- 2 の [か]
- 3 F1: [うん]
- 4 F2: (...) うん (..) でも遅かった (0.7) 本当に遅かった (0.6) 昨日食
べたよ (...)
- 5→ 昨日の夜またあれを (0.8) を (...) 因為 (..) 私が昨日の夜
6 教科書を持って帰ったんじゃないか(..)でも少なくとも読む必
要があるでしょう。
- 7 F1: (0.0) うん。
- 8 F2: (..) 昨日の夜、一遍読んだりして、インターネットをしたりして
(..) 画像なんかあるかどうかを(探してて)。
- 9 (..) ま(..) ま(..) ま(..)また探して (...) 私 (..) たぶん (..) 十 (0.6)
10 十一時半ぐらい (...) よし(...) 私 (0.9) 三十分から一時間
11 まで全部(本を読むことや画像を探すことを)完成できると思う
から (..) 十一時半に薬を飲んだんだ。

4 行目で、F2 は話題中の睡眠薬は効果が「本当に遅かった」という意見を述べている。そして、F2 は続けて「因為」節構文で、「なぜ、私はあの睡眠薬の効果が現れるのが遅いことを知っているか」というと、私は昨日教科書を持って帰ったからである。」という意味を伝えている。そして、F2 は「因為」節構文

の内容を話題展開のきっかけとして、8~11 行目では「私は昨日教科書を持って帰った」に関連する話題を述べている。すなわち、(17) における「(4 行目) 自分の意見の表出」、挿入された「(5~6 行目) 「因為」節構文による理由づけ」、「(8~11 行目) 「因為」節構文に関連する話題の開始」の三つの部分は談話の意味の一貫性を果たしている。次の (16) と (17) もこのタイプの「因為」節構文である。

(16) (ケンタッキーは生徒の個別指導の場所としてふさわしくない話)

- 1 F1: (前略)(..) 後來 我 就 跟 他 說 hon(..) um 覺得 (..)
 - 2 肯德基太吵啊 (..) 啊不然就是喔有 (...) 就是聽說有扒手啊之類 (...)
 - 3 對啊 (..) 啊就是 (..) 有啦其實之之前在那邊 (..)
 - 4→ 因為 已經 去 (..) 每個禮拜 都 去 啊 (..)
 yīnwèi もう 行く 毎週 全部 行く SFP
 - 5 已經遇過還有其他 s- 情況 (..)
- (後略...ケンタッキーの問題に関する話題が続いている)

(NCSC: M002)

- 1 F1: (前略) (..) その後、彼に言ったのよ。(..) えっと、
- 2 ケンタッキーがうるさいと思っている話とか (..) ほかに
また (...) 万引きの人がいるのような噂の話とか (...)
- 3 その (..) あ、その (..) あったよ、実は前にそこで (..)
- 4→ 因為もう行った (..) この前、毎週行ったよ (..)
- 5 もうほかのことに s- 遭ったことがあって (..)

(16) は 1~3 行目で F1 は「ケンタッキーは生徒の個別指導の場所としてふさわしくない」意見を述べている。4 行目の「因為已經去 (..) 每個禮拜都去啊 (..) (因為 もう行った (..) この前、毎週行ったよ (..)) 」の「因為」節構文は 1~3 行目の談話に対する理由づけであるほか、また 5 行目以後の話題を展開するきっかけとなっている。

(17) は F1 が自分の学生の母について同僚に話している。(19) の「因為」節構文の発話は、F1 自分が 1 行目で述べている「実は彼の母はとてもやさしい」に対する理由づけだけではなく、また次に述べる内容 (4 行目以後) にも関わっている。

(17) (F1 の学生の母の話題)

- 1 F1:(..) 可是 (..) 其實 他 媽 滿 好 (..)
2→ 因為 後來 他 媽 有 來 (..)
yīnwèi その後 3SG 母 ある くる
3→ 因為 我 那時候 就 我 在 那邊 教 他 什麼的 (..)
yīnwèi 1SG あの時 助詞 1SG で そこ 教える 3SG なにか
4 然後 他就講講講 (..) 他就說 (..) 喔 我 媽媽 都 會 在
5 對面 的 火鍋 店吃火鍋 (..)
...(後略)(母の話題が続く)

(NCSC: M001)

- 1 F1: (..) でも (..) 実は彼の母はとてもやさしい。 (..)
2→ 因為そのあと、彼の母が来たことがある。 (..)
3→ 因為私はあのとき、そこで彼に何かを教えていた。 (..)
4 そして 彼はね、あれこれ言って(..) 彼はこう言って (..) あ、ぼくのお母さんはいつも
5 向こうにある店で鍋を食べているよって。 (..)
...(後略)(母の話題が続く)

本節で問題にしている「因為」節構文は前後の談話に関連しており、次に述べる内容の背景知識、理由または証拠となり、全体として談話の首尾一貫性を果たしていると考えられる。

6.2.4 新しい情報を導入する用法

本節の「因為」節構文は、6.2.1~6.2.3 の用法と同様に先行文脈との論理的関係 (e.g. 因果関係) があるが、6.2.1~6.2.3 の「因為」節構文の談話構造と異なっている。本節の「因為」節構文は発話された後で、その発話権が聞き手に譲

渡されるものであり、聞き手の反応により、導入される話題が続くかどうか、というパターンが見られる。例えば、(18) は F は週末にあるイベントに参加しなければならない愚痴話をしている。(18) の 1~6 行目では M は F が週末でイベントがあることについて話している。

(18) (F は週末にあるイベントに参加しなければならない愚痴話をしている)

- 1 M: (4.3) &=laughs 真不知道怎麼同情妳&=laughs (...) [&=laughs]
- 2 F: [對 啊] (..)
- 3 好好 一 個 週末
- 4 M: (..) 還有活動準備時段
- 5 F: (0.7) [對 啊]
- 6 M: [xxxx] (...) 活動
- 7→ F: (..) 因為 我 同 (..) 就 是 我們 有 同事 要 (0.3)
- yīnwèi 1SG 同 助詞 COP 私たち ある 同僚 する
- 8 就 是 要 (0.9) 男扮女裝 (..) ○○ 跟 ○○
- 助詞 COP する 男が女性に仮装する 人名 と 人名
- 9 M: (1.3) 真的喔
- 10 F: (0.3) 對 (..) 然後.....(仮装の話が続いている)

(NCSC: M021)

- 1 M: (4.3) &=laughs どうやってあなたに同情すればいいのか分からな
い&=laughs (...) [&=laughs]。
- 2 F: [そうだよ。] (..)
- 3 せっかくの週末なのに。
- 4 M: (..) またイベントの事前準備の時間もあるし。
- 5 F: (0.7) [そうだよ。]
- 6 M: [xxxx] (...) イベント
- 7→ F: (..) 私 (..) 私たちのある同僚が (0.3)
- 8 つまり (0.9) 男が女性に仮装するから (..) (人名)と(人名)。
- 9 M: (1.3) ほんとう?
- 10 F: (0.3) そう (..) それで.....(仮装の話が続いている)

そして、7~8 行目では F が「因為」節構文で 1~6 行目の談話内容に関連した「仮装大会の情報」を提出しており、意味的に、「それに、私たちの同僚は女性に仮装するから。」となっている。9 行目で、M は「真的喔 (本当?)」の発話で、新しい情報に興味を示し、「go-ahead (続けてください)」(Schegloff 2007, 筆者訳) ということの意味している。F は M の興味を示す反応を受けて、新しい情報に関する談話を続けている (10 行目以後)。次の (19) も同じタイプの例であると考えられる。

(19) (あるクラスメイトの話について)

1 F2: 就她們家應該是有栽培她 xxx

2→F1: 因為 她 媽媽 好像

yīnwèi 彼女 母 そう

3 F2: 很 嚴格

とても きびしい

4 F1: 據我了解她媽媽(..)以前學她媽媽那年代就唸大學所以應該是非常厲

5 害的人啊

6 F2: 所以她媽媽有大學大學畢業

7 F1: (...) 好像是 ei

8 F2: (...) 喔

9 F1: (...) 對 &=laughs 然後

10 F2: 那就是很厲害的人啊

(NCSC: M033)

1 F2: それは、彼女がしっかり育てられていると思う xxx

2→ F1: 彼女の母は...そうだから。

3 F2: とてもきびしい

4 F1: 私の知る限り彼女の母は (..) 昔の時代で大学に行ったのよ。

5 だから、(彼女の母は)すごい人だと思うよ。

6 F2: つまり、彼女の母は大学を卒業したね

7 F1: (...) そうみたい

8 F2: (...) そっか

9 F1: (...) そう &=laughs それで

10 F2: じゃ、やっぱりすごい人だね。

(19)はF1とF2がクラスメイトの母に関する話をしている。1行目で、F2は「それは、彼女(F1とF2のクラスメイト)がしっかり育てられていると思う」という認識をF1に述べている。2行目で、F1は「因為」節構文を通して、「そのクラスメイトがしっかり育てられていること」という先行談話に関連した「そのクラスメイトの母の情報」を導入した。(18)と同様に、(19)の「因為」節構文は1行目の「そのクラスメイトがしっかり育てられていること」との論理的因果関係があると考えられる。3行目はF2はF1と共同発話をした形となっており、4~10行目では、「そのクラスメイトの母の情報」に関する談話が続いている。このように、このタイプの「因為」節構文は新情報を導入する談話ストラテジーとして用いられていると考えられる。

6.3 「因為」節構文の対人的動機付け：「断言回避」の談話機能

本節で、話者自己開始の「因為」節構文は原因や理由を表す意味が希薄化し、機能的に日本語の「ケド」節構文の「発話緩和」(曹 2000)の談話機能に似ている。このタイプの例は「因為」節構文の168例のうち、わずか3例しか観察されなかった。談話ストラテジーとして、話し手は「因為」節を通して、次に述べることについて、誤解又は断言的な口調を産出することを回避する働きがあると考えられる。例えば、(20)ではM2が自身で経験したいじめのことを話している。

- (20) 1→ M2: (...)這霸凌(...)因為 我 不知道 怎麼 說 你 知道 嗎
yīnwèi 1SG 知らない どう 言う 2SG 分かる SFP
2 (...)就溝通有有問題 (NCSC: M029)
- 1→ M2: (..) あのいじめ (...)どう言うか知らないけど、分かる?
2 (..) コミュニケーションに問題があるんだ。

2行目で、M2は当時のいじめの原因は「コミュニケーションの問題」にあると結論づけている。この会話で、M2は実際、あのいじめの原因は「コミュ

ニケーションの問題」に帰結することができるかどうか知らないため、「因為」節構文を通して、「コミュニケーションに問題があるんだ。」という断言を和らげていると考えられる。また、(21) では M1 と M2 がある女性の話について話している。

(21) (M1 と M2 が友人のメンタルヘルス不調の妻の話について話している。)

1 M2: (1.9) 那像 (..) 我想一下我最後我

2→ (..) 因為 我 跟 他 不 熟

yīnwèi 1SG と 3SG(彼女) 否定 知る

3 是 李宜癢 跟 嘉嘉 認識 他 (..)然後 零九年 那 時候

4 [我們 剛好 在 去]

(中略)

5 M2: [那] 我在猜他後來應該就 (..) 零九年我碰到他的時候 (..)

6 他看起來應該已經有那樣的症狀只是那時候不嚴重 (後略)。

(NCSC: M025)

1 M2: (1.9) えっと (..) 考えたら最後(彼女(友人の妻))に会ったとき)

2→ (..) 彼女のことをよく知らなかったけど。

3 彼女は李宜癢(人名)と嘉嘉(人名)が知っているから。(..)
それで、2009 年の時、

4 [私たち、ちょうど(あるところに)行って]…。

(中略)

5 M2: [あの] (..) 私の推測は(..) 2009 年彼女に会ったとき、

6 彼女はすでにあんな症状(メンタルヘルス不調)があったはず
だが、ただあの時は、まだ軽症に見えたけど…(後略)。

3~4 行目では、M2 が前に話題に挙げた女性に会ったことがあると述べており、その前の 2 行目で「因為」節が用いられた。M2 は 2 行目の「因為」節を通して、「彼女のことをよく知らなかったけど。」ということを表し、「彼女のことをよく知っている」というイメージを避けようとしていると思われる。

6.4 中国語の理由節構文の談話機能や談話ストラテジー

ここまで「因為」節構文の談話機能と談話ストラテジーの分析を行ってきた。168 例のうち、最も多くの割合を占めているのは 6.2 の「談話の情報構造に関わる用法」である。なお、Schiffrin の談話モデルの観点からみると、6.2 の「先行談話に対する理由の説明／聞き手の意見への同調／聞き手の認識に対する修正」、「話題展開機能」、「新しい情報を導入する機能」は、いずれも理由節の「概念的構造（本章では、「因果関係」を指す）」を保ちながら、談話の結束性と首尾一貫性を表している。他方、6.3 の「断言回避」の「因為」節は談話の先行する文脈の内容と論理的に結び付けておらず、ヘッジ表現 (hedge) として機能しているため、より独立的な用法であると考えられる。

表 9. 話し言葉コーパスにおける「因為」節構文の談話機能の分布表

タイプ	談話機能	比率
談話の情報構造 に関わる用法	先行談話に対する	120
	(a) 理由の説明 ((7))	(71%)
	(b) 聞き手の意見への同調 ((8))	
	(c) 質疑応答 ((9, 10))	
	(d) 聞き手の認識に対する修正 ((11, 12))	
	「話題展開機能」 ((13, 15, 16, 17))	24 (14%)
	「新情報の導入機能」 ((18, 19))	21 (13%)
対人的動機づけ	断言回避 ((20, 21))	3 (2%)
計		168 (100%)

(コーパス: NCSC)

6.5 日本語の「カラ節」の非従属化構文との対比

以上、6.2 から 6.4 では中国語の理由節構文の談話の構造と談話機能を考察した。本節では、中国語の理由節構文の使用において観察した「聞き手の先行談話に対する用法」、「話題展開機能」、「新情報の導入機能」に関わる内容に絞り、日本語のカラ節の非従属化構文（以後、「カラ節構文」と称する）を考察する。そして、これらの談話のストラテジーの対比研究を通して、日中両言語における理由節構文の談話機能の違いを分析する。

6.5.1 日中両言語で共通している理由節の非従属化構文の用法 (1):

先行談話に対する「カラ」節

先行部分の相手の発話に対して、次の (22)~(24) ではそれぞれ中国語の「因為」節と同じ「理由の提供」、「質疑応答」、「相手の意見への同調」などの談話ストラテジーがあることが判明した。(22) では 3 行目の「難しい年頃だからな……。」のカラ節が 2 行目の慎平の発話に対する理由を述べている。また、(23) では 3 行目のカラ節が 1 と 2 行目の相手の疑問に応答しており、(24) では 7 行目の F004 の評価に対して、8 行目で F031 がカラ節で F004 の評価に同調している。

- (22) 1 正樹 「あのめぐみちゃんが……。」
2 慎平 「うちでの態度も、少しおかしくなってるそうなんだ……。」
3→ 正樹 「難しい年頃だからな……。」
4 慎平 「あいつグレるなんて、思いもしなかった……。」

(白川 2009: 111)

- (23) 1 F 116 : 何で友だちになったの?
2 F 128 : 何でだろ。
3→ M 023 : 生徒会一緒だったから。
(24) 1 F 004 : B【F 031 の 名字】ってなんかさ。
2 F 031 : 言いやすくていいよね。
3 F 004 : うん。
4 F 031 : えっ、そうじゃなくて?
5 F 004 : なんか、無難で。

- 6 F 031 : 無難でしょう。
7 F 004 : 無難で、かつ。
8→ F 031 : あっ、そうだね、藤が入ってるから。
9 F 004 : そうそうそうそう。

(「名大」)

6.5.2 日中両言語で共通している理由節の非従属化構文の用法 (2):

「話題展開機能」の「カラ」節

(25) は前掲の (15)~(17) のような「話者自己開始」の「因為」節構文の談話機能に類似している。(25) は「家庭料理の味の話題」から「家庭料理とプロ職人の料理の味との違いに関する話題」に展開した例ある。

(25) (家庭料理の味からプロ職人の料理の味との違いへの話題の展開の例)

- 1 F 005 : で、だからほんとに、うち、母がいなかったりすると、
2 うち、母、豆腐がすごく好きで一、買ってきて置いて
3 お、あるんで、私が作れる豆腐のバリエーションって
4 麻婆豆腐ぐらいしか。麻婆豆腐か冷奴か湯豆腐だと、
5 麻婆豆腐作ること、ま、なることが多いんですよ。
6 ま、その、やっぱり毎回全然味が違って一、
7 F 113 : うーん
8 F 005 : それで味が違うから納得してるのかわかんないですけど
9 家族はまあ、あれですけど。
10 F 113 : ま、でも家庭料理っていうのは何かその毎日ね、少しずつ
11 違うから飽きないとか言うでしょ、よく。
12 F 005 : うーん そっか、そっかー
13 F 113 : プロっていうのは、その一、毎日おんなじ味ができる
14→ からね。だけど一、その家庭のお母さんはやっぱり家族の
15 調子見ながらちょっとお塩ひかえたり、増やしたり。
16 だから飽きないとか言うじゃないですか。

(「名大」)

(25) は談話構造として「話者自身の意見の表出 (10~11 行目) 」や「話者自身の意見への理由づけを表すカラ節構文 (13~14 行目) の使用」や「カラ節構文に関連する話題の展開」というような構造となり、談話の意味の一貫性を果たしていると考えられる。この点は前掲の (15) のような「話者自己開始」の「因為」節構文の談話機能に類似している。例えば、10~11 行目では、話し手の F113 が家庭料理の味が飽きないという意見を述べている。そして、13~14 目では、カラ節が用いられ、「なぜ家庭料理の味が飽きないというのは、プロ職人の料理とは違うから」と述べられている。そして、F113 は 14~16 行目で、家庭料理の味とプロ職人の料理の味の違いに関する話題を話し続けている。次の (26) では B が A にいまやっているヨガの効果を紹介している。1 行目で B が「ヨガね」で「ヨガ」の話題を持ち出した。

(26) (ヨガの話)

- 1 B: あっ それからね ヨガね “はあちゃん”
- 2 A: うん.
- 3 B: あのう、こう背中を伸ばす運動が多いでしょ?
- 4 A: うん.
- 5 B: で、お腹をこう張り出す反対の運動をやったら?
- 6 A: そうなの?
- 7→ B: どっちかって言えばうちは胃が弱いからね.
- 8 A: うん.
- 9 B: こうさ、あのお魚のポーズって書いてあるでしょ?
- 10 A: うん.
- 11 B: こうぐうっとお腹上げるやつ. 弓のように反るの.
- 12 A: うん.うん.うん.
- 13 B: ああいう反る運動を沢山した方がいいみたい.

(CallHome: 0862)

5 行目で、B は「で、お腹をこう張り出す反対の運動をやったら」と自分の意見を述べている。7 行目で B は「うちは胃が弱いからね」というカラ節を通して、5 行目でなぜそういう意見を提出したか、ということに理由付けている。

また、7行目のカラ節もこれから言う話にも関連している (8~13行目)。

このように、(26)の7行目の「カラ」節構文は、その前後の談話内容との関連性が見られ、いわゆる談話の首尾一貫性を果たし、中国語の「因為」節構文の談話機能と類似していると考えられる。

6.5.3 日中両言語で異なる理由節の非従属化構文の用法 (1):

「聞き手の認識に対する修正」タイプ

次は聞き手の認識を修正する例である。(27)はある店員の仕草についての話である。Aは1~14行目で事情の経緯を述べ、15行目で話題にある店員の動きの真似をし、「しゅ (0.278) しゅ (0.366) しゅしゅしゅ」でホラー映画のようなイメージを談話の参与者に示している。17行目で、BはAの発言に対して、「いやいや」という否定表現で15行目のAの認識を修正しようとする姿勢を見せており(高木・細田・森田 2016: 202)、その後の18行目で、Bは「そんなホラーな話はないから」というカラ節でAの認識を修正している。

(27) (ある店員の仕草についての話)

- 1 A: あのときの (D_チョ) さ: (.) 店員さんの目がすごく怖かったん
- 2 ですから
- 3 B: (I_うん)
- 4 C: (I_あー)
- 5 C: <笑>
- 6 C: そうだよ
- 7 C: 俺ら追い出されるところだったんだぞ
- 8 B: (W_ウト|うそ) つけ
- 9 A: (R_キッタン) がさ (0.218) (I_う) (0.326) げろの匂いがするっ
- 10 てゆったときさ向こうの: (0.448) 方で店員さんがいきなり
- 11 包丁研ぎ (W_ハジメ|始める) ん
- 12 C: <笑>
- 13 B: <笑>
- 14 B: <笑>
- 15 A: しゅ (0.278) しゅ (0.366) しゅしゅしゅ

- 16 C: <笑>
 17 B: いやいや
 18→ B: そんなホラーな話はないから

(chiba: 0432)

しかし、興味深いことに、同じ「聞き手の認識を修正する」用法であるはずの「因為」節構文は、(27) のカラ節の中国語訳としては不適切となる ((27'))。

- (27') 9 A: (R_キッタン) 啊 (0.218) (I_恩) (0.326) 聞到了嘔吐味
 10 的時候啊，對面的:(0.448)方向，店員突然
 11 開始磨菜刀
 12 C: <笑>
 13 B: <笑>
 14 B: <笑>
 15 A: 咻 (0.278) 咻 (0.366) 咻咻咻
 16 C: <笑>
 17 B: 不是不是
 ?18→ B: 因為 不是 那種 恐怖的 話題。
 から 否定 そんな 怖い 話

現代の日本語において、カラ節がよく単独で使われているということは、しばしば指摘されており (Ohori 1995, 白川 2009, Higashiizumi 2006, 2011)、談話機能として (2, 再掲)、(28)、(29) のカラ節構文は聞き手に前提情報を提示することによって、聞き手に何かの行為を要求している用法である (Evans 2007, 白川 2009, Narrog 2016)。

- (2) Boku wa ik-u kara (僕は行くから。)

I TOP go-PRS because

‘Since I am going, [please don't bother / don't worry /etc.].’

‘Since I am going, [nobody else has to do it / the problem there will be solved etc.].’

(Evans 2007: 390-391; 日本語は筆者による)

(28) Ima ik.u=kara# (いま行くから。)

now go.NPS=CAL

'Because I go now .. ' [.... please wait for me; stop calling me ...]

(Narrog 2016: 248; 日本語は筆者による)

(29) 響子 「大学祭に行ってもいいですか？」

五代 「えっ……!?あの……大学祭って僕の大学の……？」

響子 「はい。じゃまにならないように、適当にやりますから……」

五代 「邪魔なんてとんでもない!!ぼくご案内します」

(白川 2009: 55)

例えば、上述の (27) は「そんなホラーな話はないから」のカラ節構文で、聞き手に「そんな話はやめてください」のように求めているものと考えられる。それに対して、「因為」節構文には「聞き手の認識を修正する」という用法も存在するが、聞き手には何の行為を要求していないと考えられる。これはなぜ (27) のカラ節構文が「因為」節構文で (27') のように訳せないか、という問題への答えとなる。

6.5.4 日中両言語で異なる理由節の非従属化構文の用法 (2):

新情報の導入機能

(30) は話し手の A がカラ節構文で、「四年生五年生」の内容を導入した例である。

(30) (合唱コンクールについての話)

1 A: 合唱コンクール頑張ったねえ.

2 B2: うん. 銅賞だった.

3 A: あっ. 銅賞か.

4 B2: うん.

5→ A: でも、まだ三年生だから四年生五年生とあるからな.

6 B2: うん. だって他のねえ:: 学校はねえ六年生が多いんだよ?

7 A: うん.

(CallHome: 1041; ‘?’は語尾の音が上がっていることを示している。)

(30) の 1~4 行目で、父の A は息子の B2 が銅賞をもらったことを知った。5 行目で、A は「でも、まだ三年生だから、四年生、五年生とあるからな」というカラ節を通して、「四年生五年生」という情報を導入している。同行目の談話標識の「でも」はカラ節構文が、新情報を導入し、話を展開させていることを傍証している。それは談話標識の「でも」はある情報を導入して、話を展開させるという「展開用法」(クワンチャイ 1999)を持っているからである。また、(30) のカラ節構文は新情報を導入する機能を有するだけではなく、また「落ち込まないで引き続き頑張ってね」というようなことを息子に伝えていると思われる。しかし、同じ「新情報の導入機能」を持っている中国語の「因為」節構文は (30) を「因為」節構文に訳した場合、不自然な会話となる ((30'))。

- (30') 1 A: 合唱比賽盡力了吧。
 2 B2: 嗯，銅牌。
 3 A: 啊，銅牌啊。
 4 B2: 嗯。
 ?5→ A: 可是 因為 還是 三年級、因為 有
 でも から まだ 三年生 から ある
 四年級、 五年級 啊。
 四年生 五年生 な

6.5.3 の「聞き手の認識を修正する」用法のように、本節の「新情報の導入機能」について、「因為」節構文も聞き手に何らかの行為を要求しているニュアンスを持っていない。そのため、息子にさらに「頑張ってね」というようなニュアンスを含む (30) は「因為」節構文で訳すことができないことが明らかになった。

このように、日中両言語は新情報を導入する用法において、「因為」節構文は話題転換や会話切り出しなどの会話管理のための談話ストラテジーが行われることに対して、「カラ節」構文は聞き手への行為要求のニュアンスがあるということを明らかにした。

まとめると、日本語と中国語の理由節の非従属化構文の類似点と相違点は次の表 10 のようになる。

表 10. 日中両言語の理由節構文の談話のストラテジーの対比表

談話タイプ	談話機能	
	日本語	中国語
(a) 先行談話への補足	先行談話に対する「理由の説明／聞き手の意見への同調／質疑応答」 (中: (7, 8, 9, 10); 日: (22, 23, 24))	
(b) 話題展開機能	談話の首尾の一貫性を果たす機能 (中: (13, 15, 16, 17); 日: (25, 26))	
(c) 先行談話にある聞き手の認識への修正	+ α : 「聞き手に何かの行為を要求している用法」 ((27))	聞き手の認識を修正する機能 ((11, 12))
(d) 新情報の導入機能	+ α : 「聞き手に何かの行為を要求している用法」 ((30))	新しい情報を導入する用法 ((18, 19))

6.6 本章のまとめ

以上、本節は日中両言語における理由節構文の分析を行った。その結果、まず、日中両言語ともに、理由節を表す言語形式を通して、本来の理由節の意味を保ちながら、「先行談話に対する理由の説明／相手の意見への同調／質疑応答／先行談話にある聞き手の認識への修正」、「話題展開機能」、「新しい情報を導入する機能」を表す用法があることが明らかになった。

しかし、「先行談話にある聞き手の認識への修正」と「新しい情報を導入する機能」において、日本語のカラ節構文は、「話し手が聞き手の認識を改めさせる機能」、或いは「ある情報を導入する機能」を担うだけでなく、また、聞き手に何らかの行為を実行させる対人的機能（「行為要求」）もある。それに対して、上述の二つの談話機能において、「因為」節構文はカラ節構文のような「行為要求」の機能を獲得していないことが明らかになった。

第 7 章 日中両言語の副詞節の従属的マーキングの 形式と談話機能

7.1 はじめに

第 4 章から第 6 章では中国語と日本語の条件節、譲歩節、理由節の非従属化の談話機能を分析した。副詞節の非従属化の現象からみると、日本語と中国語は異なる傾向が見られた。例えば、第 4 章で述べた日本語と英語の条件節の非従属化構文はそれぞれ「勧め」或いは「丁寧な要求 (polite requests) 」 (Evans 2007: 380) の用法が観察されたが、中国語には類似する用法が見当たらなかった。また、第 6 章で述べた中国語の理由節の非従属化構文の「因為～」には、「先行談話にある聞き手の認識への修正」や「新情報の導入」用法が見られたが、日本語の理由節の非従属化構文の「～から。」には上述の談話機能から、さらに「相手に何かをするように求めている用法」 (白川 2009) への機能拡張が見られた。

そこで、日中両言語の従属節の非従属化構文間においてこれらの違いが存在しているのかという問題について、本章では日中両言語の副詞節の従属的マーキングの生起位置から日中両言語における談話機能の違いを分析する。

7.2 日中両言語の副詞節の非従属化構文のタイプ

ここで Evans (2007) の非従属化構文の定義を再掲する ((1))。Evans の定義に従うと、非従属化構文は、複文における従属節の副詞節のみ (主節の省略) が明白に表出されている。

- (1) 私の定義は、結果として生じる構文が、本来の従属節構文からのみその要素を導き出すことも必要とする。……他方、非従属化構文の場合には従属節内の要素のみが明示的に表出される。欠落した要素は単に示唆されるだけであり—従属的な形態・統語的特徴の存在によって示されており—推論によって復元されなければならない。

(Evans 2007: 385-386)

Evans の省略説に対して、Mithun (2008) は従属節の単独使用は必ずしも主節の省略によって形成されるとは限らないと指摘している。例えば、本来接続詞の (2) のナバホ語の=go は、(3) において、独立節の後ろに付加されることによって、当該の独立節に従属節のように機能させ、談話内容に対する背景情報の提供、解釈、評言などの機能を果たしている。Mithun はこれは統語構造から談話機能への拡張 (extended from syntax to discourse, Mithun 2008: 82) であると述べており、(4) のように定義している。

- (2) Da' hooye'e=go na'iizii.
quite good=ADVZR he.works
'He works well.'

- (3) Navajo sentences (ナバホ語)

Nídé.é.éí náshdóí=tsoh akó.ó. ch'éé-Ø -l-wod=lá.
then that wildcat=big thither out.horizontally-3S-CL-run=MIR
'That mountain lion ran.
éí sh.í.í léecha=i sh.í.í bi-ná-ji-l-zid=go
that probably dog=NMZ probably 3-about-4.SUBJ-CL-fear.PRF=DEP
'I guess it was afraid of the dogs.'

(Mithun 2008: 80-82)

- (4) Mechanisms by which these dependency markers are extended beyond the sentence are in a sense more abstract than the deletion of a specific matrix clause. It is not unreasonable to imagine that syntactically subordinate clause forms might come to be identified as less assertive than main clause forms. Speakers might then begin to select them in certain contexts for that implication. There need never have been a specific matrix clause that was omitted.

(Mithun 2008: 107)

「これらの従属的なマーカーが文をこえたマーカーに拡張されるメカニズムはある意味では特定の主節の省略より抽象的であると思われる。統語的に従属的な形式が主節の形式より弱い断言を表わすものとみなされるようになると想像することは不合理ではない。話し手はかくしてその含意を表現するために、ある文脈においてそれら (=従属節の形式) を選

扱するかもしれない。そもそも省略された特定の主節が存在していた必要はないのである。」

このように、非従属化構文の研究については、大きく「省略説 (ellipsis) 」 (Evans 2007)と「拡張説 (extension) 」 (Mithun 2008) が見られる。Evans と Mithun の非従属化構文に対する定義は各言語における理由節の非従属化構文の現象によって体现されている。例えば、理由節の非従属化構文は主節の省略により、(5) と (6) のように相手に何かの行動を要求している用法を表している (Evans 2007: 390~391)。

(5) カヤディルド語 (Kayardild)

mala-ntha bala-thurrka kamarr-urrk
sea-COBL hit-IMM.COBL rock-IMM.OBJ.COBL
'(Let's leave here,) because the sea is hitting the rocks now.'

(6) 日本語

Boku wa ik-u kara
I TOP go-PRS because
'Since I am going, [please don't bother / don't worry /etc.].'
'Since I am going, [nobody else has to do it / the problem there will be solved etc.].'
(Evans 2007: 390-391)

次の英語、イタリア語、ドイツ語などの理由節の非従属化構文においては主節が存在せず、Mithun の定義で示したように、先行談話に対する理由付け、動機の説明、指摘などの談話機能を果たしている。例えば、(7) の独立使用の理由節は相手の先行談話に対して、話し手が相手に反駁する態度を表す非従属化構文である (Traugott 2017b: 296)。また、(8) の理由節では A が自分の前の言説に対して、その行動の動機を説明している。

(7) 英語

Irene: (Henry describes a series of acts)... That's asinine, Henry.
Henry: Because you don't understand, see, because ith – it was done that way - =

Irene: I don't understand WHAT?

(Schiffrin 1987: 200 [Higashiizumi 2006: 35]; Traugott 2017: 296)

(8) イタリア語

A. 'Ordino una spesa.' B. 'OK.'

I book a grocery delivery OK

A. 'Perche abbiamo proprio finito la pasta.'

Because we have really run out the pasta

A. 'I am going to book a grocery delivery.'

B. 'OK.'

A. 'Because we have really run out of pasta.'

(Cristofaro 2016: 400)

機能面においては、日本語の副詞節の非従属化構文の談話機能は、聞き手に何らかの行為要求を表す用法、または聞き手の認識の改変を促す用法を表し、ヘッジ表現とポライトネスなどの対人的機能を果たしている。一方、中国語の副詞節の非従属化構文の談話機能は省略された主節の存否に関わらず、主に談話文脈に大きく関わり (*operate over larger discourse or pragmatic context*, Mithun 2008:107)、談話の背景知識や情報の提供、疑問、応答などの対人的機能を果たしている ((9) と (10) を参照されたい)。本研究で取り上げた中国語の副詞節の非従属化構文は、(9) と (10) の Mithun (2008) が指摘している談話機能を具現化している。

- (9) Autonomous participial sentences are used to provide background information, parenthetical comments off the event line, elaboration, explanation, and evaluation.

(Mithun 2008: 90)

「独立した分詞文は背景情報や、イベントラインから離脱した挿入的なコメント、精緻化、説明、評価を提供するために用いられている。」

- (10) They are also exploited for various social functions by relating comments, questions, responses, and commands to the larger social situation.

(Mithun 2008: 107)

「これら(=これらの独立した分詞文)は、コメント、質問、応答、命令用法をより広い社会的状況に関連付けることによって、さまざまな社会的機能にも利用される。」

例えば、条件節の非従属化構文では談話の文脈に依存した評価が表されている。譲歩節の非従属化構文では話し手はその前の会話内容と一貫した話を、対比または譲歩の意味を保ちながら、それまでの話題と関連付けながら、会話の中に導入していく機能が見られる。理由節の非従属化構文では、理由節とその前後の談話内容との関連性が見られ、談話の首尾一貫性を果たしている用法が明らかになった。これらの非従属化構文はいずれも先行談話との論理的接続関係を表すと同時に、対人的機能を果たしている。このことは中国語における副詞節の非従属化構文の発話解釈と談話機能は、日本語に比べて、より談話文脈に依存していることを示している。

このように、日本語の副詞節の非従属化構文のタイプは主に主節が省略されている省略型であると考えられる。それに対して、中国語の副詞節の非従属化構文のタイプは、主に先行談話の談話文脈と照らし合わせしている拡張型であると考えられる。

7.3 周辺部の談話機能から日中両言語の副詞節の非従属化構文の違い

文構造からみると、日本語と韓国語のような「右方主要部型言語 (RHL)」は接続助詞の位置が「従属節+接続助詞」という形式であり、これに対して、英語、フランス語、中国語のような「左方主要部型言語 (LHL)」は「接続詞+従属節」という形式である。接続助詞や接続詞がどのような従属的マーキングが生起する位置によって異なる談話機能をもたらすかを検証した研究が近年注目されている (Onodera 2011, 小野寺 2014, Beeching & Detges 2014, Yap et al. 2014, Higashiizumi 2015, 柴崎 2015)。これはいわゆる「談話の左と右の周辺部の談話機能 (discourse functions at the left and right periphery)」に関する研究である。本節では「談話の周辺部の談話機能」から日中両言語の副詞節の非従属化構文の言語形式と談話機能の違いを分析する。

7.3.1 談話の左と右の周辺部の談話機能

「談話の左と右の周辺部の談話機能」について、澤田ほか (2017) は次のように述べている(以後、「左の周辺部」を LP、「右の周辺部」を RP と称する)。

- (11) 話しことばは、書きことばとは異なり、発話参加者の相互作用 (interaction) の様相を直接的に反映している。話しことばは発話参加者間の相互作用の中で用いられ、意味が交渉され、命題的意味意外にも、表出的意味 (expressive meaning) や社会的意味も含む場合がある。1 つ 1 つの発話の冒頭(発話頭)と発話の終わり(発話末)で、人は何を意図し、何を言って、何をしているのか。周辺部研究では、そうした問いに迫る。

(澤田ほか 2017: 3)

(12)の LP の *Hey* は「相手の関心を引く」呼びかけをして、RP の *didn't you* は聞き手に対する配慮や関心を帯びながら、*you dropped your wallet* ということを確認しようとしていると澤田ほか (2017) は述べている。

- (12) *Hey, Bill, you dropped your wallet, didn't you?*

(澤田ほか 2017 : 4)

Beeching & Detges (2014) は英語、フランス語、日本語、中国語など、諸言語の周辺部表現を観察し、次の左と右の周辺部の言語形式の使用についての仮説が挙げられている。

表 11. 左と右の周辺部の言語形式の使用についての仮説

左の周辺部 (LP)	右の周辺部 (RP)
対話的 (dialogual)	二者の視点的 (dialogic)
話順を取る / 注意を引く (turn-taking / attention-getting)	話順を (譲り、次の話順を) 生み出す / 終結を標示する (turn-yielding / end-marking)
前の談話につなげる (link to previous discourse)	後続の談話を予測する (anticipation of forthcoming discourse)
返答を標示する (response-marking)	返答を促す (response-inviting)
焦点化・話題化・フレーム化 (focalizing / topicalizing / framing)	モーダル化 (modalizing)
主観的 (subjective)	間主観的 (intersubjective)

(Beeching & Detges 2014: 11, Table 1.4 に基づく、澤田ほか 2017 訳)

LP にある「対話的 (dialogual)」については、二人の対話者がおり、常に前の発話に対して論理的な接続関係 (logical connective role) を示すのに対して、RP にある「二者の視点的 (dialogic)」については話し手と聞き手の相互行為とモーダルの表現 (interpersonal/modal role) が見られる (Beeching & Detges 2014)。例えば、対比的語彙 (contrastive terms) と逆接的語彙 (adversative terms) が RP で用いられる場合、談話の参与者間における様々な相互行為が誘発されると指摘している (i.e. English *though*, *in fact*, Chinese *buguo*, Japanese *dakedo* ; Beeching & Detges 2014: 3)。

7.3.2 発話の周辺部と日中両言語の副詞節の非従属化構文の談話機能

日本語のタラ・レバ節構文、ケド節構文、カラ節構文の接続助詞はいずれも談話の RP の位置に用いられる。これらの非従属化構文は話し手と聞き手との相互行為を示すほか、モーダルの機能を果たすものが多いと指摘されている (大堀 2002, 白川 2009, 堀江・パルデシ 2009)。例えば、ケド節構文とカラ節構文の文末の接続助詞「けど ((13)) 」と「から ((14)) 」は例 (13') と (14') のように終助詞の「よ」または「ぞ」、「ね」に言い換えることが可能である (白

川 2009)。

(13) 慎吾 「福島から、電話なかったか？」

香織 「なかったけど。」

慎吾 「そうか」

(14) 良介 「ちょっと煙草買うてくるから。」

(13') 香織 「なかったよ。」

(14') 良介 「ちょっと煙草買うてくる{ね／よ}。」

(白川 2008: 168)

白川 (2009: 170) はケド節とカラ節の「言いさし文」は機能的には、終助詞と同様に、聞き手の認識状況を配慮しながら命題を提示する対人的モダリティを担う形式の一つとして位置付けることができる」と指摘している。他方、タラ・レバ節構文については、(15) の「～ほうがいい」という評価のモダリティを表す形式は、(15') のタラ・レバ節構文に言い換えることが可能である(白川 2009: 171)。

(15) 傘を持って行ったほうがいいよ。雨が降りそうだから。

(15') 傘を持って{行ったら／行けば}。

(白川 2009: 171)

このように、談話の RP に現れている「けど」、「から」、「たら・れば」は Beeching & Detges (2014) が指摘している「モーダル化 (modalizing)」に機能拡張している。それに対して、中国語の副詞節の接続詞の「如果」、「雖然」、「因為」は LP に用いられ、「接続詞+従属節」という形式となっている。4~6 章の考察結果からみると、これらの LP の従属的マーキング (接続詞) は RP にある「けど」、「から」、「たら・れば」と異なる談話機能を果たしたことが明らかになった。例えば、第 5 章の「雖然」節構文は (16) のように、「先行談話に関連した話題を導入する機能」があることを明らかにした。

(16) (大学4年生の体育授業の話)

- 1 A: 下學期可以超修，我大三就可以畢業了。加上，
2 B: 可是，要那麼早畢業好嗎？沒有那麼誇張喔！！
3 A: 沒有啦！！大四是體育必修啊！！
4 B: 對啊！體育必修。
5→ A: 雖然 現在，現在 什麼 法律 又要 規定 變 選修
suīrán いま いま なんか 法律 また 規定する なる 選択科目
6 了 啊？ 大四，
SFP-1 SFP-2(疑問辞) 四年生
7 B: 變選修了喔？
8 A: 快了呀！
9 B: 變選修了喔？
10 A: 對啊！他說大四選修，大，
11 B: 那有沒有學分？
12 A: 有，有學分。

(SINICA)

- 1 A: 来学期は先に(大学4年生の)履修単位を取ることができるから、
そうしたら、3年で卒業できるよ。それに...
2 B: でも、そんな早く卒業するって本当にいいの。それはもってのほかだよ。
3 A: 冗談だよ。4年生の体育授業は必修科目だから。
4 B: そうだよ、体育授業は必修科目だよ。
5→A: っていうか、いま法律か何かでそれを選択科目にする話が
6 あるじゃない?4年生。
7 B: もう選択科目になってる?
8 A: もうすぐだよ。
9 B: もう選択科目になってる?
10 A: そうよ!4年生で選択科目になるって、大(学4年生)
11 B: 単位がある?
12 A: ある、単位がある。

他の言語と対照してみると、韓国語の従属的マーキングの *kuntey* ‘but’ も (16) の「雖然」に類似した用法が挙げられる ((17))。

(17) (写真の話)

- 1 B: ai sacin-un cengmal : : ,
DM photo-TOP really
'Well, the photos, really'
- 2 A: ung:=
yes'
- 3 B: =cey-ka toytolok-i-myen
I:HON-NOM possibly-be-if
- 4 ponay tuli-lkkey-yo : : ceng[mal.
send send:HON-will-POL really
'I will try to send ((them)), really'
- 5→A: [kuntey mwusun sacin-i-ya?
kuntey what photo-be-Q
KUNTEY what photos are ((they))?
- 6 sayngkak-i cal an (h)na hhhhh
thought-NOM well NEG remember: IE
'Can't remember well'
- 7 B: enni ↑ phulinsuthen-eyse ccik-un ke-yo::
sister Princeton-LOC take-MOD thing-POL
'Sister, the ones ((we)) took in Princeton'

(Sohn & Kim 2014: 236)

LP に現れた韓国語の *kuntey* は同様に「話題転換 (topic shift)」の機能を果たしている (Sohn & Kim 2014: 236)。 (17) は女性の A と B、二人は友だちであり、二人は数か月前の旅行の写真を話している。この談話は、B は写真を A に送ることを忘れていたため、A はどんな写真を撮ったかも覚えていないという背景である。1~2 と 4 行目で、B は A に写真を送ることを約束した。5 行目で、A は従属的マーキングの *kuntey* で、先行談話の内容 (1~2 と 4 行目) に関連し

ながら、「それらの写真は何ですか」という異なる話題を出している（同上: 237）。(17) の *kuntay* については *kuntay* の使用は何らかの点で前の(発話)のターンに関連したことを（聞き手に）知らせる同時に、新しい話題に切り替える合図でもある（“*kuntay* is used to signal the turn as being related to the prior turn in some way, but at the same time as being shifted to a new topic.”）と Sohn & Kim (2014) が指摘している。

前掲の (16) の「雖然」節構文 (5 行目) は、接続詞の「雖然」は話し手のターンの始めに用いられ、1~4 目の話題に関連しながら、5 行目以後の新しい話題に切り替えるきっかけとなっている。このように、従属的マーキングの *kuntay* と「雖然」はどちらも発話の LP に現れ、「前の談話につなげる」(Beeching & Detges 2014, Sohn & Kim 2014: 237) の機能を果たしている。

次の (18) と (19) の理由節の談話機能の違いから、LP と RP の周辺部の談話機能の違いを伺える。第 6 章の例を再掲すると、(18) は従属的マーキングの「因為」が LP に用いられ、新しい情報の「仮装大会」が導入されている。

(18) (F は週末にあるイベントに参加しなければならない愚痴話をしている)

- 1 M: (4.3) &=laughs 真不知道怎麼同情妳&=laughs (...) [&=laughs]
- 2 F: [對 啊] (..)
- 3 好好 一 個 週末
- 4 M: (..) 還有活動準備時段
- 5 F: (0.7) [對 啊]
- 6 M: [xxxx] (...) 活動
- 7→ F: (..) 因為 我 同 (..) 就 是 我們 有 同事 要 (0.3)
- yīnwèi 1SG 同 助詞 COP 私たち ある 同僚 する
- 8 就 是 要 (0.9) 男扮女裝 (..) 慧如 跟 恥華
- 助詞 COP する 男が女性に仮装する 人名 と 人名
- 9 M: (1.3) 真的喔
- 10 F: (0.3) 對 (..) 然後.....(仮装の話が続いている)

(NCSC: M021)

- 1 M: (4.3) &=laughs どうやってあなたに同情すればいいのか分からない&=laughs (...) [&=laughs]。

- 2 F: [そうだよ。] (..)
 3 せっかくの週末なのに。
 4 M: (..) またイベントの事前準備の時間もあるし。
 5 F: (0.7) [そうだよ。]
 6 M: [xxxx] (...) イベント
 7→ F: (..) 私 (..) 私たちのある同僚が (0.3)
 8 つまり (0.9) 男が女性に仮装するから (..) (人名)と(人名)。
 9 M: (1.3) ほんとう？
 10 F: (0.3) そう (..) それで.....(仮装の話が続いている)

同じく新情報を導入する用法を表す (19) のカラ節は RP に用いられ、新しい話題の「四年生五年生」が言及され、さらに「頑張ってね」という間主観的意味を含んでいると思われる。同じく新情報を導入する用法であるが、(19)は中国語の「因為」節構文に訳すことができないと考えられる。

(19) (合唱コンクールについての話)

- 1 A: 合唱コンクール頑張ったねえ.
 2 B2: うん. 銅賞だった.
 3 A: あっ. 銅賞か.
 4 B2: うん.
 5→ A: でも、まだ三年生だから四年生五年生とあるからな.
 6 B2: うん. だって他のねえ:: 学校はねえ六年生が多いんだよ?
 7 A: うん.

(CallHome: 1041)

それは、(18) の「因為」と (19) の「カラ」はどちらも先行談話に対する論理的因果関係があるが、LP と RP の違いによって、談話機能も異なってくるのである。すなわち、LPにある「因為」節構文は「話題転換」や「会話切り出し」などの談話ストラテジーが行われること (e.g. LP の「話順を取る」機能) に対して、RPにある「カラ節」構文は「因為」で見られない、聞き手への行為要求のニュアンスがある (e.g. RP の「間主観的」機能) ということ

を明らかにした。

次の (20) と (21) の条件節構文はどちらも評価の用法を表している。(20) の中国語の条件節の接続詞の「如果」は LP に現れ、(21) の日本語の「れば」は RP に現れている。

(20) (中国の経済成長についての話。F2 は中国の経済成長がまだ高度成長になっていないと言っている。)

- 1 F1: (...) 沒有 (..) 大陸發展得(...)人家就是 (...)超(...)太快了啦 (0.7)
2 幾年 (...) 才十幾年就 (..) 就全
3 F2: (1.2) 對啦 這 他們 國內 本身(...) su (0.7)現在 跟 十年前
そうだよ その 彼ら 国内 自体 いま と 十年前
4 比 (...) 的話 (..) 那是 (...) 差距 很 大
比べる 条件節マーカー それは 差 かなり 大きい
5 → (..) 那 [如果] (..) 水平的 問題 (...) 國家 跟 國家
じゃ *ríguǒ* レベル的 問題 国 と 国
6 水平的 問題 的話
レベル的 問題 条件節マーカー

(NCSC: M013)

- 1 F1: (...) 違う (..) 中国の経済成長は (...) もうあれだよ (...) すごく
(...) 速すぎるよ (0.7)
2 何年間(かな) (...) 数十年間だけで (..) 全部は
3 F2: (1.2) それはそうだけど、彼らの国内自体(...)su(0.7) いま十年前に
4 比較する (...) と (..) それは (...) かなりの差がある
5→ (..) じゃ、[もし] (..) 経済成長のレベルの問題 (...) 国と国の間の
6 (経済成長)レベルの問題からすると。

(21) (脱臭効果がある便器を買う提案)

- 1 M010: トイレを、に新聞を持って入るっていうのは、(うん)
それだけ時間のかかることをするってことなんだよ。(そうだよ) 空気悪くなるって。(ああ、そういうことなんだ) うん、
そういう * * * あるな。

- 2→ F094: えー、脱臭効果がある便器とか買えば。 (「名大」)

(20) の「如果」節構文は「国と国の間の経済成長レベルの問題からすると、あなたが言ってるのは間違っている」というネガティブな評価を表していることである。ここで注目したいのは、(20) の「如果」節構文のネガティブな評価は先行談話の文脈と照らし合わせなければ、「形式・意味の両面にわたって不完全な文」(白川 2009:73)ということになる。それに対して、(21) のレバ節構文は先行談話の文脈に関わらず、ポジティブな評価の意味を表すことが可能である。

また、LP と RP の談話機能の違いは、LP の「如果」節構文と RP の「レバ」節構文の談話機能の違いによって体现されている。例えば、LP に用いられた「如果」節構文は先行文脈に依存しているため、「前の談話につなげる」(Beeching & Detges 2014) という特徴が見られる。一方、RP に用いられた「レバ」節構文は先行文脈に依存しなくても、「間主観的」(同上) 機能に機能拡張することが可能である特徴を示している。具体的に、(20) と (21) の対人的機能について、中国語の条件節構文は先行談話における聞き手の評価に (不) 同意する機能を果たし、日本語の条件節構文は相手に何らかの行為を勧める機能があることを本研究では明らかにした。

(22) のケド節構文と (23) の「雖然」節構文は日中両言語の違いも見られる。(22) と (23) の譲歩節の非従属化構文はどちらも、話し手自身の先行談話を修正する「前の談話につなげる」が見られるが、対人的機能が異なっている。

(22) 根本: お前はゆき…女房[注:洋一の妻]に関心あるのか。

洋一: ……ないな。……だからって不倫したりする気もないけどね。

(白川 2009: 19)

(23) (知り合いの程度の話)

1 B: 我现在还一直跟你很熟哎.

2→ 虽然 好像 我们 好像 四五年 都 没有

suīrán らしい 私達 らしい 四五年 ずっと ない

3 都 没有 很少 讲话 哦.

ずっと ない 少ない しゃべる SFP

4 A: 嗯哼.

(CallFriend: 5855)

- 1 B: 私はいまもまだあなたと親しくしているよ。
- 2→ 四、五年の間に私たちはずっと、ずっと、
- 3 そんなに多く話していないけどね。
- 4 A: うんうん。

RP に用いられるケド節構文は相手の認識の状態の改変を促す用法 (白川 2009) に機能拡張している (e.g. RP の「間主観的」機能)。それに対して、LP に用いられる「雖然」節構文は聞き手の認識の状態の改変を促す「間主観的」機能を獲得していないことを明らかにした。これも (22) のケド節構文が「雖然」節構文に訳せないことを説明している ((22'))。

(22')? 沒有 耶...雖然 即便如此 我 也 沒有 要 出軌 哪。
 ない な *suīrán* だからって 1SG も 否定 する気 不倫 ね

7.4 英語との対比: 条件節の非従属化構文を中心に

副詞節の非従属化の現象からみると、SOV 言語の日本語や、SVO 言語の英語、中国語には異なる傾向が見られる。例えば、条件節の非従属化構文の談話機能について、日本語と英語は語順が異なっているが、どちらも Evans (2007: 380) が指摘した「丁寧な要求 (polite request)」の談話機能が見られる。例えば、(24) は「戻ってくればいい」、(25) は“I wonder if you could give me a couple of 39c stamps. / If you could give me a couple of 39c stamps, I'd be most grateful.”のような文に復元できる。

(24) 日本語

A: ね、戻ってくれば?

B: 親方が心配しているってわかっただけでいい気分。つれ戻しに来るまで戻らないわ。

(白川 2009: 79)

(25) 英語 (if 節の非従属化構文)

If you could give me a couple of 39c stamps please.

a. (I wonder) If you could give me a couple of 39c stamps please.

b. If you could give me a couple of 39c stamps please, (I'd be most grateful).

しかし、(25) の英語の例を、同じく SVO 言語である中国語に訳すと、発話意図が不明な談話になる ((25')). (25') は条件節が先行する談話が存在していない限り、話し手が条件節の後の発話の補完が行われる必要がある ((25'')).

(25') 中国語

? 如果 您 能 給 我 兩張 39 分 的 郵票 的話。

if (1) 2SG-POL 可能 くれる 1SG 二枚 単位 の 切手 if (2)

「2 枚の 39 セントの切手をくれたら。」

(25'') ..., 我 會 很 感激 您 的。

1SG 助動詞 程度副詞 感謝 2SG-POL NMLZ

「…、感謝するよ。」

(作例)

中国語と英語はどちらも SVO 言語と「左方主要部型言語」という特徴を持っているが、なぜ中国語では (25) の *if* 節構文のような表現が見られないであろうか。

まず、主節や述部の省略の制約について、Quirk et al. (1972: 536) は「復元可能性の制約 (Recoverability Condition) 」 (以後、「RC 制約」と称する) を提唱している。Quirk et al. (1972) は「省略」はどんな名詞、述語、目的語が復元されるかということは文脈から判断すれば、はっきり分かると指摘している。これは (28) のような「一つの意味のみに復元可能 (uniquely recoverable) 」なケースの定義である。

(28) Words are ellipted only if they are uniquely recoverable, i.e. there is no doubt about what words are to be supplied ... What is uniquely recoverable depends on the context.

(Quirk et al. 1972: 536)

「語は一通りに復元可能な場合のみ省略されうる。すなわち、どの語が補完されるか疑いの余地がない場合である...何が一通りに復元可能なのかは文脈によって決まる。」

例えば、(20, 再掲) の主節の内容は談話の文脈から判断すると、「国と国の間の経済成長レベルの問題からすると、あなたが言ってるのは間違っている。」というネガティブな意味に復元可能である。

(20) (中国の経済成長についての話。F2 は中国の経済成長がまだ高度成長になっていないと言っている。)

- 1 F1: (...) 沒有 (..) 大陸發展得(...)人家就是 (...)超(...)太快了啦 (0.7)
2 幾年 (...) 才十幾年就 (..) 就全
3 F2: (1.2) 對啦 這 他們 國內 本身(...) su (0.7)現在 跟 十年前
そうだよ その 彼ら 国内 自体 いま と 十年前
4 比 (...) 的話 (..) 那是 (...) 差距 很 大
比べる 条件節マーカー それは 差 かなり 大きい
5 → (..) 那 [如果] (..) 水平的 問題 (...) 國家 跟 國家
じゃ *rúguǒ* レベル的 問題 国 と 国
6 水平的 問題 的話
レベル的 問題 条件節マーカー

(NCSC: M013)

- 1 F1: (...) 違う (..) 中国の経済成長は (...) もうあれだよ (...) すごく
(...) 速すぎるよ (0.7)
2 何年間(かな) (...) 数十年間だけで (..) 全部は
3 F2: (1.2) それはそうだけど、彼らの国内自体(...)su(0.7) いま十年前に
4 比較する (...) と (..) それは (...) かなりの差がある
5→ (..) じゃ、[もし] (..) 経済成長のレベルの問題 (...) 国と国の間の
6 (経済成長)レベルの問題からすると。

一方、前掲した (25') は RC 制約に違反し、文脈から判断することが不可能であり、自然談話が成立しないと考えられる。しかし、(25) は先行する (談話

の) 文脈がなくても、談話が成立している。すなわち、(25) における主節の省略は (28) の RC 制約に反するように思われる。このことから、(25) の英語の条件節の非従属化構文は別のメカニズムがあるため、先行する文脈がなくても成立していると考えざるを得ない。

第3章で述べたように、Evans (2007: 373~374) は文脈に依存せず、限定的な意味を表す「慣習化された省略 (conventionalized ellipsis)」を挙げている。「慣習化された省略」は復元可能な主節の意味が限定されている。例えば、前掲の (25) の要求用法の *if* 節は、その主節はポジティブな意味の表現に限定されている (Evans 2007: 372)。(25) の例について、Evans (2007: 373, 再掲) は「このグループに属する単独の従属節は単一の意味解釈のために、言語的・状況的な文脈を必要としない」と述べている。

主節の発話解釈がポジティブな意味に限定されていることは Bybee (2010) の「チャンク形成 (chunking)」の概念から説明できると考えられる。チャンク形成とは高い頻度で共起する構成素構造 (constituent structure) は個々の構成素の意味が喪失し、統語的・意味的に1つのチャンクとして記憶され、全体で一つの意味を表すように変化する認知的プロセスである (Bybee 2010: 31~37)。なお、構文自体の使用頻度の高低は、文法的として認められるかどうかを決める一つの要因になっている (Bybee 2010)。

Bybee のチャンク形成の説を敷衍すると、英語の要求用法を表す条件節とポジティブな意味を表す主節との組合せは高頻度で行われ、一つのチャンクとして記憶されていると考えられる。このチャンク形成は主節が省略された '*if requests*' 構文における「丁寧な要求」への機能拡張のきっかけとなると考えられる。それに対して、中国語の条件節の非従属化構文は RC 制約を受け、チャンク形成がされておらず、個々の談話の文脈によって異なる発話解釈が生じるという特徴があることがわかった。

7.5 本章のまとめ

本章では日中両言語の従属的マーキングの言語形式と談話機能に関する分析を行った。まず Evans の「省略説」と Mithun の「拡張説」の定義から日中両言語の副詞節の非従属化構文のタイプを考察した。結果としては、日本語の副詞節の非従属化構文は主に主節の省略のメカニズムによって、相手に語用論

的推論を行わせるタイプであると考えられた。それに対して、中国語の副詞節の非従属化構文は統語的レベルにある主節の存否に関与せず、従属節のみの形式で、先行談話の文脈に照らし合わせながら、対人的機能に機能拡張しているタイプであることを明らかにした。

なお、本章では周辺部の形式・談話機能の特徴を敷衍し、日中両言語の従属的マーキングの生起位置とその談話機能を分析した。分析の結果、中国語の副詞節の非従属化構文の従属的マーキング（接続詞）は **LP** に現れ、「前の談話につなげる（(20, 「如果」節; 16, 23, 「雖然」節）」や「話順を取る（(18, 「因為」節）」という用法から、「話の唐突さを緩和する（(16)）」、「相手の評価に不同意する用法（(20)）」や「断言回避（(23)）」などの対人的機能に機能拡張していることがわかった。また、中国語の副詞節の非従属化構文は談話の文脈と照らし合わせなければ、意味・形式的に不完全な発話となることが明らかになった。

一方、日本語の副詞節の非従属化構文においては、その接続助詞は **RP** に用いられ、談話の文脈に依存せずにモーダル化しているほか、「聞き手の認識状態を改変して、何らかの行動を促そうという態度を明示的に示す用法」（白川 2009, 例 22, ケド節構文）、「聞き手に何らかの行為を要求する用法」（例 19, カラ節構文）、「勧め」（例 21, タラ・レバ節構文）の **RP** の「間主観的意味」（Beeching & Detges 2014）に機能拡張していることが明らかになった。

第8章 結論

本章では本研究の議論を総合的にまとめ、非従属化構文に関する研究への示唆、および今後の課題と展望について述べる。

8.1 本研究のまとめ

本研究では日中両言語の「副詞節の非従属化構文」（以後、「副詞節構文」と称する）に着目し、その言語形式と談話機能を考察した。本研究では、中国語の「如果」条件節、「雖然」譲歩節、「因為」理由節の非従属化構文を主な研究対象とし、また、上述の副詞節構文に対応している日本語の「タラ・レバ」条件節、「ケド」譲歩節、「カラ」理由節の非従属化構文との対照研究を行った（上述の日中両言語の非従属化構文は、以後、「「～」節構文」と称する）。

本研究では、中国語の副詞節構文は、話し手が「断言回避（弱い断言）」や「話の唐突さを緩和する」などの対人的機能を果たすために、ある文脈において従属節のみで発話する形式を選択することが明らかになった。また、本研究は周辺部の談話機能から分析し、日中両言語の従属的マーキングの生起位置と談話機能の違いを明らかにした。

まず、第1章では、本研究の研究背景、研究目的、そして研究方法とデータについて述べた。

第2章では本研究の理論的背景について述べた。本研究は非従属化構文の現象について、「認知類型論」の理論的枠組みと「談話分析」の手法で分析することが有用であることを提示した。

第3章は先行研究について述べた。先行研究において、日本語は接続助詞の「たら・れば」、「けど」、「から」が終助詞化し、対人的機能に拡張していることが示されている。一方、中国語の非従属化構文に関する先行研究では、複文の接続詞に関する考察があまり見当たらず、その代わりに、動詞の副詞化、コピュラの省略、或いは副詞の終助詞化で、文法化の観点から分析されている研究が多く見られる。第3章では日本語と中国語の非従属化構文の先行研究を概観し、その問題点を指摘した。

第4章から第6章の観察をまとめると、中国語の副詞節構文は対人的機能を

果たすために、談話の意味の一貫性を維持することが優先であることを明らかにした。そのため、日中両言語の副詞節構文の間主観性の創発も異なっていることがわかった。

第4章の条件節構文では、まず談話の情報構造や談話の意味の一貫性に関わる用法において、中国語の「如果」節構文と日本語の「タラ・レバ」節構文はどちらも「先行談話内容に対する条件提示」という用法があることが判明した。

また、条件節における「評価を表すモーダル機能」から対人的機能への創発において、中国語の「如果」節構文は「弱い断言」で先行談話における相手の評価に(不)同意する対人的機能を果たしている。それに対して、日本語の「タラ・レバ」節構文は先行文脈に依存せず、評価の意味を表すことが可能であり、同時に聞き手に語用論的推論を行わせ、押しつけがましさを軽減させる「勧め」の対人的機能を果たしていることを明らかにした。

第5章の譲歩節構文では、まず談話の情報構造や談話の意味の一貫性に関わる用法において、日中両言語の譲歩節の非従属化構文はどちらも、「先行談話への自己修正／情報補足」などの用法があることがわかった。しかし、日本語のケド節構文は「先行談話への自己修正／情報補足」からさらに「聞き手に何らかの行動を促そうという態度を明示的に示す」という対人的機能に機能拡張していることがわかった。

また、「話の唐突さを緩和する」という対人的機能を果たすために、中国語の「雖然」節構文は先行の談話文脈に関連した新しい話題を相手に提示しなければならないということを明らかにした。一方、同じ「話の唐突さを緩和する」という対人的機能を果たすために、日本語の「ケド」節構文は先行談話との関連性がなくても、新しい話題を導入することが可能であることがわかった。

最後の第6章の理由節構文では、まず談話の情報構造や談話の意味の一貫性に関わる用法において、先行談話に対する「理由の説明／聞き手の意見への同調／質疑応答／聞き手の認識の修正」、「話題展開機能」や「新情報の導入」という用法があることがわかった。しかし、日本語のカラ節構文は「先行談話に対する聞き手の認識の修正」や「新情報の導入」だけでなく、「聞き手に何らかの行為を実行させる」という対人的機能があることが明らかになった。

第4章から第6章の日中両言語には上述のような違いが見られた要因に対して、第7章では日中両言語の副詞節の従属的マーキングの生起位置と談話機

能の違いに関する観点から分析を行った。分析の結果、日本語の副詞節構文は主に主節の省略のメカニズムによって、聞き手に語用論的推論を行わせるタイプであることが判明した。一方、中国語の副詞節構文は、統語的レベルにある主節の存否に関与せず、主に「談話或いは語用論的文脈に大きく関わり」(Mithun 2008: 107)、談話の背景知識や情報の提供、疑問、応答などの機能を果たしているタイプであることを明らかにした。談話の機能について、中国語の副詞節構文は従属節のみの形式で、先行談話の文脈に照らし合わせながら、談話の主観的と間主観性的意味に機能拡張させていることが明らかになった。

また、第7章では周辺部の形式・談話機能の特徴を敷衍し、日中両言語の従属的マーキングの生起位置とその談話機能を分析した。分析の結果、中国語の副詞節の非従属化構文の従属的マーキングは左の周辺部の位置に現れ、「前の談話につなげる（「如果」、「雖然」節）」や「話順を取る（「因為」節構文）」や「前の談話につなげる（「如果」、「雖然」節）」という用法から、「相手の評価に（不）同意する用法（「如果」節構文）」や「断言回避／話の唐突さを緩和する（「雖然」節構文）」などの対人的機能に機能拡張していることがわかった。第7章の考察では、中国語の副詞節の非従属化構文は談話の文脈と照らし合わせなければ、意味・形式的に不完全な発話となることが明らかになった。

一方、日本語の副詞節の非従属化構文については、副詞節の接続助詞は右の周辺部に用いられ、先行の談話文脈に依存せずにモーダル化しているほか、「聞き手の認識状態の改変を促す態度を明示的に示す用法（ケド節構文）」、「聞き手に何らかの行為を要求する用法（カラ節構文）」、「勧め（タラ・レバ節構文）」などの間主観的意味に機能拡張していることが判明した。次節では本研究で得られた研究成果を取り上げて、非従属化構文に関する研究への示唆を述べる。

8.2 非従属化構文に関する研究への示唆

本研究は日本語と中国語の副詞節の非従属化構文の言語形式と談話機能を考察した。分析の結果、談話で用いられている従属節（副詞節）の形式について、従属的マーキングが生起する位置が談話機能に影響を与えていることが明らかになった。このことは非従属化構文の談話機能を分析するために、文構造レベルの分析が不可欠であることを示している。

本研究が分析対象としたの日中両言語の非従属化構文の例文はいずれも自

然談話を収録しているコーパスから抽出した。副詞節の非従属化構文は統語的構造からある談話機能に特化しており、いわゆる創発的文法または新奇表現だと考えられる。また、これらの創発的文法はかならず統語規則に即しているわけではなく、構文内の個々の要素がある談話文脈において特別な談話機能を付与してもおかしくない。言い換えれば、当該の副詞節の非従属化構文は、「ある文脈で定型句的な表現でも他の文脈ではそうならないこともある」(ホッパー2011)。特に中国語の副詞節の非従属化構文は主に談話の意味の一貫性を表す用法であるため、その談話機能を究明するため、個々の談話文脈に分けて、分析する必要があると考えられる。なお、これらの創発的文法を考察するために、対訳コーパスまたは台本のセリフなの「作例データ」から分析することではなく、「自然データ」を分析することによって、より正しくその談話機能を把握することができるだろう。

なお、7.4 で、英語における「(従属節) 条件節+ポジティブな意味を表す主節。」という構文が高頻度に使用されているため、「(従属節) 条件節。＜ポジティブな意味に限定＞」という非従属化構文が生じると観察されている(Evans 2007)。このことは、非従属化構文の談話機能を研究するために、従属節の非従属化構文だけでなく、「従属節+主節」における主節の意味特徴とその生起頻度を分析の射程に入れる必要があることを示唆している。

8.3 今後の課題と展望

本研究は残された課題と展望として以下の2点が挙げられる。まずは文字以外の表現を考察の射程に入れることである。本研究は自然談話の内容を分析している。談話の内容は音声データのトランスクリプション(書き起こし)によって笑い、呼気音、オーバーラップの位置が記載されているが、談話参与者実際の手振りと視線などの非言語行動の特徴が分析に反映されていない。このことから、今後は非言語行動の特徴も分析に反映させることで、日中両言語の非従属化構文をより体系的に分析していく必要がある。

なお、日中両言語の非従属化現象においては、副詞節の非従属化構文以外に、「類似性形式」と「引用形式」の非従属化構文が観察される。例えば、日本語は類似性形式の「みたいな」と引用形式の「という」、「って」の非従属化による文末用法はすでにいくつかの先行研究に挙げられている。実際中国語は文末

用法の類似性形式「～這樣子。(zhèyàngzi、「～みたいな。」)」と引用形式「～説。(～shuo、「～って。」)」も観察されている。本研究は副詞節の非従属化構文をめぐって考察したため、これらの表現は分析対象外とした。このことから「類似性形式」と「引用形式」の非従属化の考察も今後の研究課題に追加したいと思う。

謝辞

名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻応用言語学講座教授の堀江薫先生には主指導教員及び博士論文の主査として博士後期課程の5年半にわたり、終始丁寧なご指導ご鞭撻を賜りました。堀江先生には日本国内外の学会発表から、学会論文集の執筆、本博士論文の完成まで、大変有益なご指導とご助言をいただきました。心より深く感謝いたします。

同講座准教授秋田喜美先生には副指導教員及び博士論文の副査として、また、日本語教育学講座教授の杉村泰先生には博士論文の副査として博士論文の完成までに多くの貴重なご助言をいただき、細部にわたりご指導をいただきました。ここに深謝の意を表します。

また、台湾の東呉大学日本語文学科の陳美玲先生、陳若婷先生につきましては、本博士論文の中国語の使用例に関する有益なコメントをいただき、大変感謝いたします。

また、2016年から2018年までの二年間にわたって、公益財団法人日本台湾交流協会から奨学金を受給しました。同奨学金のおかげで、学業に専念することが可能となりましたことに深く感謝申し上げます。

また、院生の方々、特に楊竹楠氏、山田祐也氏、安藤郁美氏には、大学院での生活に関するアドバイスや本博士論文の日本語の修正など、数多くのご支援とご助言をいただき、感謝いたします。

最後に、台湾で勤務しておりました会社を辞し、日本での留学生活に踏み出した筆者を終始温かく支援してくれた両親に心からの感謝の意を表したいと思います。

参考文献

- 秋廣尚恵 (2016) 「言いさし文における日仏対照研究—Parce que, puisque, から—」『日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究』 2, 67-80.
- Arundale, R. B. (2008) Against (Gricean) intentions at the heart of human interaction. *Intercultural Pragmatics* 5(2), 229-258.
- Austin, J. L. (1975) *How to do things with words* (Vol. 88). Oxford university press.
- Beeching, Kate, and Ulrich Detges (2014) Introduction. In Beeching, Kate, and Ulrich Detges. (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*. Leiden: Brill, 1-23.
- Bybee, J. (2010) *Language, usage and cognition*. Cambridge University Press.
- 陳美玲 (1993) 「日本語の「けど」「が」と中国語の“但是”系の比較研究: 翻訳小説を例として」『言語文化と日本語教育』 6, 47-58.
- 曹英南 (2000) 「「けど」で終わる発話の語用論的研究: 「言い終わり」の「けど」を中心に」『言語文化と日本語教育』 19, 89-100.
- Cristofaro, S. (2016) Routes to insubordination: a cross-linguistic perspective. In N. Evans and H. Watanabe (Eds.) *Insubordination*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 393-422.
- Dascal, M (1979) Conversational relevance. In *Meaning and use*. Dordrecht: Springer, 153-174.
- DeLancey, S. (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33(3), 369-382.
- 遠藤智子 (2012) 「非規範的な文法使用の対人的・認知的動機: 現代中国語会話における節末部我覺得を例に」 山梨正明ほか (編) 『認知言語学論考』 10, 東京: ひつじ書房, 247-297.
- Evans, N. (2007) Insubordination and its uses. In I. Nikolaeva (Ed.) *Finiteness: all over the clause*. Oxford: Oxford University Press, 366-431.
- Evans, N. (2009) Insubordination and the grammaticalisation of interactive presuppositions. In *Methodologies in Determining Morphosyntactic Change Conference*, Museum of Ethnography, Osaka.

- Evans, N., & Watanabe, H. (2016) The dynamics of insubordination: An overview. In N. Evans and H. Watanabe (Eds.) *Insubordination*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 1-38.
- Ghesquière, L., Brems, L., & Van de Velde, F. (2012) Intersubjectivity and intersubjectification: Typology and operationalization. *English Text Construction* 5(1), 128-152.
- Grice, H. P. (1975) Logic and Conversation. In P. Cole, & J. L. Morgan (Eds.) *Syntax and Semantics Vol. 3: Speech Acts*. New York: Academic Press, 41-58.
- Günthner, S. (1996) From subordination to coordination? Verb-second position in German causal and concessive constructions. *Pragmatics* 6(3), 323-356.
- 郭穎俠 (2003) 「“是...的” 構文の焦点と時制の問題」『現代社会文化研究』 27, 215-232.
- Halliday, M. A. (1970) Language structure and language function. *New horizons in linguistics* 1, 140-165.
- 林宅男 (2008) 『談話分析のアプローチ: 理論と実践』 東京: 研究社
- Heine, B., Kaltenböck, G., & Kuteva, T. (2016) On insubordination and cooptation. In N. Evans and H. Watanabe (Eds.) *Insubordination*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 39-63.
- Heritage, J., & Raymond, G. (2005) The terms of agreement: Indexing epistemic authority and subordination in talk-in-interaction. *Social psychology quarterly* 68(1), 15-38.
- Higashiizumi, Y. (2006) *From a Subordinate Clause to an Independent Clause: A history of English because-clause and Japanese kara-clause*. Tokyo: Hitsuji Shobō.
- Higashiizumi, Y. (2015) Periphery of Utterance and (Inter)subjectification in Modern Japanese: A Case Study of Competing Causal Conjunctions and Connective Particles. In Andrew D. M. Smith, Graeme Trousdale and Richard WALTERIT (eds.) *New Directions in Grammaticalization Research*. Amsterdam: John Benjamins, 135-156.
- 平本毅 (2011) 「他者を「わかる」やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』 62(2), 153-171.
- 廣瀬浩三 (2012) 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナ

ル』 7, 1-28.

Hopper, P. J., & Traugott, E. C. (2003) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

ホッパー, P.J.・E.C.トラウゴット (日野資成 訳) (2003)『文法化』東京: 九州大学出版会.

ポール・J・ホッパー (2011) 「創発的文法」マイケル・トマセロ (編) 大堀壽夫・秋田喜美・古賀裕章・山泉実 (訳)『認知・機能言語学: 言語構造への10のアプローチ』東京: 研究社, 227-254.

堀江薫 (2004) 「談話と認知」中村芳久 (編)『認知文法論 II』東京: 大修館書店, 247-278.

堀江薫・プラシャント・パルデシ (2009)『言語のタイポロジー: 認知類型論のアプローチ』(Vol. 5), 東京: 研究社.

黄成穩 (1990)『複句』北京: 人民教育出版社.

江藍生 (2004) 「跨層非短語結構 “的話” 的詞彙化」『中國語文』5, 387-400.

Kato, S. (2013) Insubordination types in Japanese—What facilitates them?—. *Asian African Languages and Linguistics* 8, 11-30.

加藤重広 (2014) 「日本語の語用特性と複文の単文化」益岡隆志ほか (編)『日本語の複文構文』東京: ひつじ書房, 495-520.

久野暲 (1978)『談話の文法』東京: 大修館書店.

クワンチャイ・セークー (1999)「会話における接続詞の「でも」について」『東京外国語大学日本研究教育年報』3, 21-42.

Lauer, S. (2013) Towards a Dynamic Pragmatics. Ph.D. thesis, Stanford University.

李徳泳・吉田章子 (2002) 「会話における「んだ+けど」についての一考察」『世界の日本語教育』12, 223-237.

李曉博 (2008) 「日中両言語における言いさし表現の使用状況についての考察—発話機能とスピーチレベルの観点から」『文体論研究』54, 1-16.

Luke, K. K., Thompson, S. A., & Ono, T. (2012). Turns and increments: A comparative perspective. *Discourse Processes* 49(3-4), 155-162.

呂叔湘 (2004)『呂叔湘文集 (第1巻): 中国文法要略』北京: 商务印书馆.

メイナード・泉子・K (2005) 「会話導入文—話す声が聞こえる類似引用の表現性—」鎌田修ほか (編)『シリーズ言語学と言語教育 第4巻 言語教育の

- 新展開 牧野成一教授古稀記念論集』東京：ひつじ書房, 61-76.
- メイナード・泉子・K (2008) 『マルチジャンル談話論— 間ジャンル性と意味の創造』東京：くろしお出版.
- Mithun, M. (2008) The extension of dependency beyond the sentence. *Language* 83, 69-119.
- 水谷信子 (1989) 『日本語教育の内容と方法—構文の日英比較を中心に』東京：アルク出版.
- 中村渉・佐々木冠・野瀬昌彦 (2015) 『認知日本語学講座 6 認知類型論』東京：くろしお出版.
- Narrog, H. (2012) *Modality, subjectivity, and semantic change: a cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Narrog, H. (2016) Insubordination in Japanese diachronically. In N. Evans and H. Watanabe (Eds.) *Insubordination*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 247-279.
- Narrog, H. (2017) Three types of subjectivity, three types of intersubjectivity, their dynamicization and a synthesis. Van O., D., Ghesquière, L. & Hubert C. (eds) *Aspects of Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins, 19-46.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法第 6 巻：複文』東京：くろしお出版.
- 野田尚史 (2007) 「時間の経過から生まれる破格文」串田秀也ほか (編) 『時間の中の文と発話』東京：ひつじ書房, 1-33.
- Ohori, T. (1995) Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology. In: Masayoshi Shibatani & Sandra A. Thompson (Eds.), *Essays in Semantics and Pragmatics in Honor of Charles J. Fillmore*. Amsterdam: John Benjamins, 201-218.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京：東京大学出版会.
- Onodera, N. (2011) The Grammaticalization of Discourse Markers. In Heiko Narrog and Bernd Heine (eds.) *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press, 614-624.
- 小野寺典子 (2014) 「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」金水敏ほか (編) 『歴史語用論の世界』東京：ひつじ書房, 3-27.

- 小野寺典子 (2017) 「語用論的調節・文法化・構文化の起る周辺部—「こと」の発達を例に」小野寺典子 (編)『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』東京: ひつじ書房, 99-117.
- Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shaped. In M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, 57-101.
- Quirk, R. et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Rhee, S. (2002) From silence to grammar: Grammaticalization of ellipsis in Korean. Paper presented at the New Reflections on Grammaticalization II, University of Amsterdam, The Netherlands, April 3-6, 2002.
- Rhee, S. (2012) Context-induced reinterpretation and (inter)subjectification: The case of grammaticalization of sentence-final particles. *Language Sciences* 34(3), 284-300.
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子 (2017) 「周辺部研究の基礎知識」小野寺典子 (編)『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』東京: ひつじ書房, 3-51.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973) Opening Up Closings. *Semiotica* 8, 289-327.
- Schegloff, E. A. (1982) Discourse as an interactional achievement: Some uses of ‘uh huh’ and other things that come between sentences. In Deborah Tannen (ed.), *Analyzing discourse: Text and talk*. Washington D. C.: Georgetown University Press, 71-93.
- Schegloff, E. A. (2000) Overlapping talk and the organization of turn-taking for conversation. *Language in society* 29(1), 1-63.
- Schegloff, E. A. (2007) *Sequence organization in interaction: A Primer in Conversation Analysis. vol. 1*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. (2001). Discourse markers: Language, meaning, and context. *The handbook of discourse analysis* 1, 54-75.
- Searle, J. R. (1969) *Speech acts: An essay in the philosophy of language* (Vol. 626). Cambridge: Cambridge university press.

- 柴崎礼士郎 (2015) 「文副詞的機能を担う名詞の史的発達と文法化の方向性についてー「事実」と「問題」を中心にー」国立国語研究所国際シンポジウム『文法化：日本語研究と類型論的研究』2015年7月4日
- 白川博之 (2008) 「「言いさし文」の談話機能」串田秀也ほか (編)『「単位」としての文と発話』東京：ひつじ書房, 1-25.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』東京：くろしお出版.
- 史錫堯 (1991) 『中学教学語法』北京：北京出版社.
- Simpson, A. & Wu, Z. (2002) IP-raising, tone sandhi and the creation of particles: Evidence for cyclic spell-out. *Journal of East Asian Linguistics* 11(1), 1-45.
- Sohn, S. O. S., & Kim, S. H. (2014) The Interplay of Discourse and Prosody at the Left and Right Periphery in Korean: An Analysis of kuntey ‘but’. In Beeching, Kate, and Ulrich Detges. (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, Leiden: Brill, 221-249.
- Song, Z., & Tao, H. (2009) A unified account of causal clause sequences in Mandarin Chinese and its implications. *Studies in Language. International Journal sponsored by the Foundation “Foundations of Language”* 33(1), 69-102.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*. Oxford: Basil Blackwell.
- Stenström, A. B. (1998) From sentence to discourse: Cos (because) in teenage talk. *PRAGMATICS AND BEYOND NEW SERIES*, 127-146.
- 鈴木義昭 (1990) 「条件句の日中対照: 「ば」・「たら」・「なら」・「と」をめぐって」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 2, 53-73.
- 高木智世・細田由利・森田笑 (2016) 『会話分析の基礎』東京：ひつじ書房.
- Thomas, J. A. (2014) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Routledge.
- 田昊 (2015) 「中国語における「けど」類で終わる「言いさし」の扱い方」『一橋大学国際教育センター紀要』 6, 95-108.
- 鳥井克之 (2004) 「再論 中国語の複文についてー新しい中国語教学文法の再構築を目指してー」『関西大学外国語教育研究』 8, 75-97.
- Traugott, E. C., & Dasher, R. B. (2002) *Regularity in semantic change*. Cambridge:

Cambridge University Press.

- Traugott, E. C. (2003) From subjectification to intersubjectification. In Raymond Hickey (ed.) *Motives for Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press, 124-139.
- Traugott, E. C. (2010a) Revisiting Subjectification and Intersubjectification. In Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.) *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, Berlin: Mouton De Gruyter, 29-70.
- Traugott, E. C. (2010b) (Inter) subjectivity and (inter) subjectification: A reassessment. *Subjectification, intersubjectification and grammaticalization* 66, 29-74.
- Traugott, E. C. (2014) On the Function of the Epistemic Adverbs Surely and No Doubt at the Left and Right Peripheries of the Clause. In Beeching, Kate, and Ulrich Detges. (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, Leiden: Brill, 72-91.
- Traugott, E. C. (2015) Investigating “periphery” from a functionalist perspective. *Linguistics Vanguard* 1(1), 119-130.
- Traugott, E. C. (2017a) A Constructional Exploration into ‘Clausal Periphery’ and the Pragmatic Markers that Occur There. 小野寺典子 (編)『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』東京: ひつじ書房, 55-73.
- Traugott, E. C. (2017b) ‘Insubordination’ in the light of the Uniformitarian Principle. *English Language & Linguistics* 21(2), 289-310.
- 内田ユリ子・石崎俊・井佐原均 (1989) 「テキストにおける首尾一貫性 (coherence) と文脈表現構造」『全国大会講演論文集 (人工知能及び認知科学)』, 245-246.
- Vallauri, E. L. (2016) Insubordinated conditionals in spoken and non-spoken Italian. In N. Evans and H. Watanabe (Eds.) *insubordination*. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins, 145-170.
- Verstraete, J. C., & D'hertefelt, S. (2012). A typology of complement insubordination in Dutch. *Studies in Language. International Journal sponsored by the Foundation “Foundations of Language”* 36(1), 123-153.
- 若松美記子・細田由利 (2003) 「相互行為・文法・予測可能性—「ていうか」

- の分析を例にして」『語用論研究』5, 31-43.
- 王春輝 (2010) 「汉语条件句标记及其语序类型」『语言科学』9(3), 265-278.
- Wang, J., & Yap, F. H. (2009) A study of negator *bu* (不) as interrogative sentence final particle in Chinese. Paper presented at the 42nd International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Payap University, Chiang Mai, November 2-4.
- Wang, W. (2017) From a conditional marker to a discourse marker: The uses of *dehua* 的话 in natural Mandarin conversation. *Journal of Pragmatics* 117, 119-138.
- Wang, Y. F., Katz, A., & Chen, C. H. (2003) Thinking as saying: *Shuo* ('say') in Taiwan Mandarin conversation and BBS talk. *Language Sciences* 25, 457-488.
- Wang, Y. F. (2006) The information structure of adverbial clauses in Chinese discourse. *Taiwan Journal of Linguistics* 4(1), 49-88.
- 谢晓明・陈琳 (2012) 「“的话” 的话题标记功能及相关问题讨论」『语文研究』4, 31-35.
- 邢福义 (2001) 『汉语复句研究』北京: 商务印书馆.
- 許夏玲 (2004) 「語用論の観点から見た文末表現の使用: 「けど」を例にして」『東京学芸大学紀要. 第二部門. 人文科学』55 卷, 59-65.
- Yap, F. H., Choi, F. P. L., & Cheung, K. S. (2010a) De-lexicalizing *di*: How a Chinese noun has evolved into an attitudinal nominalizer. Verstraete, J. C., & Davidse, K. (Eds.) *Formal Evidence in Grammaticalization Research*. Amsterdam: John Benjamins.
- Yap, F. H., Wang, J., & Lam, C. T. K. (2010b) Clausal integration and the emergence of mitigative and adhortative sentence-final particles in Chinese. *Taiwan journal of linguistics* 8(2), 63-86.
- Yap, F. H., Yang, Y., and Wong, T. S. (2014) On the Development of Sentence Final Particles (and Utterance Tags) in Chinese. In Beeching, Kate, and Ulrich Detges. (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, Leiden: Brill, 179-220.
- 横森大輔 (2013) 『相互行為の中の文法-日本語会話における副詞節構文の創発と秩序』博士論文, 京都大学.
- 米倉よう子 (2013) 「類似性から派生する(間)主観的用法—直喩から引用導入機能への文法化—」山梨正明・吉村公宏・堀江薫・靱山洋介 (編)『認知

日本語学講座第7巻認知歴史言語学』東京：くろしお出版, 137-163.
尹盛熙 (2017) 「話し言葉における省略」『国際学研究』6(1), 87-92.

コーパス出典：

中国語：

- (1) “NCCU Corpus of Spoken Chinese (政治大學國語口語語料庫)”：「NCSC」
- (2) “TalkBank CallFriend corpora”：「CallFriend」
- (3) “TalkBank CallHome phone call corpora”：「CallHome」
- (4) 『中央研究院漢語平衡語料庫』：「SINICA」

日本語：

- (1) 『名大会話コーパス』：「名大」
- (2) 『千葉大学3人会話コーパス』：「chiba」
- (3) “TalkBank CallFriend corpora”：「CallFriend」
- (4) “TalkBank CallHome phone call corpora”：「CallHome」